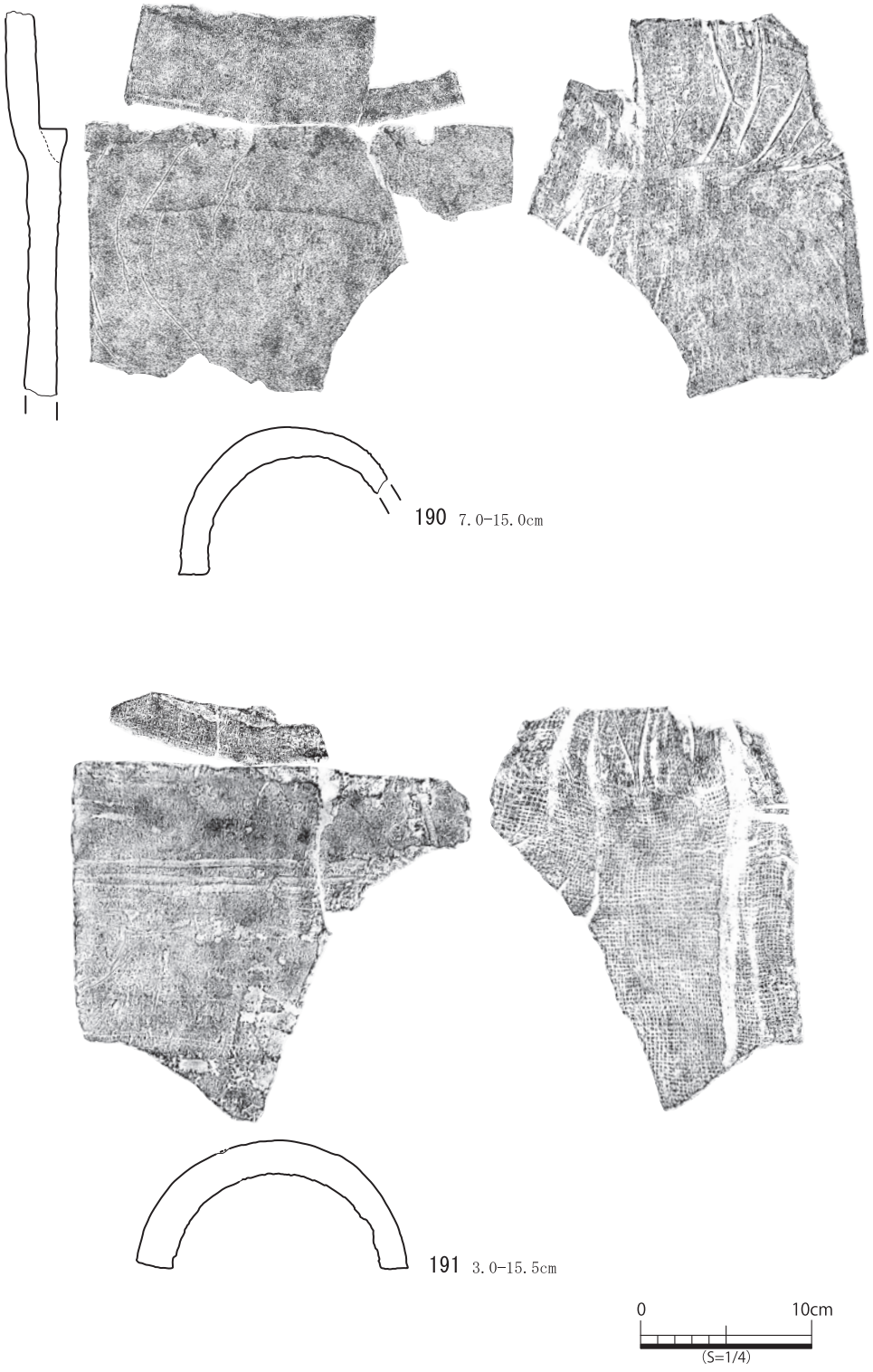
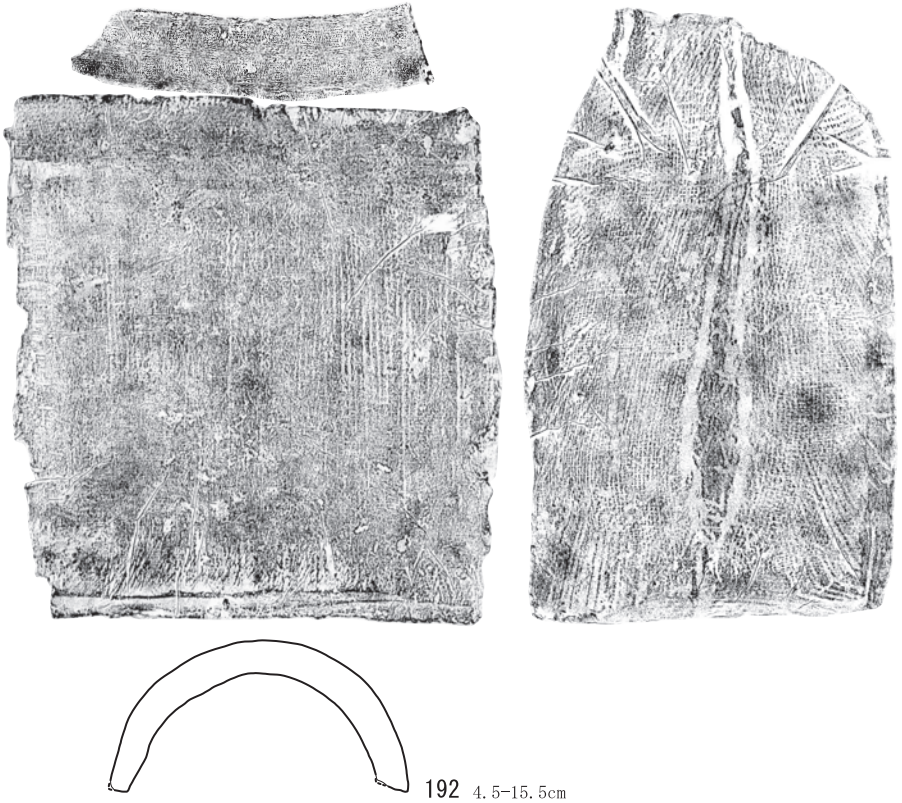
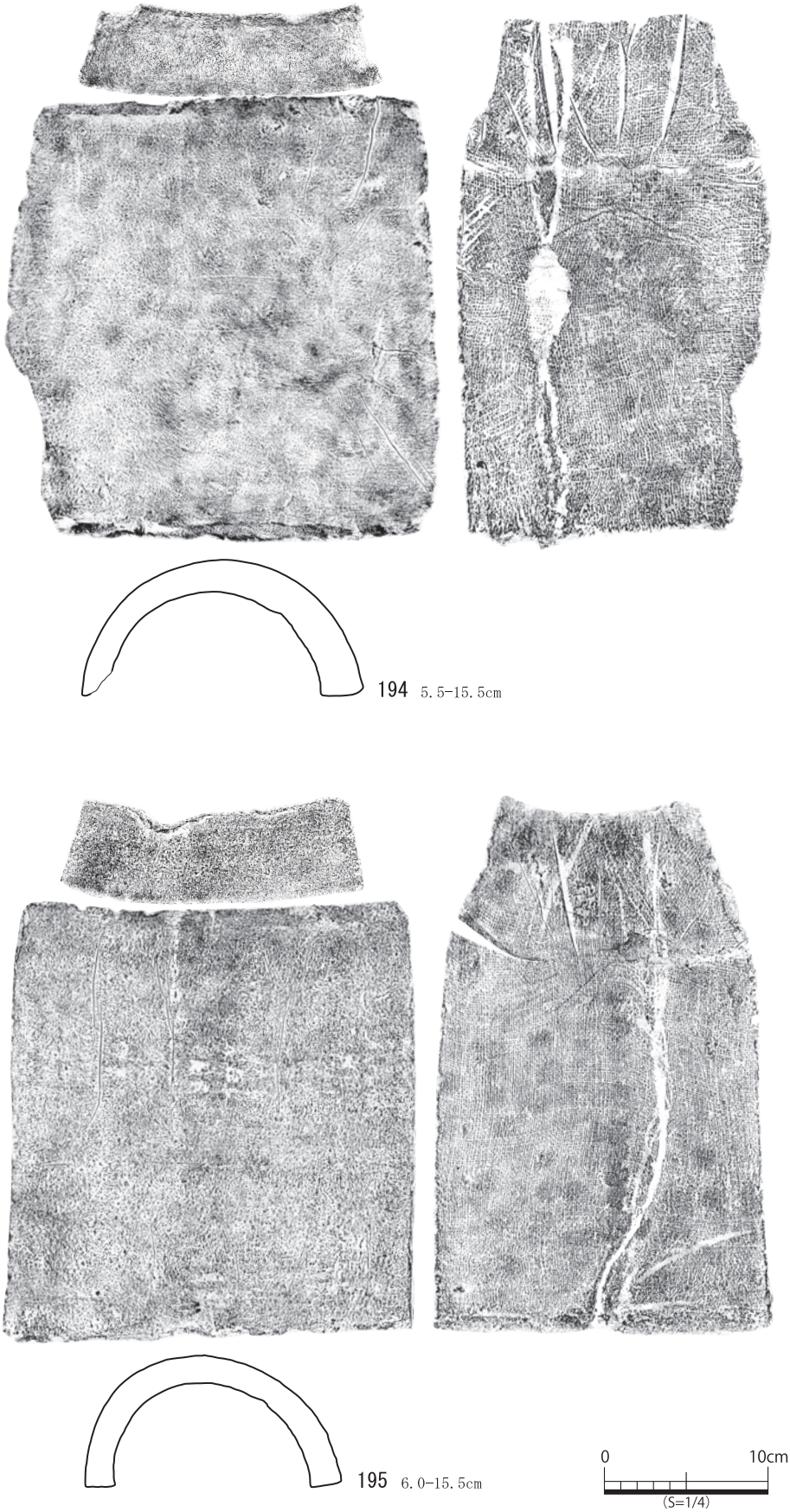


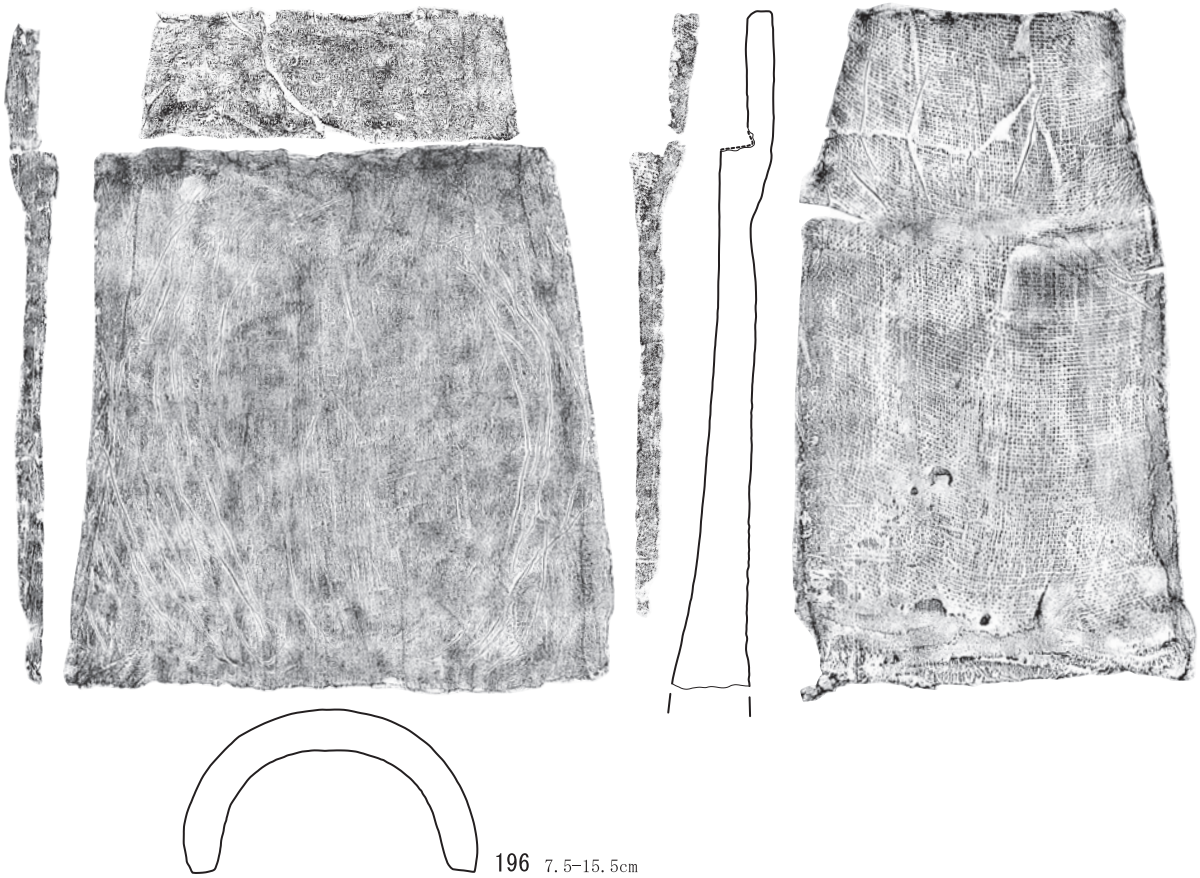
第 67 図　男瓦⑪（S=1/4）

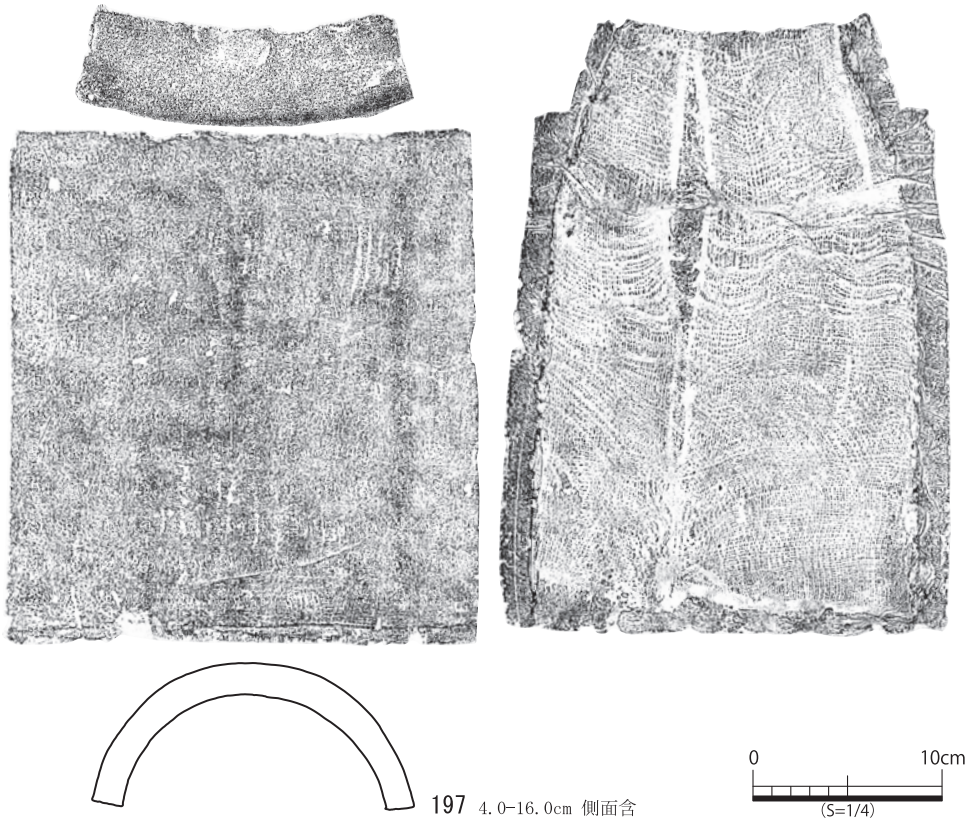


第 68 図 男瓦⑫（S=1/4）

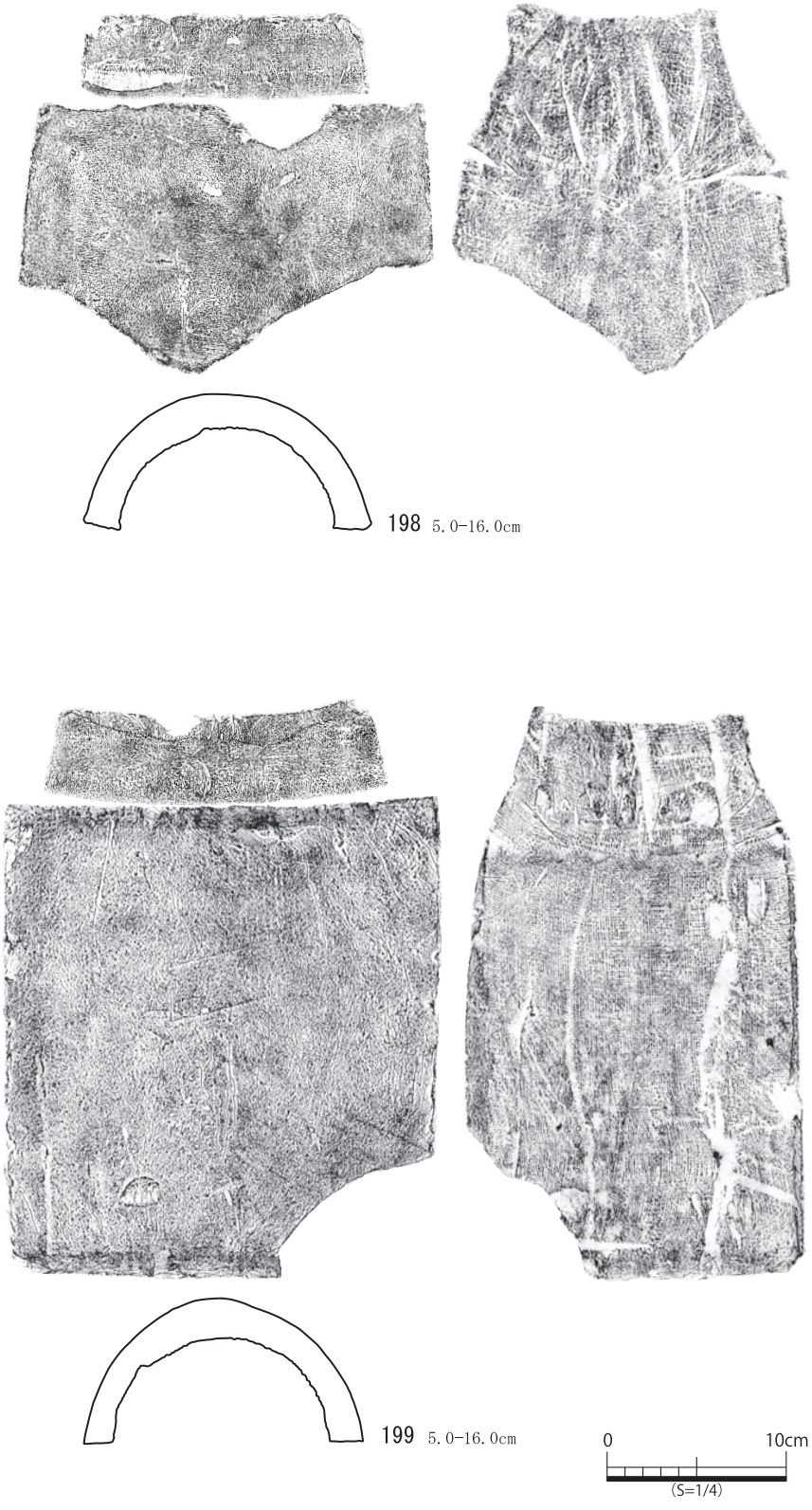


第 69 図 男瓦⑬（S=1/4）

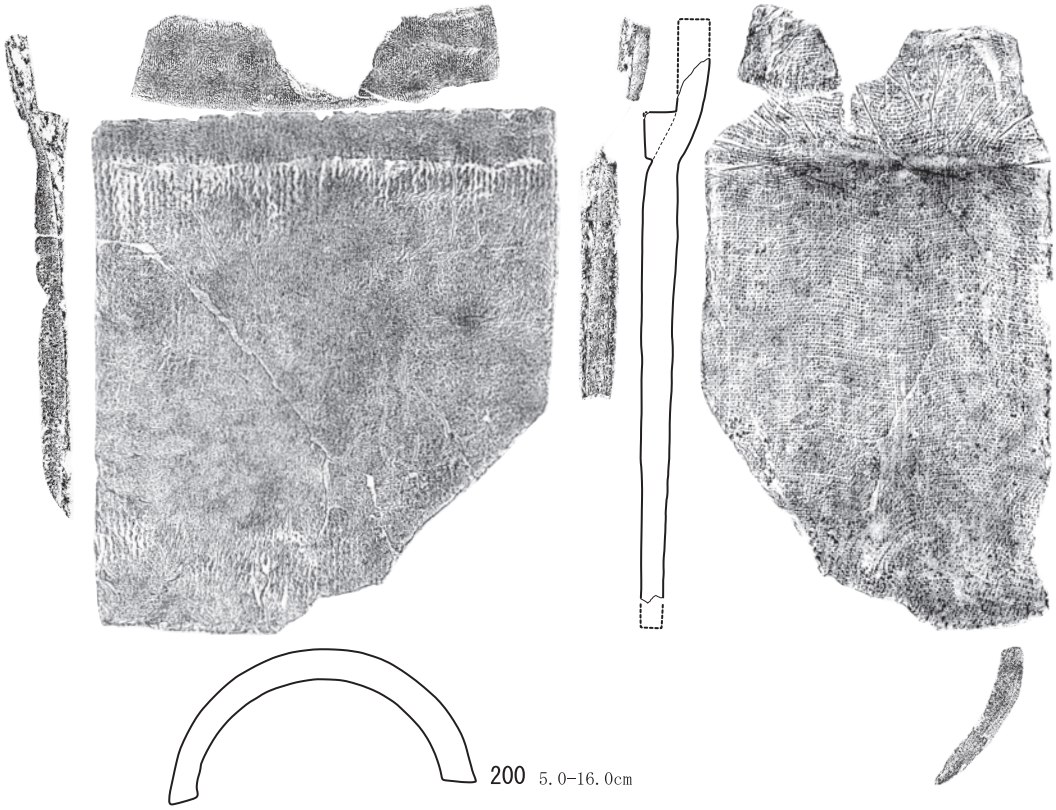


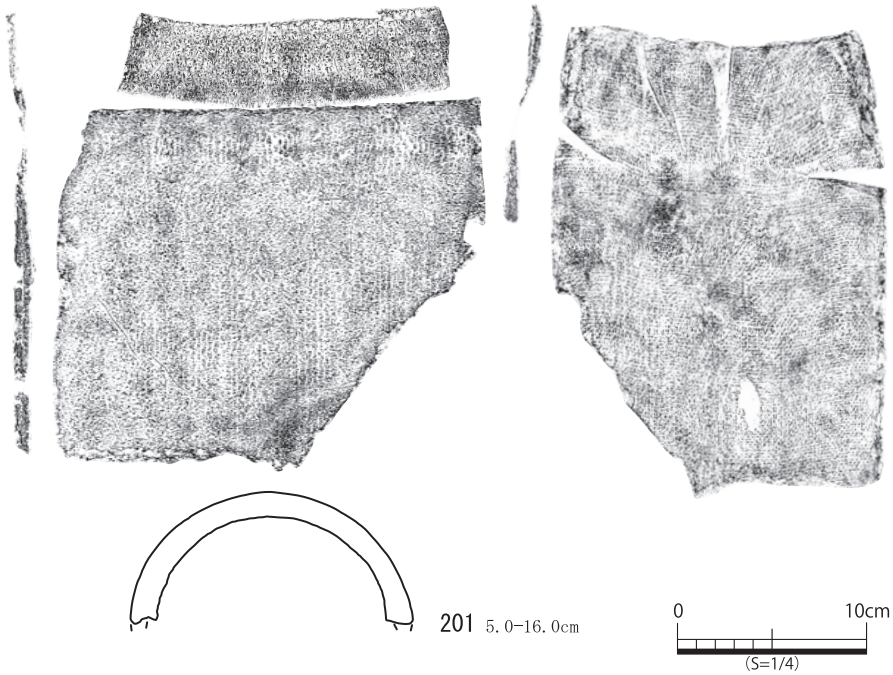


第 70 図 男瓦⑭（S=1/4）

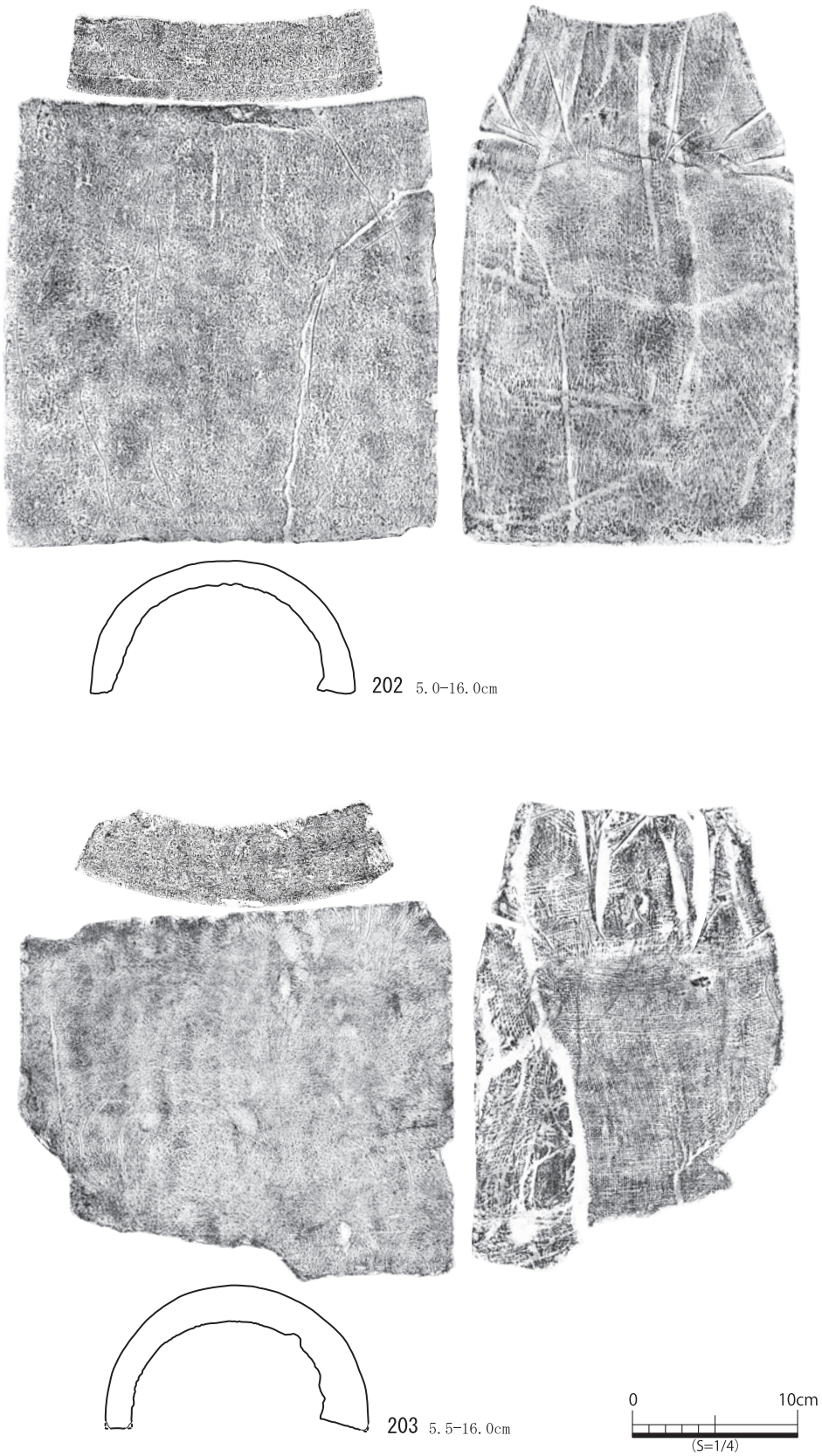


第 71 図 男瓦⑮（S=1/4）

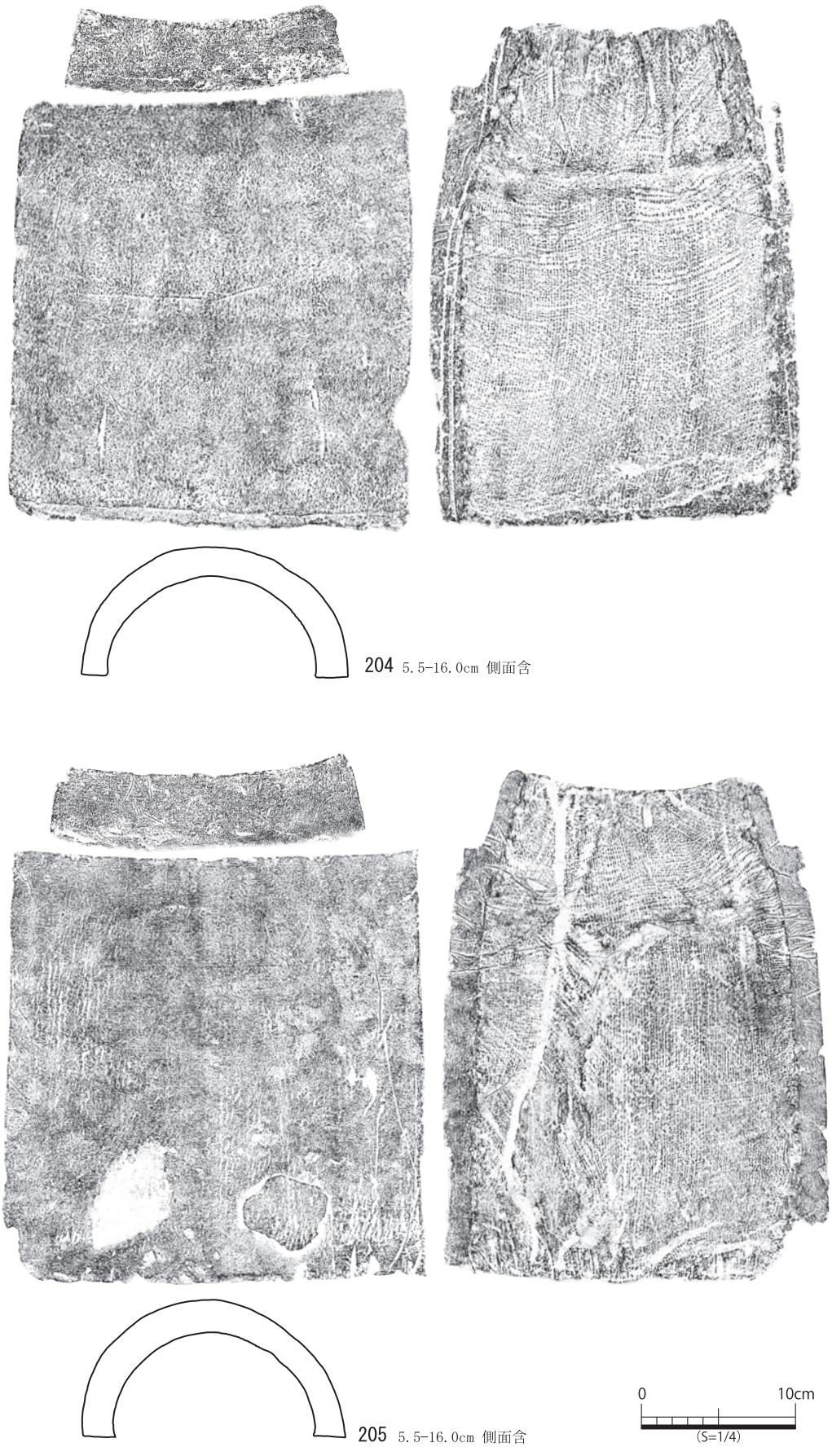




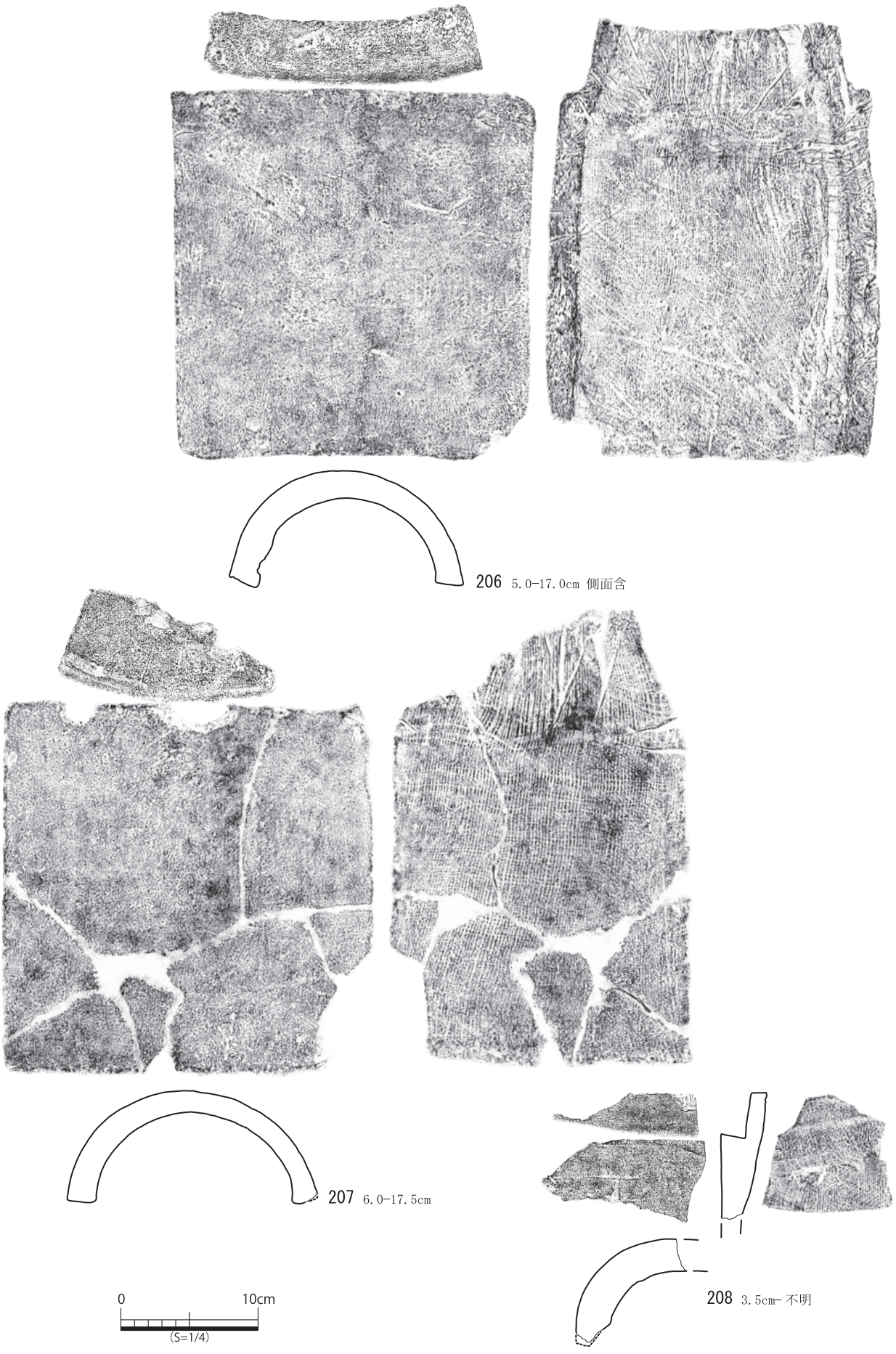
第 72 図 男瓦⑯（S=1/4）



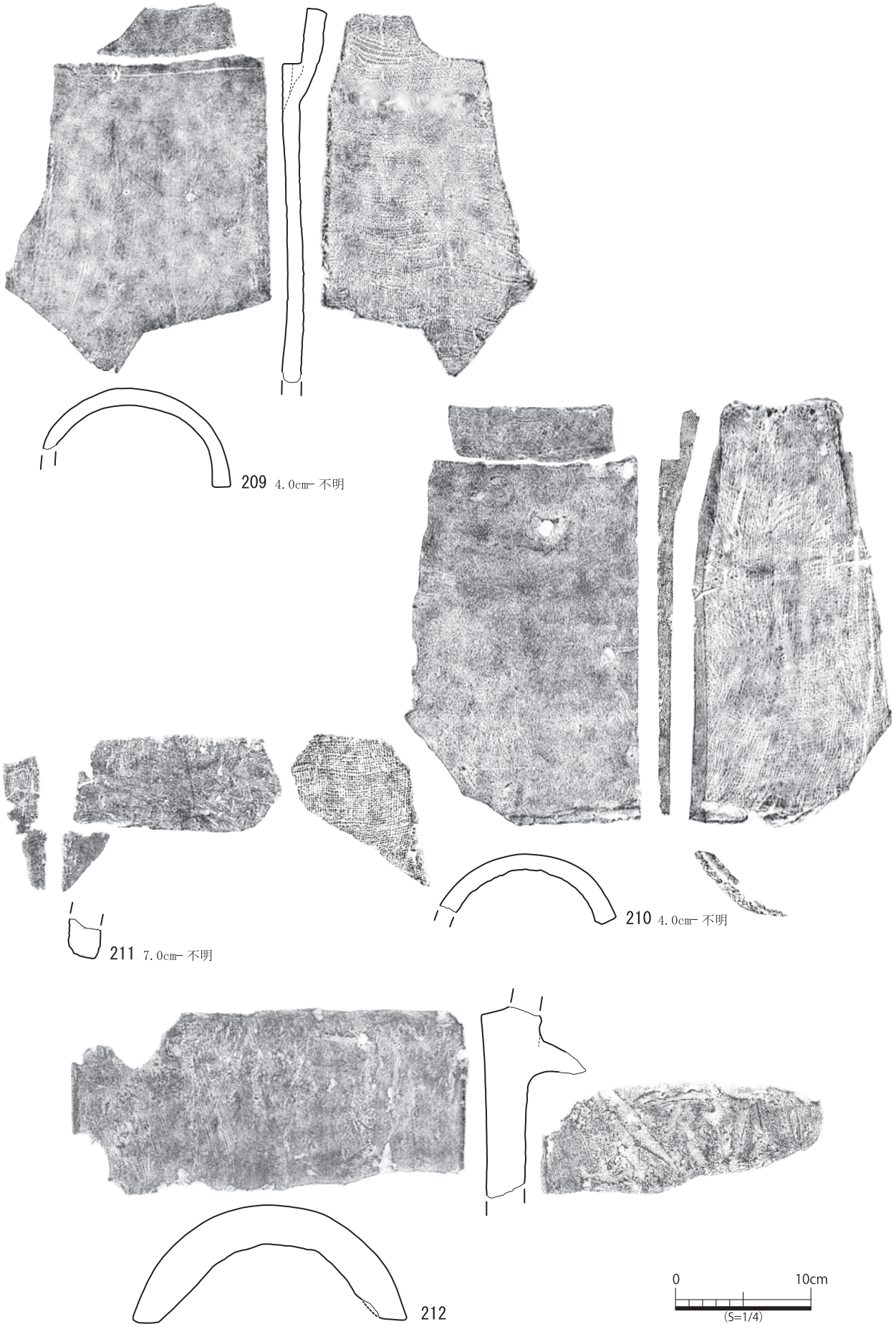
第 73 図 男瓦⑰（S=1/4）



第 74 図 男瓦⑱（S=1/4）

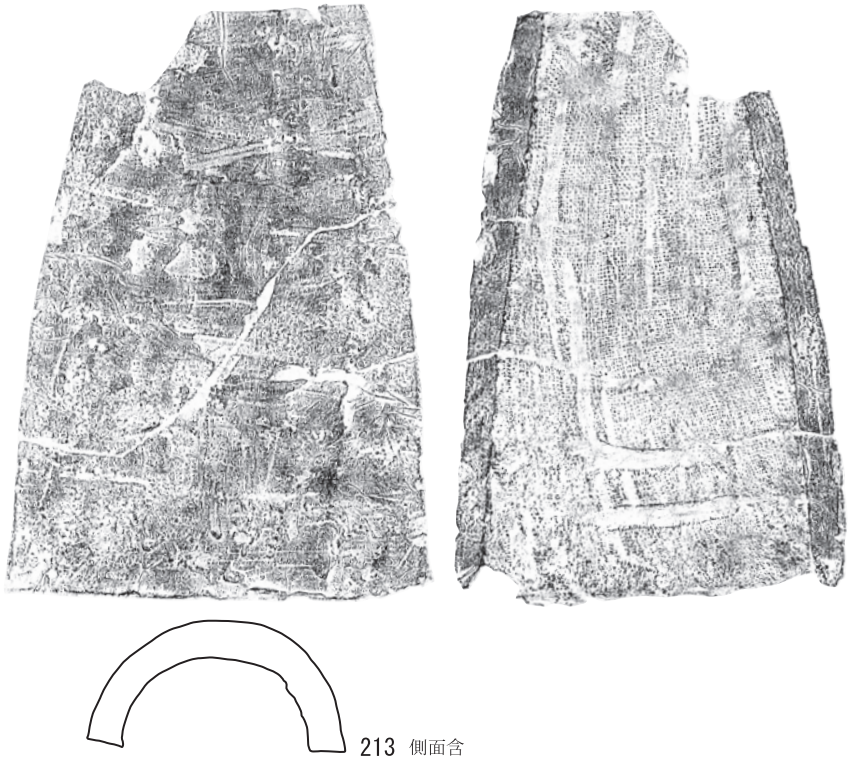


第 75 図 男瓦⑲（S=1/4）

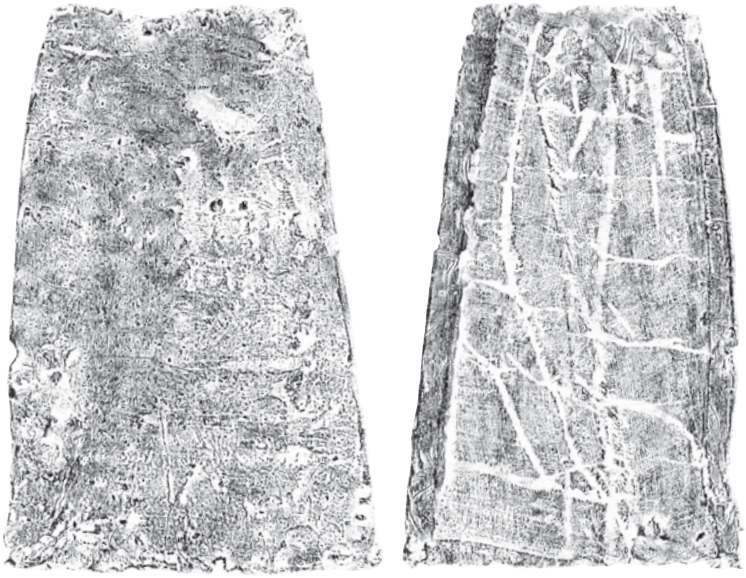


第 76 図 男瓦⑳（S=1/4）

行基Ａ



213　側面含

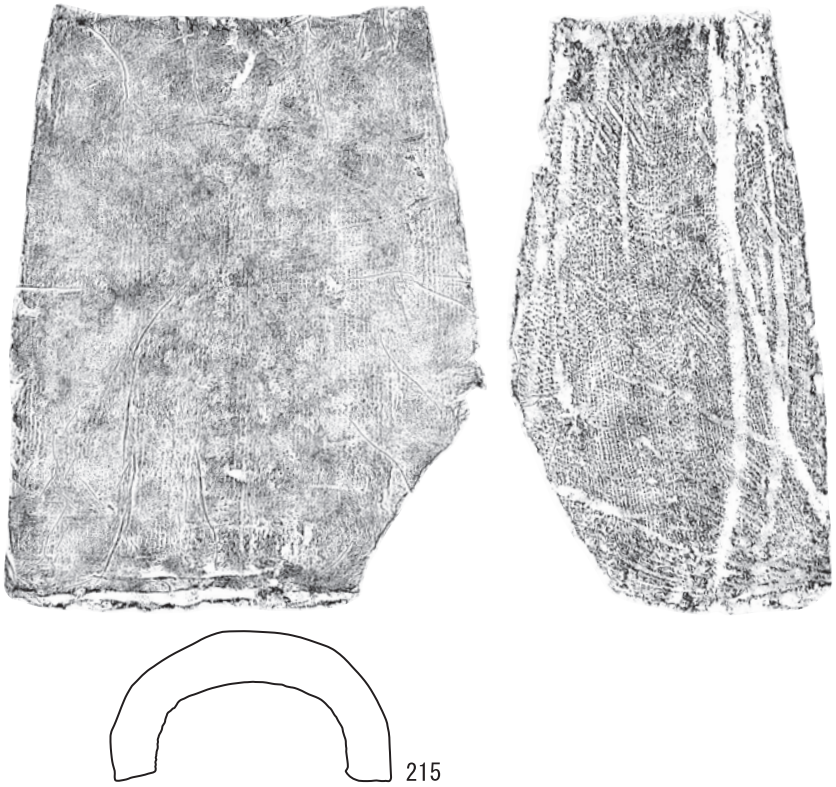


214　側面含

0　10cm
（S=1/4）

第 77 図　行基Ａ（S=1/4）

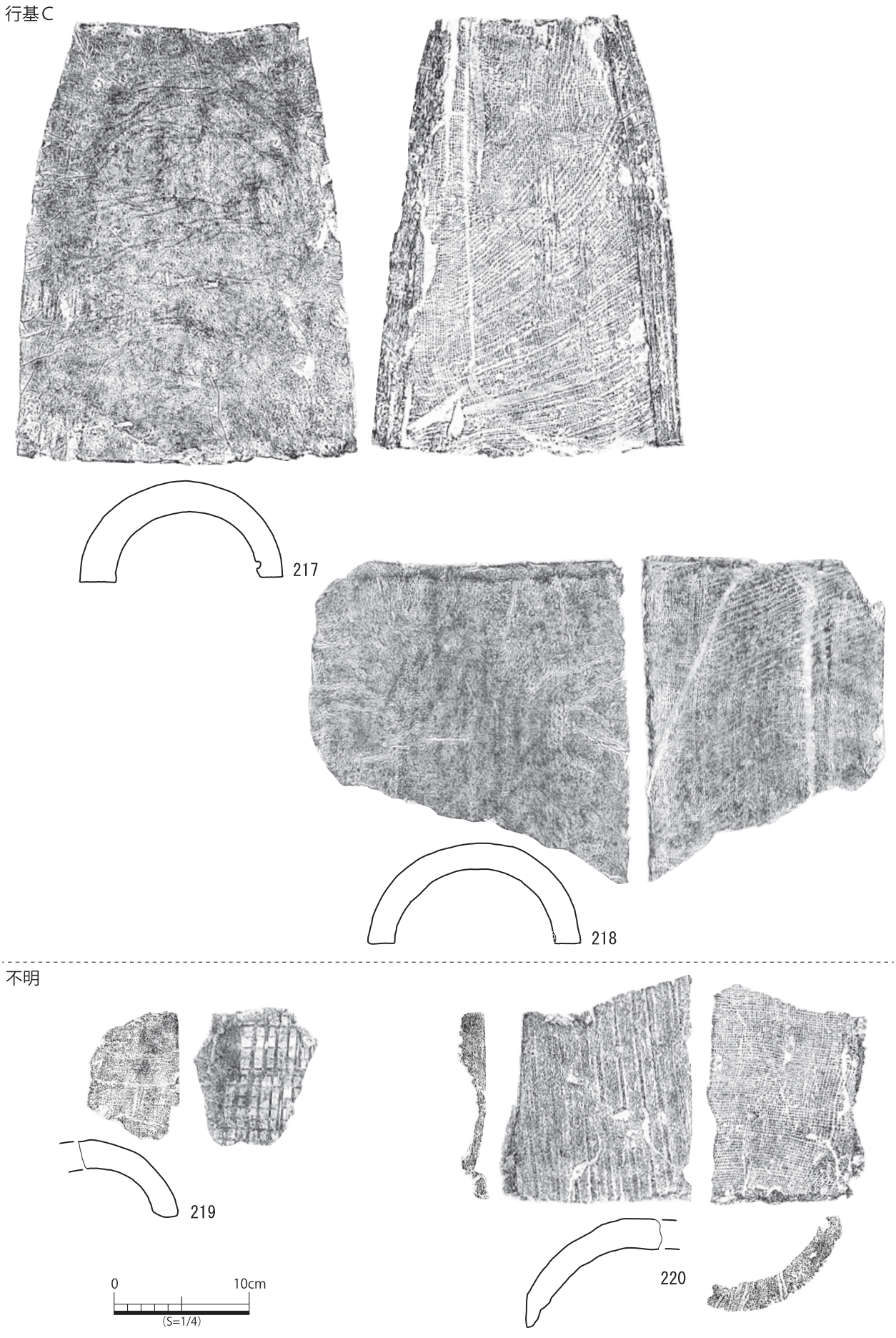
行基B



行基C



第 78 図 行基B・C（S=1/4）



第 79 図　行基C・不明（S=1/4）

第 5 節　女瓦

女瓦は叩き具の種類を中心に分類作業を行ったが、第 1 章第 1 節で既述したように膨大な資料量であるため、凸面を縄目叩きしている資料は 3 辺が残っている等残存率の良いものをピックアップして分類作業を行った。一方、凸面に平行叩きか格子叩きをしているものは縄目叩きの点数より少量であったため全点を対象にして分類を行った。

1）格子叩き

格子叩きの分類は基本的に目視で行い、格子の大きさや形状、格子の深さ等を基準に分類を行った。分類の結果、正格子叩き 15 種類、長格子叩き 6 種類、斜格子叩き 9 種類に分類できた。しかし、格子叩きを全面に叩くものは部分的に 2 度叩きしているものがあり、分類が困難な個体もあることから、今後の分析等で種類が今回提示した型式よりも増加する可能性がある。説明の中で格子のサイズ等を明示するが、叩き具の中で若干のバラツキや叩き具端部の形状が違うもの等があり、参考として捉えていただきたい。破片であるものが多く、全体の法量をとらえられる資料はごくわずかである。また、長格子や斜格子の説明で「辺」の長い方を「縦軸」、「辺」の短い方を「横軸」と呼称して説明したい。格子の枠を格子線と呼称する。

正格子 A（第 80 図 － 221 ～ 225）

格子のサイズは 7㎜四方で彫は他の型式に比べ普通である。格子の断面形状は長方形である。場所によって格子線の幅が異なる。一部分の格子枠が擂鉢状に丸見を帯びる。破片のみであるが、凸面の叩きは全体的に叩いていると推測される。技法は糸切痕と模骨痕が確認できるものがあり、粘土板桶巻作りと考えられる。しかし、粘土紐作りのものも少量であるが確認される（356）。色調は灰色～灰褐色系に分かれ、焼成は硬質なものが多いが、一部に軟質なものがあり、格子部分が擦れているものがある。また、この叩き具に似たものが SKH01C（99）に見られるが、1 点のみであるため断定はできない。

正格子 B（第 80・81 図 － 226 ～ 231）

格子のサイズは 10㎜四方で彫は他の型式に比べ普通である。格子の断面形状は方形である。格子線は乾燥時等につぶれて広がるものもあるが、傾向として全体的に太めである。破片のみであるが、凸面の叩きは全体的に叩いていると推測される。技法は明確に分かるものが少なく、素地は粘土板と粘土紐であるが、多寡の傾向は掴めなかった。色調は灰色～暗灰色で、焼成は硬質である。

正格子 C（第 81 図 － 232 ～ 234）

格子のサイズは 12㎜四方であるが、10㎜程度の大きさや部分的に長格子の形状になり、大きさや形にヴァリエーションがある叩き具である。彫は浅い部分と深い部分が混在する。格子の断面形状は蒲鉾型である。破片のみであるが、凸面の叩きは全体的に叩いていると推測される。技法は糸切痕が見られるものが多く、素地は粘土板と考えられる。凹面の端面側に調整を入れるものが多く、この叩き具を使用した工人の特徴と考えられる。焼成は灰色系で焼成は良好なものが多い。焼成や胎土等は SKM04 等の創建期の鐙瓦に近似する。

正格子 D（第 82 図 － 235 ～ 237）

格子のサイズは 5㎜四方程度であり、彫の深さは普通である。格子の断面形状は方形である。縦軸の格子線が太いことも特徴である。凹面に布目痕があるもの（237）とないもの（235）が見受けられる。色調は暗灰色系で焼成は良～硬質である。色調や焼成は創建期の軒先瓦と似る。点数は少量である。

正格子 E（第 82 図 － 238）

格子のサイズは約 5㎜四方であるが、前後バラツキが見られる。彫の深さは普通である。格子の断面形状は台形である。色調は灰色で焼成は良好である。

正格子 F（第 82 図 － 239）

格子のサイズは約 5㎜四方であるが、格子が細かい部分もある。彫の深さは普通である。格子の断面形状は蒲鉾型である。縦軸が太く、横軸も他の型式に比べかなり細い部分がある。色調は灰色系で焼成は良～良好である。

正格子 G（第 82 図 － 240）

格子サイズは約 7㎜四方である。縦軸は太く隆起しており、横軸は細い。そのため彫の深さは横軸を基準にすると浅めである。残存状況が良いものは側面・端面側に調整を 1 度入れる。糸切痕があるものが多く、

素地は粘土板と考えられる。色調は灰色～にぶい黄橙色で焼成は良である。

正格子H（第 82 図 － 241）

格子サイズは約 7㎜四方で、彫は浅めである。格子の断面形状は台形であるが、格子枠が擂鉢状に丸みを帯びる。色調は灰色系で焼成は良である。正格子Ｂと彫の深さ以外は類似する点が多く、同一の叩き具である可能性もある。

正格子Ⅰ（第 83 図 － 242）

格子サイズは約 10㎜前後で彫の深さは浅めである。格子の断面形状は摩滅しているものが多いため、全体の様相は不明だが、蒲鉾型と推測される。色調は灰白色で焼成は良であるが、基本的に軟質である。

正格子Ｊ（第 83 図 － 243・244）

格子サイズは約 7㎜前後で彫の深さは普通である。格子の断面形状は蒲鉾型である。色調は灰色～にぶい黄橙系で焼成は良である。他と比べ胎土が粗いのが特徴である。

正格子K（第 83 図 － 245）

格子サイズは約 12㎜四方であるが、大小の差が認められる。格子の断面形状は方形である。破片であるが、凸面の叩き具は部分的に叩いたと考えられる。色調は灰色系で焼成は良好なものが多い。

正格子L（第 83・84 図 － 246・247）

代表的なサイズは約 5㎜四方であるが、大型のものや長格子となっている部分がある。格子線は縦軸と横軸に関係なく細太が入り混じった状態であり、叩き具の作り方としては雑である。側面または端面に調整 1 度入れるものが多い。色調は灰色系で焼成は良である。

正格子M（第 84 図 － 248）

格子サイズは約 7㎜四方であるが、若干斜格子状に変形している。彫の深さは普通である。凸面の叩きは部分的に叩いている。凸面は部分的にナデ整形が見られ、凹面は布目痕と糸切痕、模骨痕が見られる。技法は模骨痕がいずれの個体にも見られることから、粘土板桶巻作りと考えられる。色調は灰色系で焼成は良好である。点数は少量である。

正格子N（第 84 図 － 249）

格子サイズは約 7㎜四方であるが、部分的に長格子になり、サイズが小さくなる。彫の深さは深めである。格子の断面形状は縦軸が蒲鉾型で太く、横軸が三角形状で細い。叩き具にキズが見られる。凸面の叩きは部分的に叩かれている。凹面は摩滅しているものがあるが、基本的にナデ整形を行う。色調はにぶい黄橙色系で焼成は良である。叩き方が部分的であることや色調の特徴から斜格子Ｂ に似る。

正格子O（第 84 図 － 250）

格子のサイズは約 7㎜四方で叩き具の末端部分は細い長格子になる。彫の深さは普通である。格子線の断面形状はつぶれた蒲鉾型である。叩き具の縦幅は分からないが、横幅は約7㎝程度である。叩き具の左から3・4 列目の格子枠にキズが多数見られる。凸面の叩きは部分的に叩いている。色調はにぶい橙系で、焼成は良である。

斜格子Ａ（第 84 図 － 251）

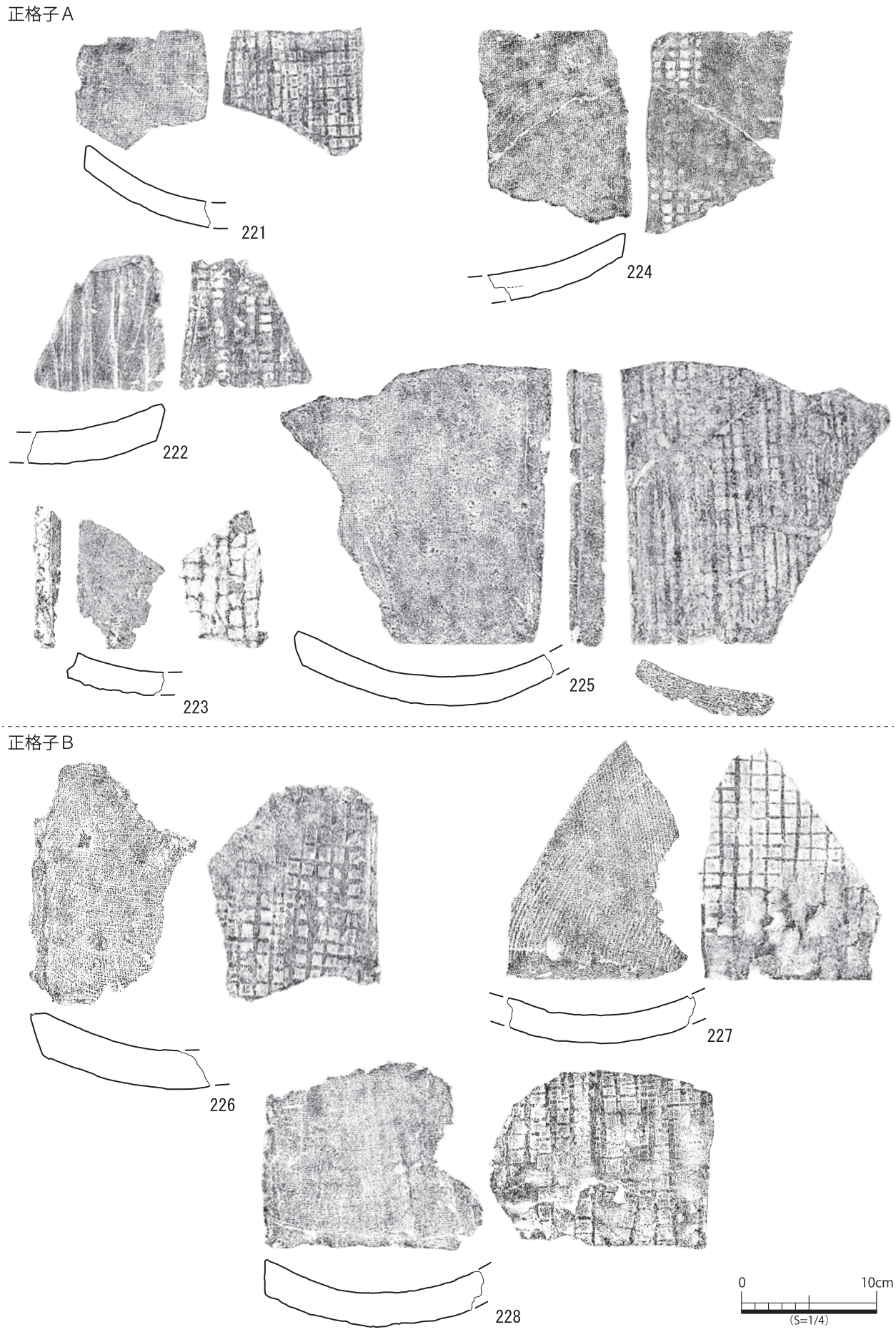
格子のサイズは一辺約 5㎜で彫の深さは浅めである。格子の断面形状は台形である。凸面の叩きは全体的に叩いている。凹面は全てナデ整形を行い、側面側に調整を 1 度入れるのがこの叩き具を使用した工人の特徴である。色調は灰白色系で焼成は良であるが、軟質である。また、弧が他の女瓦に比べ強いのも特徴である。

斜格子Ｂ（第 84・85 図 － 252 ～ 254）

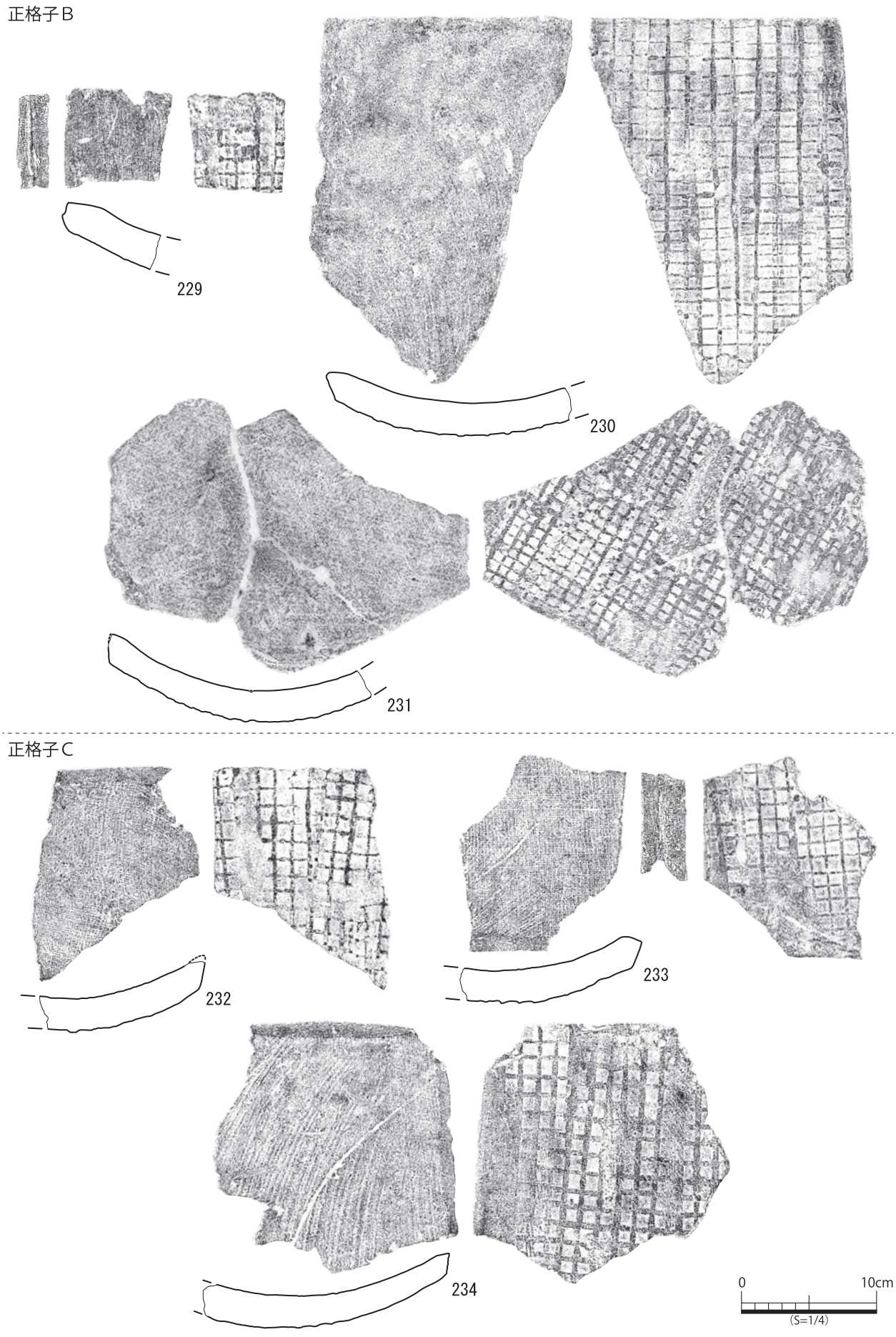
格子のサイズは一辺約 10㎜前後で彫の深さは普通である。格子の断面形状は蒲鉾型であるものが多い。凸面の叩きは部分的に叩いているが、無叩きの部分はほとんどない。叩き具に傷がないもの（254）と傷があるもの（252）があり、前後関係にあるが、焼成や胎土等は同一であるため、大きな時期差はないと考えられる。凹面は布目痕が見られず、ナデ整形した痕跡がないことから直接成型台等に載せ形作ったと考えられる。色調は灰色～浅黄色で焼成は良～軟質のものがある。

斜格子Ｃ（第 85・86 図 － 255 ～ 258）

格子のサイズは一辺約 15㎜前後である。格子の断面形状は乾燥時等でつぶれているものが多いが蒲鉾型と方形が混在したものと考えられる。法量が分かるも

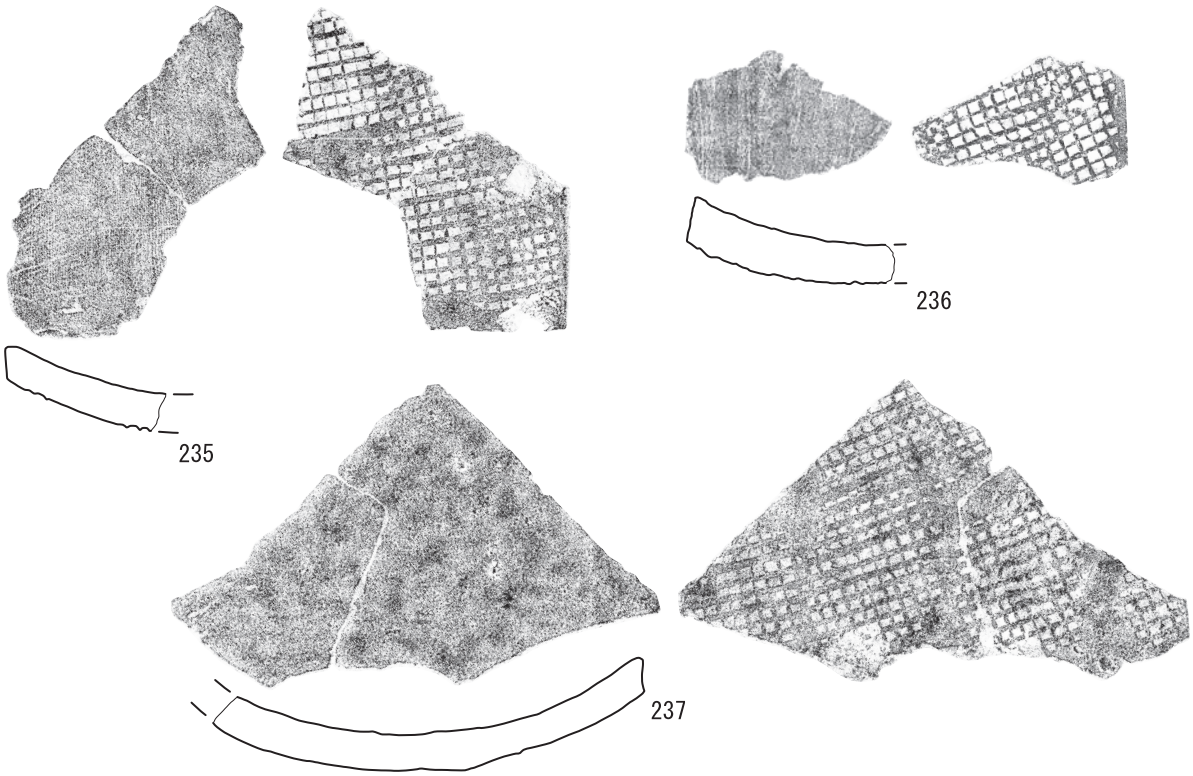


第 80 図　女瓦 正格子 A ・ B （S=1/4）

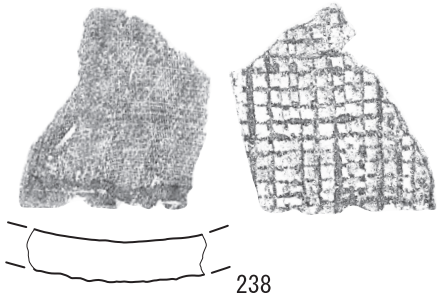


第 81 図　女瓦 正格子 B・C（S=1/4）

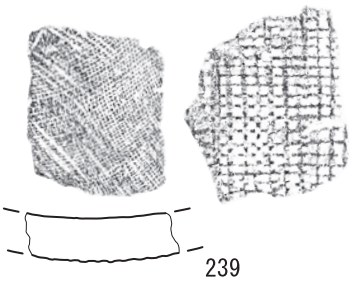
正格子 D



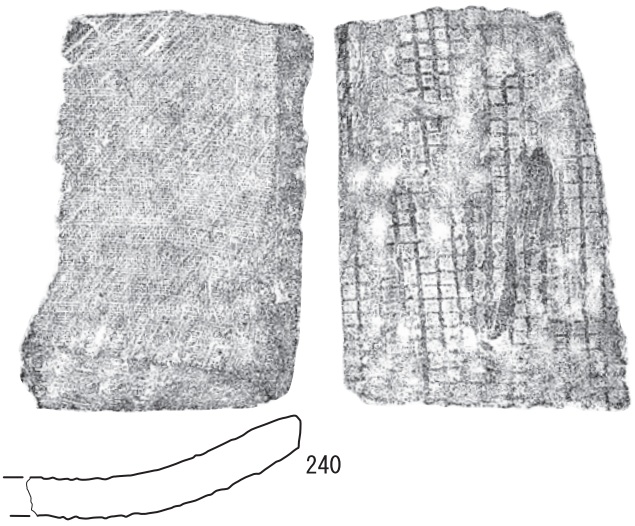
正格子 E



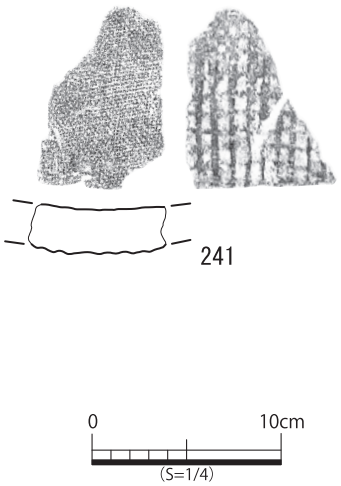
正格子 F



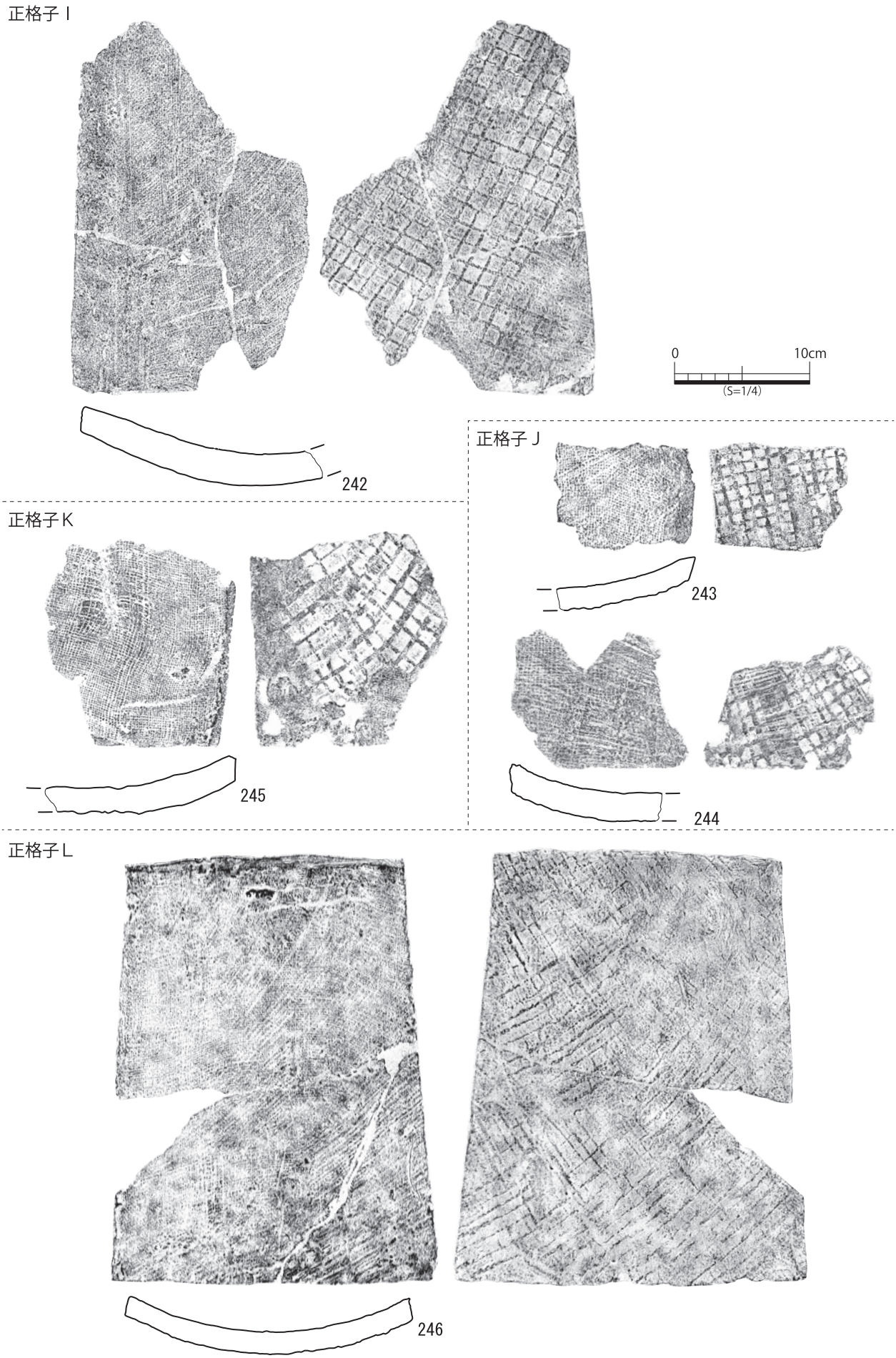
正格子 G



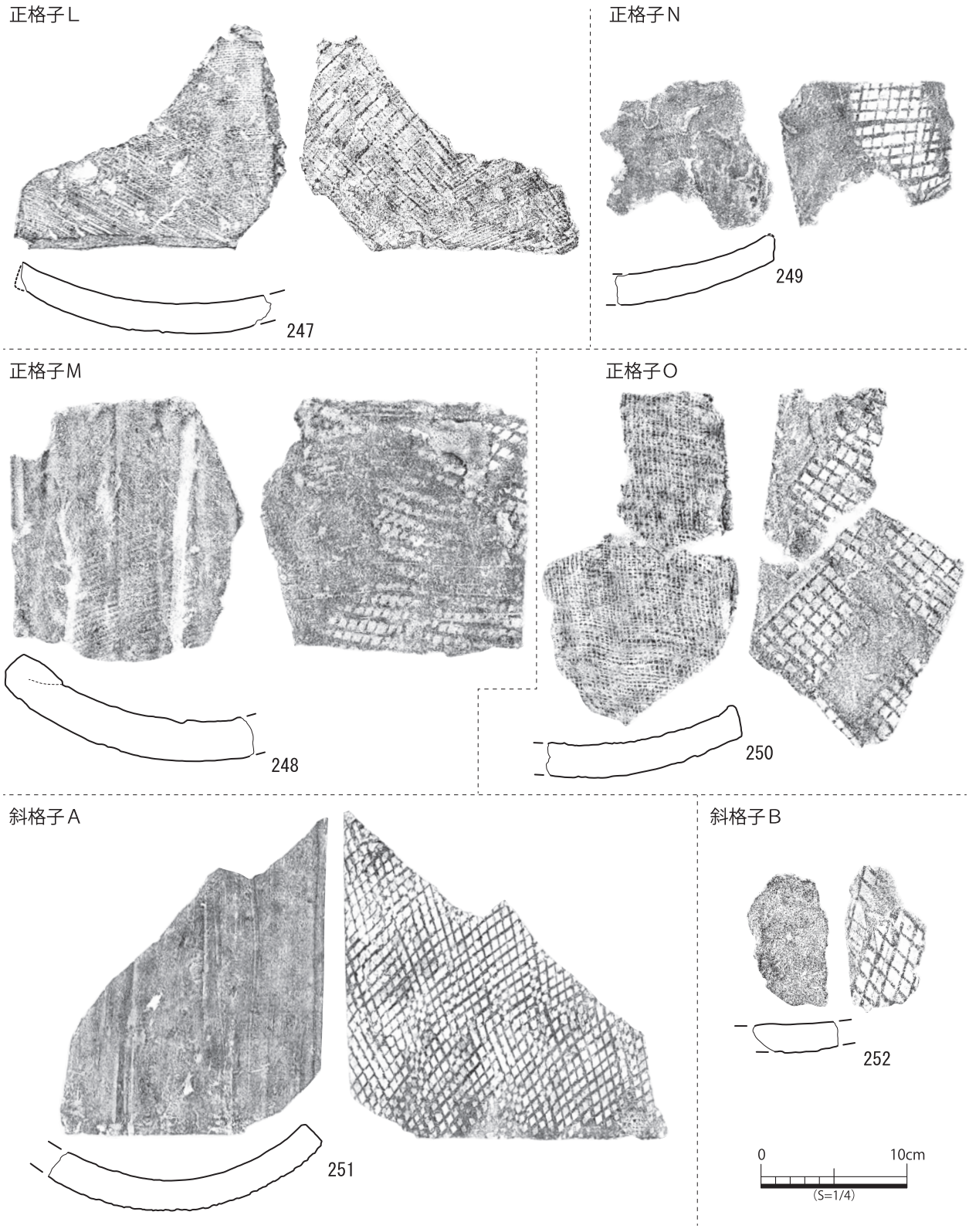
正格子 H



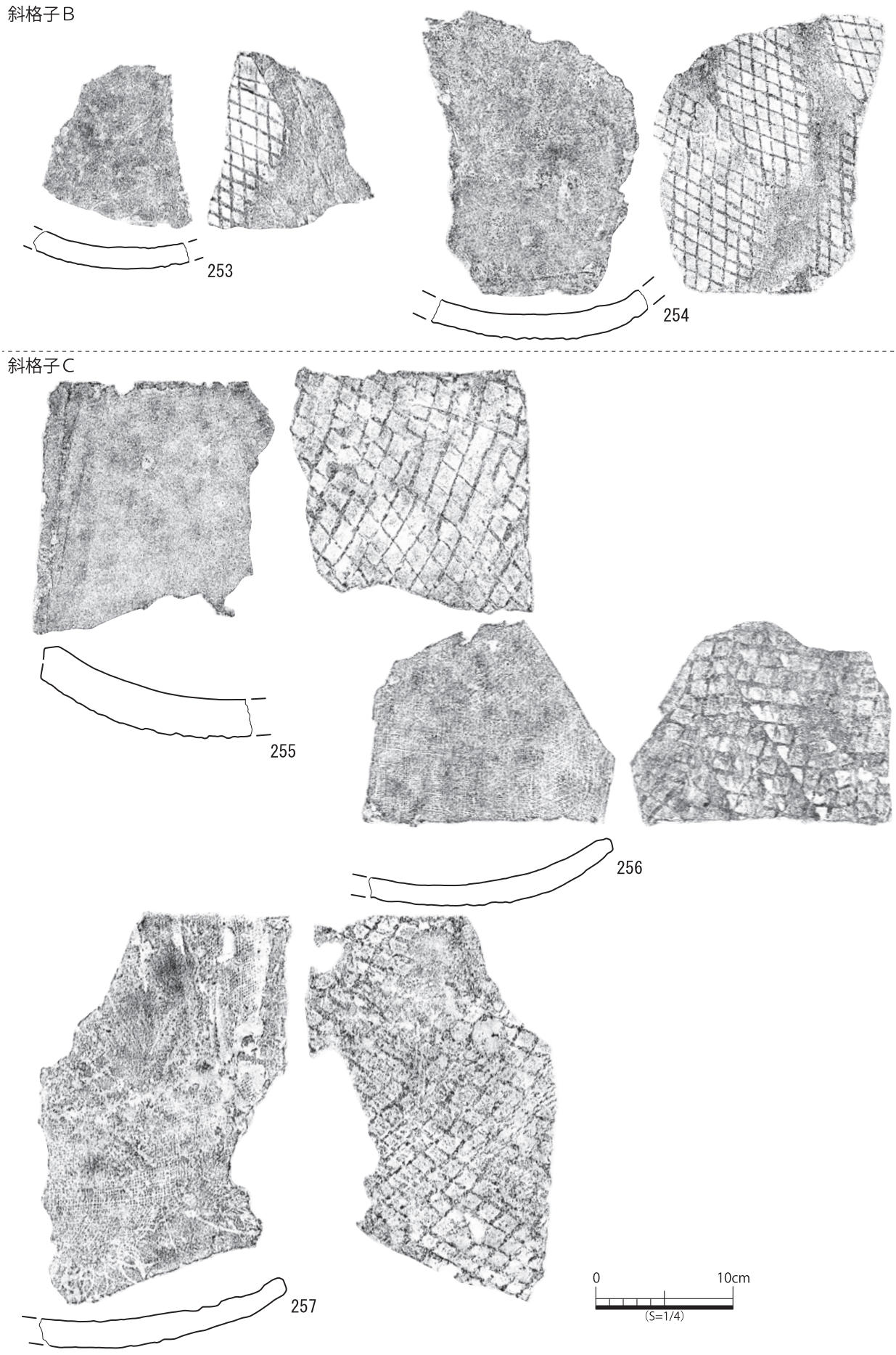
第 82 図　女瓦 正格子 D ～ H（S=1/4）



第 83 図　女瓦 正格子Ⅰ～Ｌ（S=1/4）

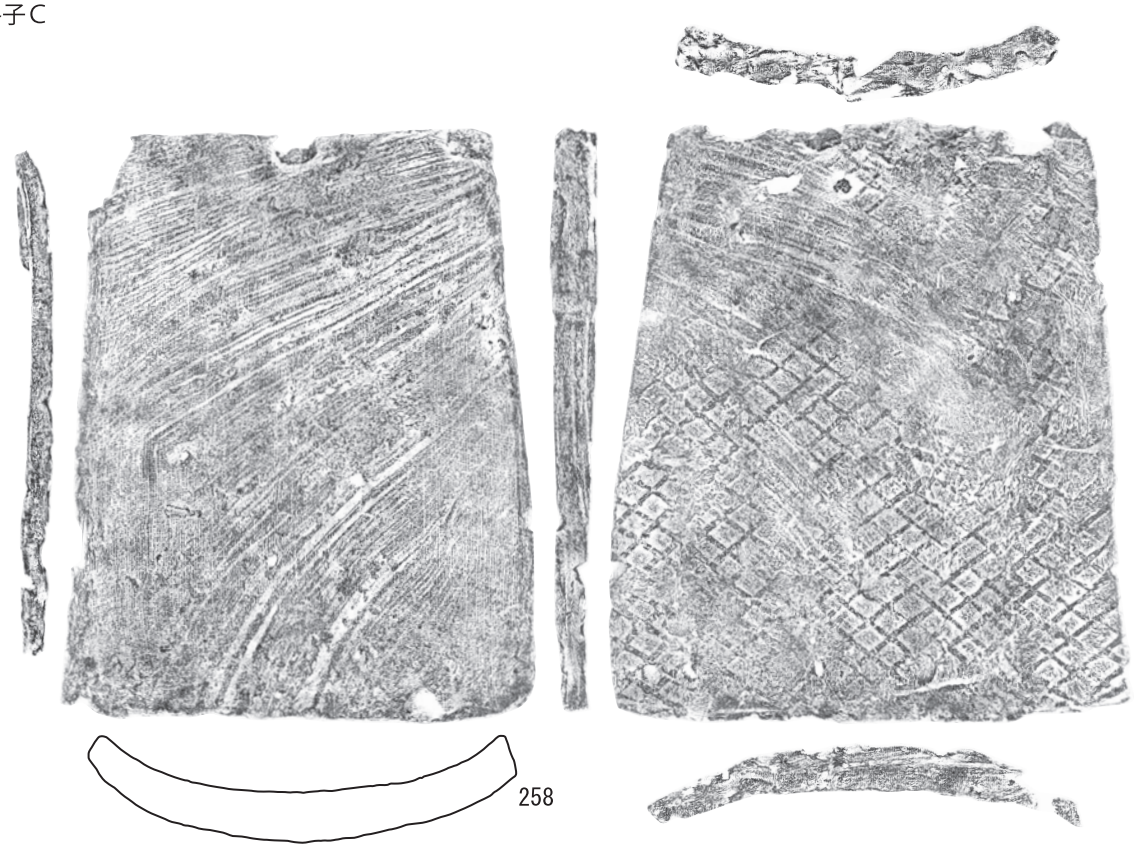


第 84 図 女瓦 正格子Ｌ～Ｏ・斜格子Ａ・Ｂ（S=1/4）

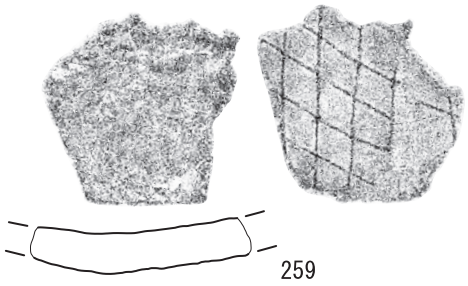


第 85 図　女瓦 斜格子 B・C（S=1/4）

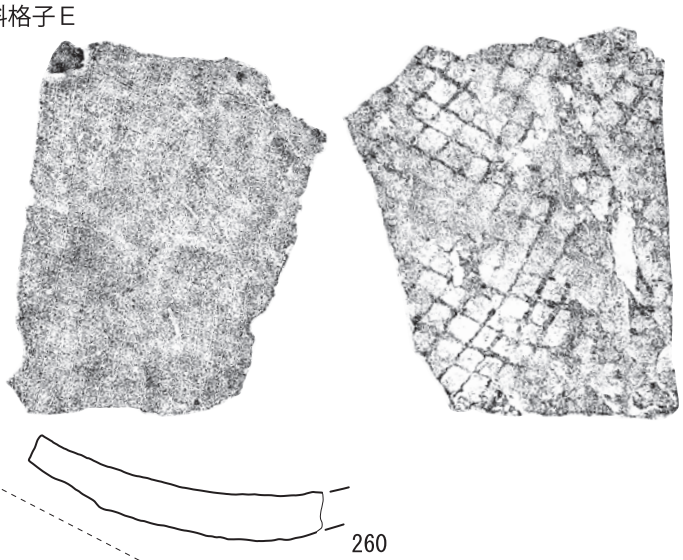
斜格子C



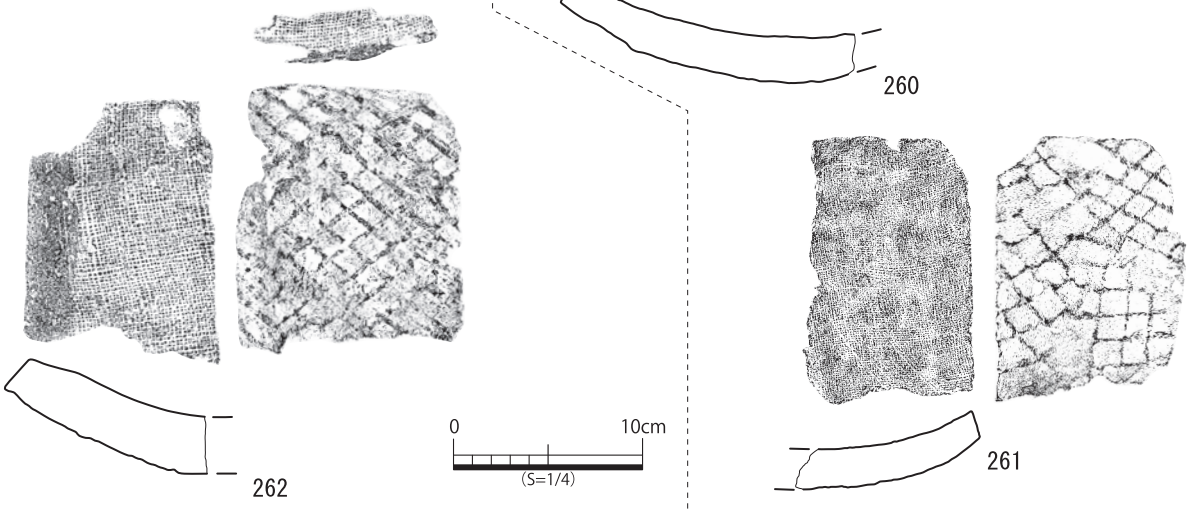
斜格子D



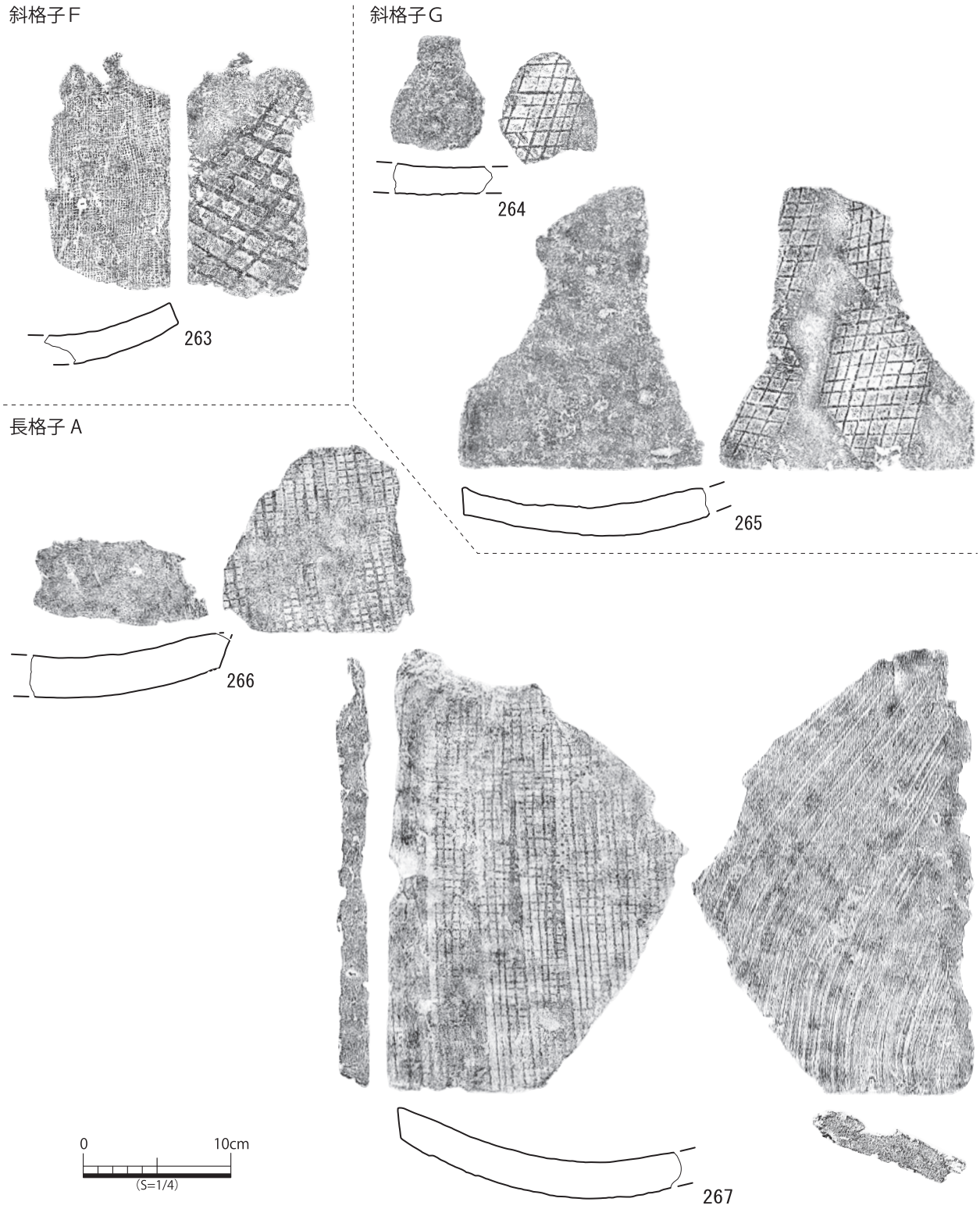
斜格子E



斜格子F

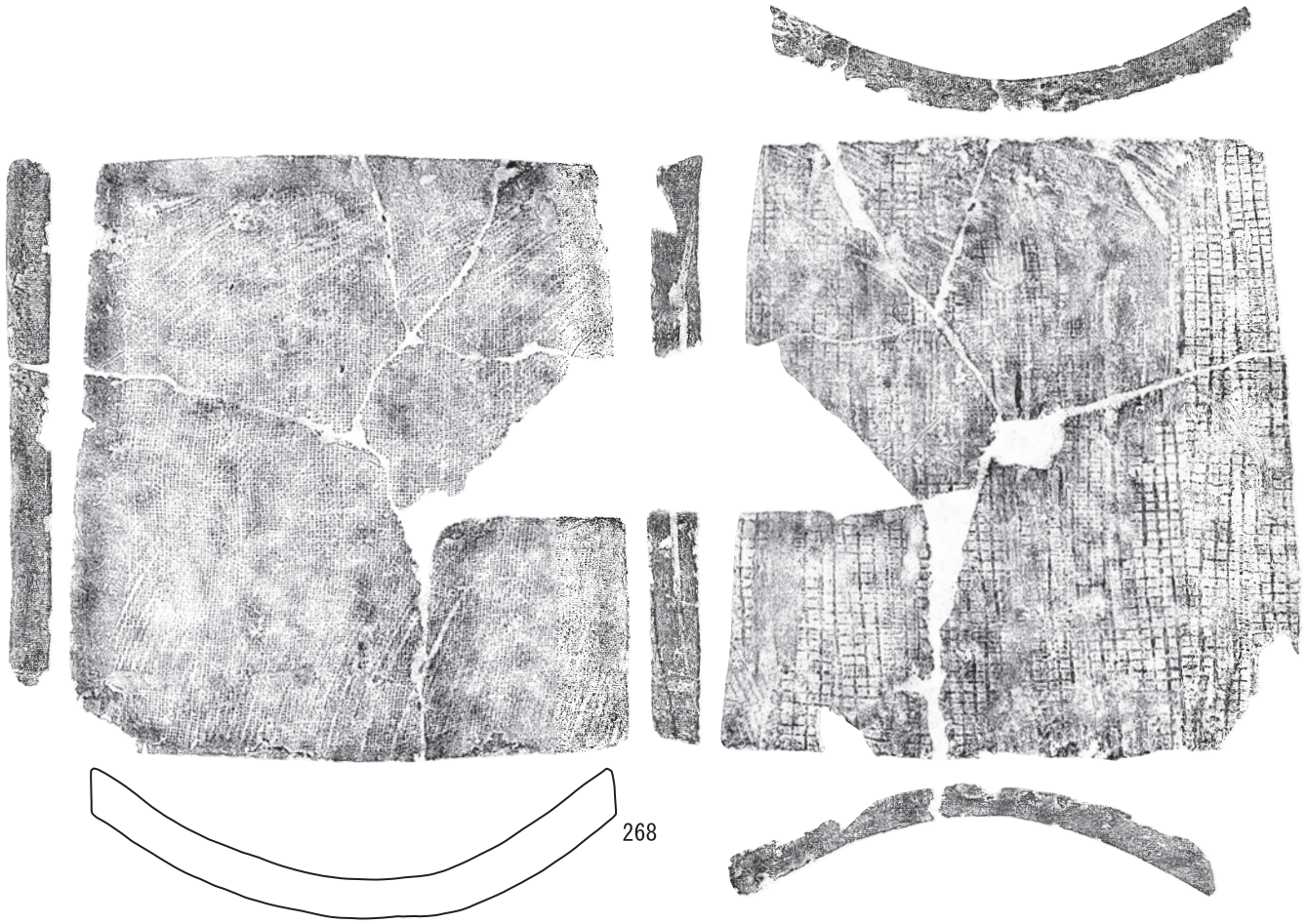


第 86 図　女瓦 斜格子C～F（S=1/4）

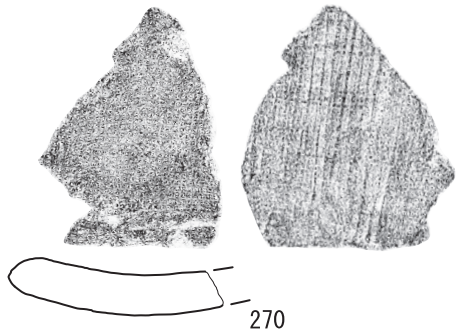


第 87 図　女瓦 斜格子Ｆ・Ｇ・長格子Ａ（S=1/4）

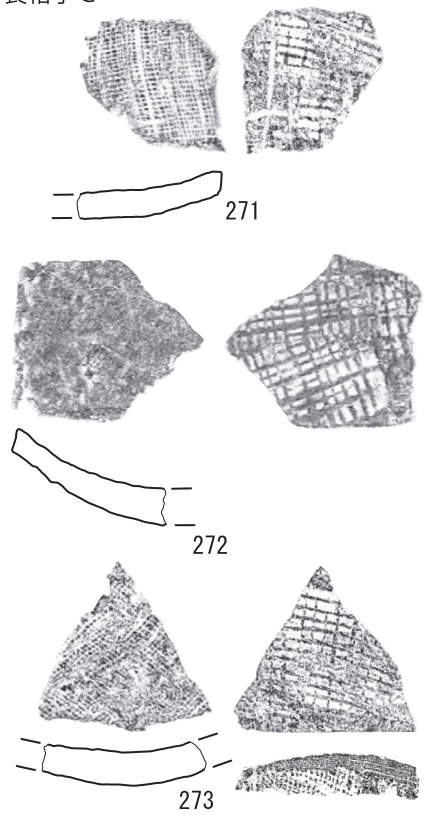
長格子 A



長格子B

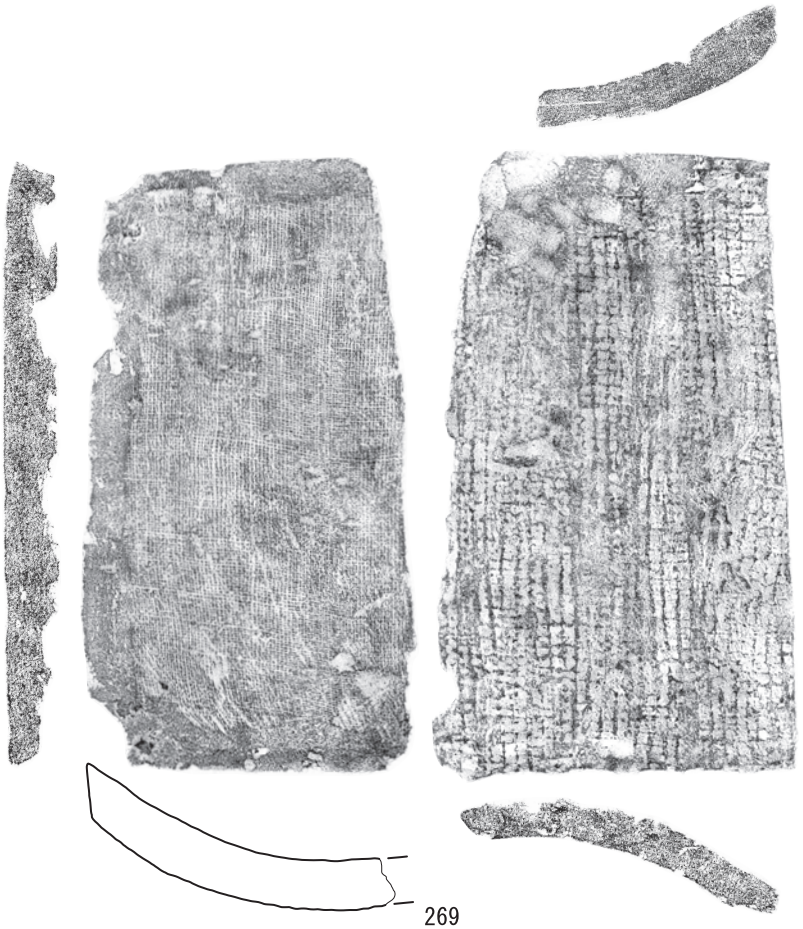


長格子C

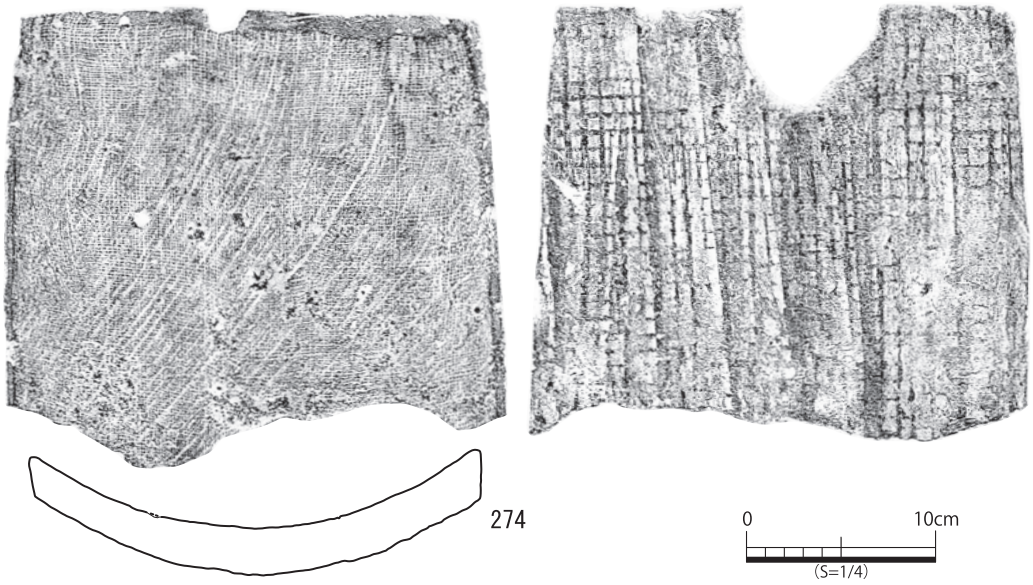


第 88 図 女瓦 長格子 A ～ C （S=1/4）

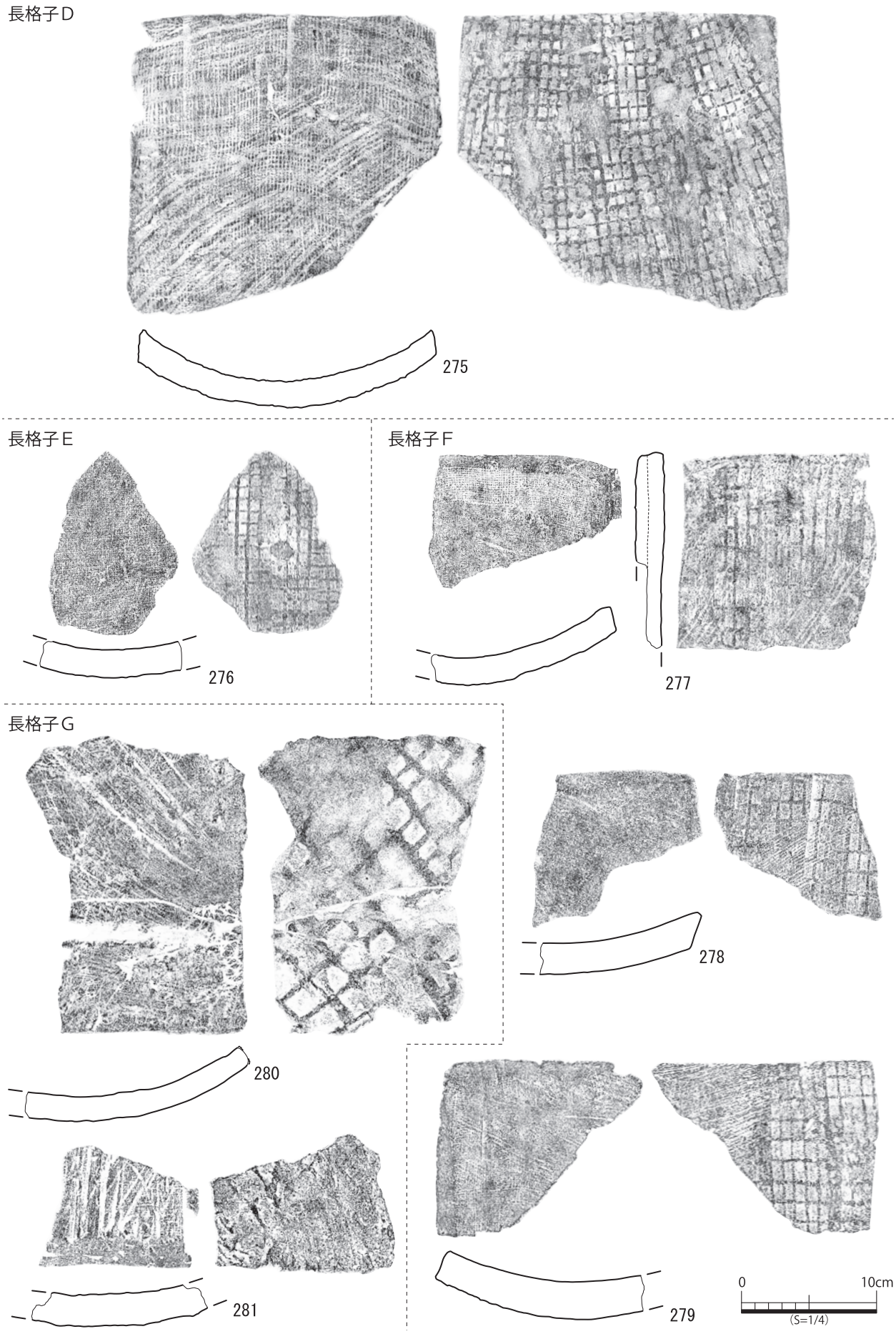
長格子 A



長格子D



第 89 図　女瓦 長格子 A・D（S=1/4）



第 90 図　女瓦 長格子D～G（S=1/4）

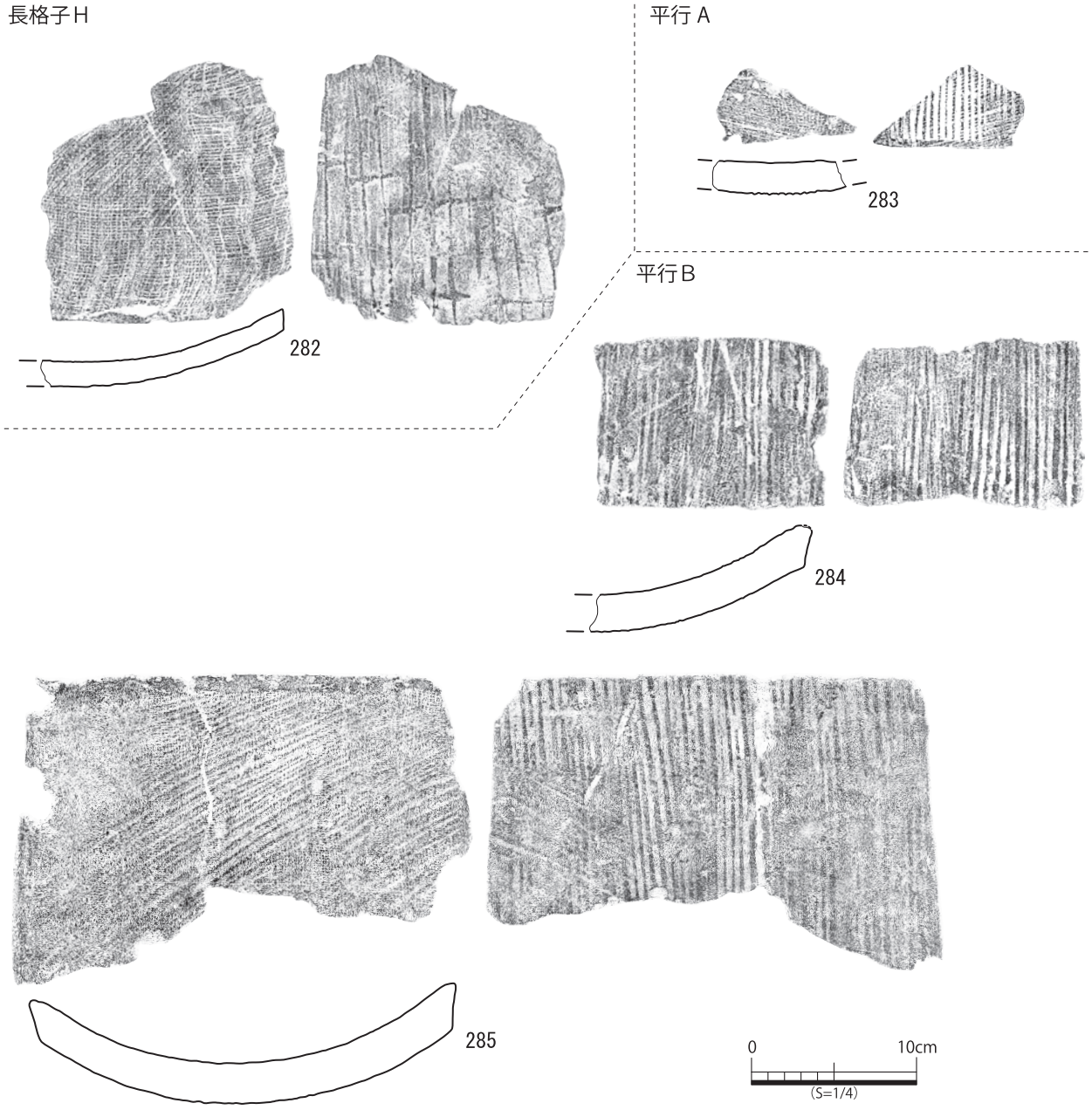
のは長辺約 32.0 ×狭端幅約 21.0 ×広端幅 24.5㎝である（258）。258 を見るに凸面の叩きは広端面側を中心に叩いたと推測される。糸切痕が見られるものがあり、素地は粘土板と考えられるが、多くの個体は糸切痕が見られない。色調は灰白色〜灰色で焼成は良である。

斜格子Ｄ（第 86 図 － 259）

格子のサイズは一辺約 20㎜で、彫の深さは浅めである。格子の断面形状は彫が浅いことや摩滅しているため詳細は不明であるが、蒲鉾型と推測される。破片のみであるが、凸面の叩きは全体的に叩いていると推測される。凹面は布目痕が見られず、ナデ整形した痕跡がないことから直接成型台等に載せ形作ったと考えられ、斜格子Ｂと同じような特徴である。色調はにぶい橙で焼成は良である。斜格子Ｄのほぼ全てでこの色調・焼成であることが特徴として挙げられる。この特徴は SKH18 と近似することから同一時期、同一生産地の可能性もある。

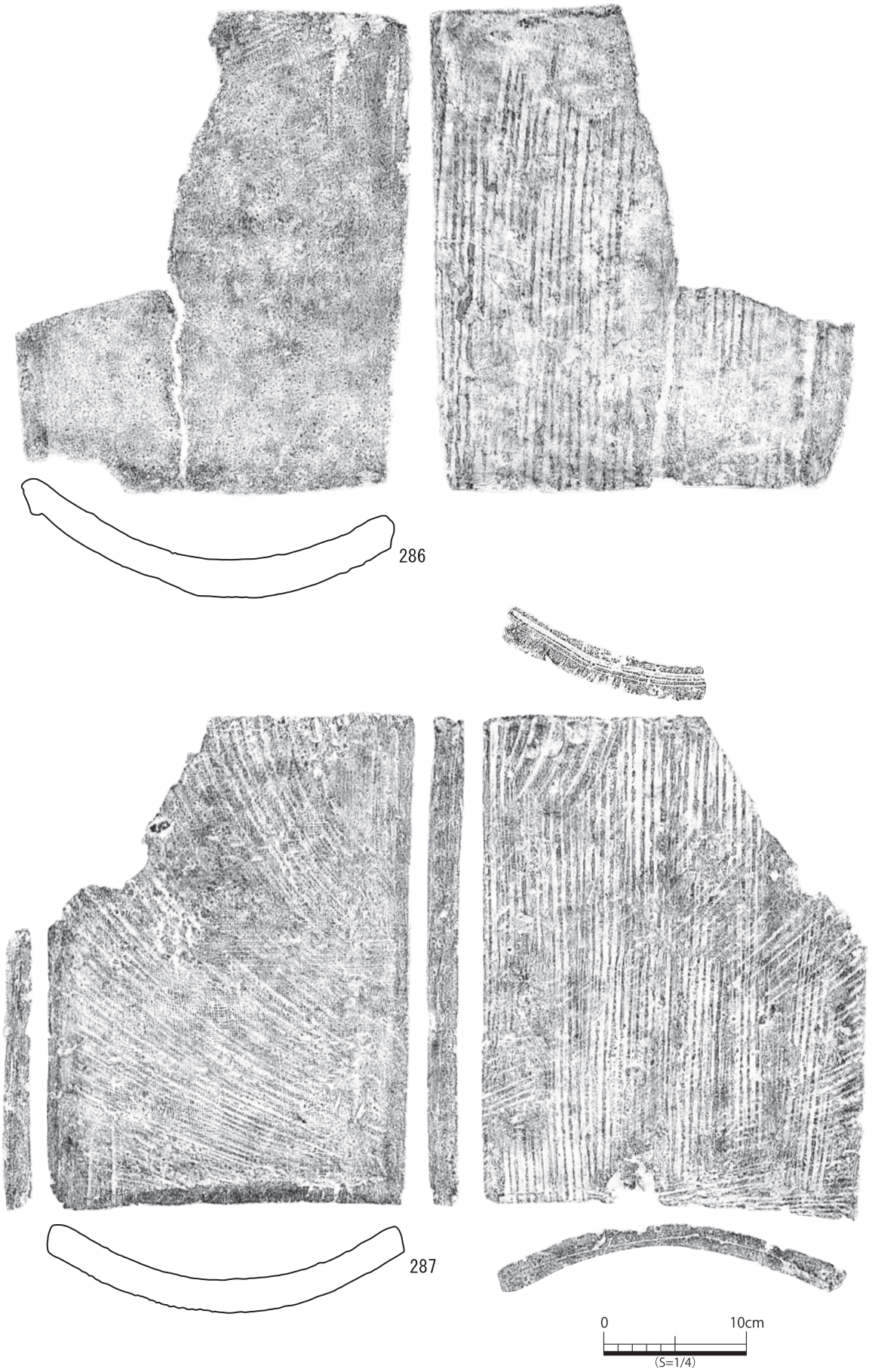
斜格子Ｅ（第 86 図 － 260・261）

格子サイズは一辺約 12㎜で彫の深さは浅めである。格子の断面形状は蒲鉾型と考えられるが、粘土が柔らかい状態で叩いた可能性があり、歪な形をしているものが多い。色調は灰色系で焼成は良好である。



第 91 図 女瓦 長格子Ｈ・平行Ａ・Ｂ（S=1/4）

平行C



第 92 図 女瓦 平行C（S=1/4）

斜格子F（第 86・87 図 － 262・263）

格子サイズは約 12 × 10㎜程度で彫の深さは浅めである。格子線は全体的に太めである。格子の断面形状は台形である。262 の側面に布目痕が見られ、成型台と見られる痕跡も側面にあり、粘土が成型台をはみ出して女瓦を成型している状況が分かる。技法は粘土板一枚作りと考えられる。色調は灰色〜にぶい黄橙色で焼成は良が多いが、生焼けで軟質のものがある。

斜格子G（第 87 図 － 264・265）

格子サイズは一辺約 10㎜で、彫の深さは浅めである。格子の断面形状は蒲鉾型である。叩き具の大きさは測定できないが､逆台形上の形であると考えられる。凹面は布目痕が見られず、布を敷かずに整形したと推測される。色調は灰色系で焼成は良である。斜格子Bと形が類似するが、比較すると格子線が細いのと斜格子Bに見られる叩き具のキズが見られないことから別の叩き具と考えられる。しかし、叩き具の形状や焼成が似ることから同一の生産工房で使用された可能性はある。

長格子A（第 87 〜 89 図 － 266 〜 269）

格子のサイズは 7 × 5㎜で彫が浅い。格子の断面は長方形である。凸面の叩きは全体的に叩いている。縦軸の格子線が全体的に太めである。全体の法量が分かるものがあり、長辺約 33.5 ×狭端幅約 26.0 ×広端幅約 28.5㎝である。技法は明確に判別できるものは少なかったが、模骨痕と糸切痕が確認できるものがあり、粘土板桶巻作りと推測される。糸切痕は多くの個体で見られる。格子叩きの中で最も出土が多い型式である。色調は灰色〜灰白色系のものが大半を占める。焼成は良のものが多いが軟質傾向にあり、表面が擦れているものが比較的多く見られる。

長格子B（第 88 図 － 270）

格子のサイズは約 27 × 5㎜前後であり、縦軸がかなり長い型式である。彫の深さはかなり浅く、叩きの状況が不明瞭であるものが多い。糸切痕が見られるものがあることから素地は粘土板と考えられる。色調は灰色系で焼成は良好である。

長格子C（第 88 図 － 271 〜 273）

代表的なサイズは約 7 × 4㎜であるが、サイズにヴァリエーションがあり、小型の正格子になる部分もあることから変形的な叩き具である。彫の深さは浅めである。摩滅気味であるため、断面形状の判断は困難であるが、蒲鉾型と考えられる。凹面は布目痕があるもの（271）とないもの（272）が存在する。273 は端面に布目痕があることから一枚作りと考えられる。色調は灰白色〜灰色で、焼成は良のものが多いが軟質のものもあり、軟質傾向である。

長格子D（第 89・90 図 － 274・275）

格子のサイズは約 10 × 5㎜である。縦軸と横軸ともに格子線は太めである。凸面の叩きは破片であるため詳細は不明であるが、全体的に叩いたと考えられ、2 度叩きする部分が多い。糸切痕が見られることから素地は粘土板と考えられ、275 等残りが良いものを見ると模骨痕がないことから粘土板一枚作りの可能性が推測される。色調はにぶい黄褐色系で焼成は良であるが、基本的に軟質である。

長格子E（第 90 図 － 276）

格子サイズは約 10 × 7㎜で彫の深さは普通である。格子の断面形状は台形である。胎土が細かいのか格子の形状が際立ってみえる。色調は灰色〜にぶい橙色系で焼成は良である。

長格子F（第 90 図 － 277 〜 279）

格子サイズは約 12 × 7㎜で彫の深さは浅めである。格子の断面形状は台形だが三角形状に鋭利になっている部分もある。凸面の叩きはほぼ全体的に叩いたと考えられる。277 のように粘土板を 2 枚重ねて女瓦を成型している。色調は灰白色で焼成は良である。

長格子G（第 90 図 － 280・281）

格子サイズは約 20 × 15㎜だが、サイズや形状にかなりヴァリエーションがあり雑な作りである。彫の深さは普通であるが、格子線が歪な形をしているため一定しない。凹面は網状の布製品を使用している。色調は暗灰色系で表面が燻焼きであり、焼成も軟質なものが多い。胎土も粗く、格子の作り等全体的に雑な作り方であることから、時代の根拠は明示できないが、古代末頃と推測される。

長格子H（第 91 図 － 282）

格子サイズは約 50 × 10㎜でかなり縦長の格子叩きである。彫の深さは浅めである。凸面の叩きは全体

的に叩かれている。色調は灰色系で焼成は良である。

2）平行叩き

平行叩きは突線の太さや間隔、彫の深さ、突線の断面形状で分類し、14 種類確認した。平行叩きの女瓦は格子叩きと同様で全点分類対象にし、突線間の幅や太さ等を可能な限り目視等で分類を行った。しかし、二度叩きしているものが多く、詳細な分析や型式の判別が難しい個体もあり、型式は増減する可能性もある。

平行A（第 91 図 － 283）

突線の太さは約 3㎜程度で、間隔は約 3㎜である。彫の深さは普通である。突線の断面形状は蒲鉾型である。彫がくっきりしているため、明瞭に突線の単位が分かる。色調は灰白色で焼成は良好である。胎土に赤色粒を含む。1 点のみである。

平行B（第 91 図 － 284・285）

突線の太さは約 3㎜程度で、間隔は約 3 ～ 5㎜前後である。彫の深さは普通である。蒲鉾型と考えられる。技法は 284 のように凹凸面に布目があることや糸切痕の状況から粘土板一枚作りと考えられる。凹面の側端面側に調整 1 度を入れる。色調は灰色系で焼成は良であり、硬質なものが多い。

平行C（第 92 図 － 286・287）

突線の太さは約3㎜程度で間隔は約5㎜程度である。彫の深さは普通である。突線の断面形状は台形と考えられる。叩き後につぶれている傾向にある。法量が分かるものは長辺 34㎝台である（286・287）。技法は糸切の状況から粘土板一枚作りと考えられる。色調は灰黄色～浅黄橙色系で焼成は良と軟質なのものがある。

平行D（第 93 図 － 288）

突線の太さは約 2㎜程度で間隔は 5㎜程度である。彫の深さは普通である。突線の断面形状は角の丸い三角形状である。全体的に突線が乾燥時等でつぶれているものが多い。技法は糸切痕の状況から粘土板一枚作りと考えられる。色調は灰白色系で焼成は良であるが、硬質なものがある。

平行E（第 93 図 － 289・290）

突線の太さは約 3㎜程度で、間隔は 2 度叩きしている部分が多いが、約 3 ～ 6㎜程度と考えられる。突線の断面形状は蒲鉾型である。彫の深さは普通である。また、横軸方向の格子線と考えられる個体も見られ、2 度叩きとの判別は困難であるが、極端に縦軸が長い長格子の可能性もある。素地は粘土板の個体（290）と破損部に粘土紐の輪積み状況が確認でき、粘土紐作りと考えられる個体（289）がある。両者の割合は不明であるが、粘土紐作りの個体も一定量ある。色調は両者とも灰白色系で焼成は良であり、明瞭な時期差等の相違点は見られない。

平行F（第 94 図 － 291）

突線の太さは約 3㎜程度で、間隔は約 5㎜前後と考えられる。彫の深さはかなり浅めである。突線の断面形状は彫が浅く、潰れているものが多いため判別は難しい。彫が浅いこともあり、凸面にも糸切痕が明瞭に残る個体がある。長辺が分かる個体（291）は約 33.7㎝である。技法は粘土板一枚作りである。色調は灰白色系で焼成は良である。

平行G（第 94・95 図 － 292・293）

突線の太さは約 2㎜以下のものが多く、間隔は約 6㎜程度である。彫がかなり浅めである。突線の断面形状は彫が浅すぎるのと粘土が柔らかいうちに叩いたため不明瞭であり、判別は難しい。粘土の素地は粘土板である。色調は灰色～灰白色系で焼成は良や硬質なものがある。

平行H（第 95 図 － 294・295）

突線の太さは約 3㎜程度で、間隔は約 7㎜前後である。彫の深さは普通である。突線の断面形状は蒲鉾型である。色調は灰色系で焼成は良である。

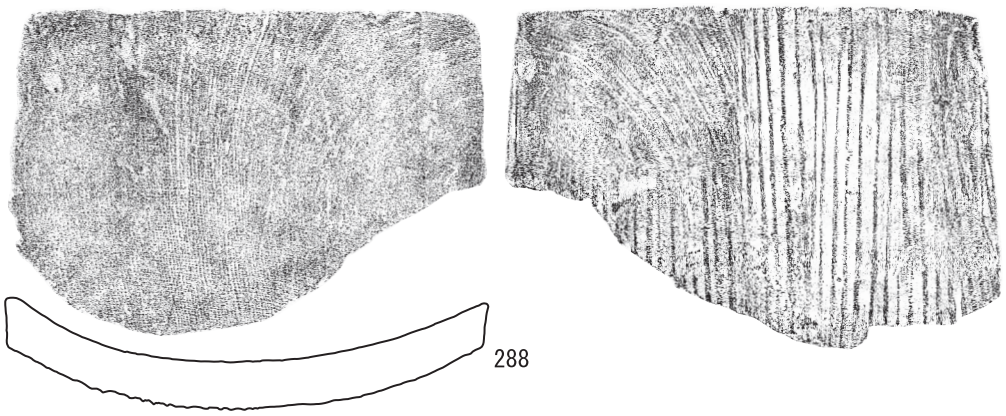
平行Ⅰ（第 96 図 － 296・297）

突線の太さは約 5㎜で、間隔は約 5㎜である。彫の深さは深めである。突線の断面形状は三角形状である。技法は平行Ｄと同様で粘土板作りの個体（297）と、粘土紐作りと考えられる個体（296）がある。色調は両者とも灰白色系で焼成は良であり、明瞭な時期差等の相違点は見られない。

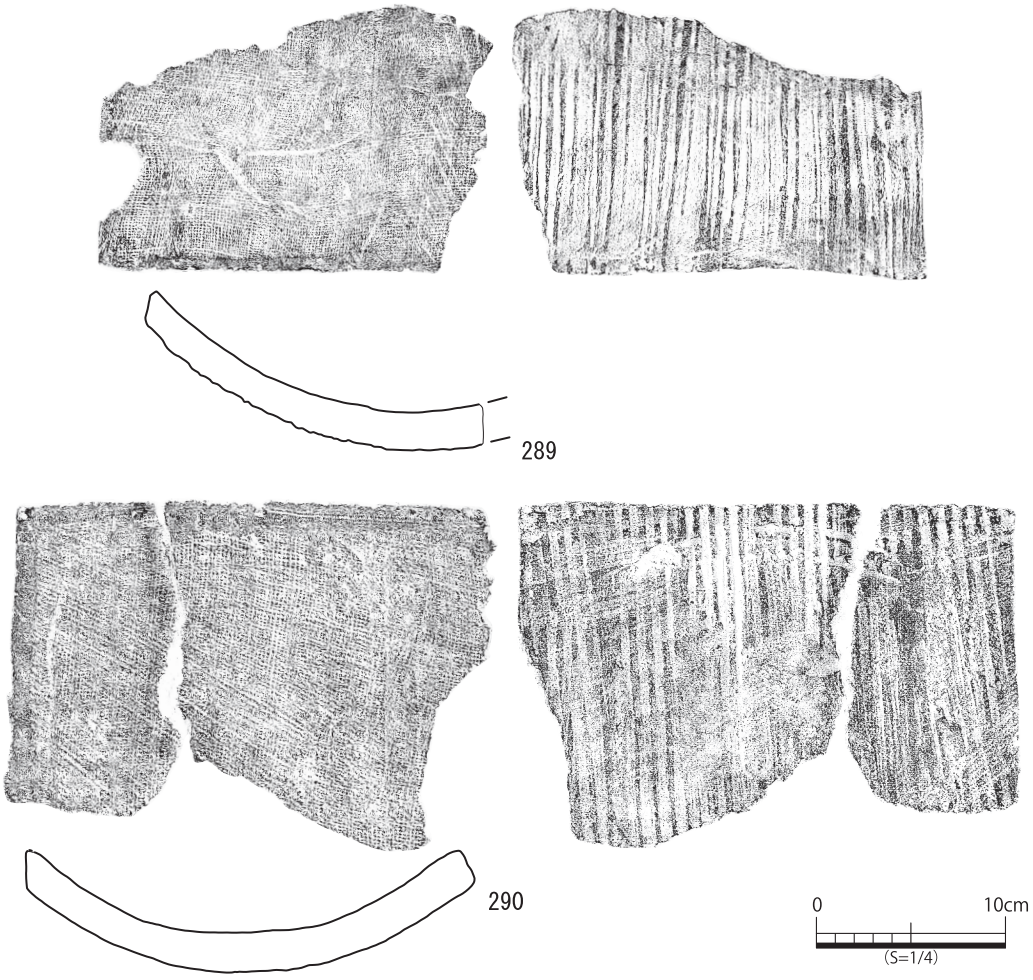
平行Ｊ（第 96 図 － 298）

突線の太さは約 3㎜程度でかなり細い部分もある。間隔は約 6㎜前後で、彫の深さは浅めである。突線の

平行D

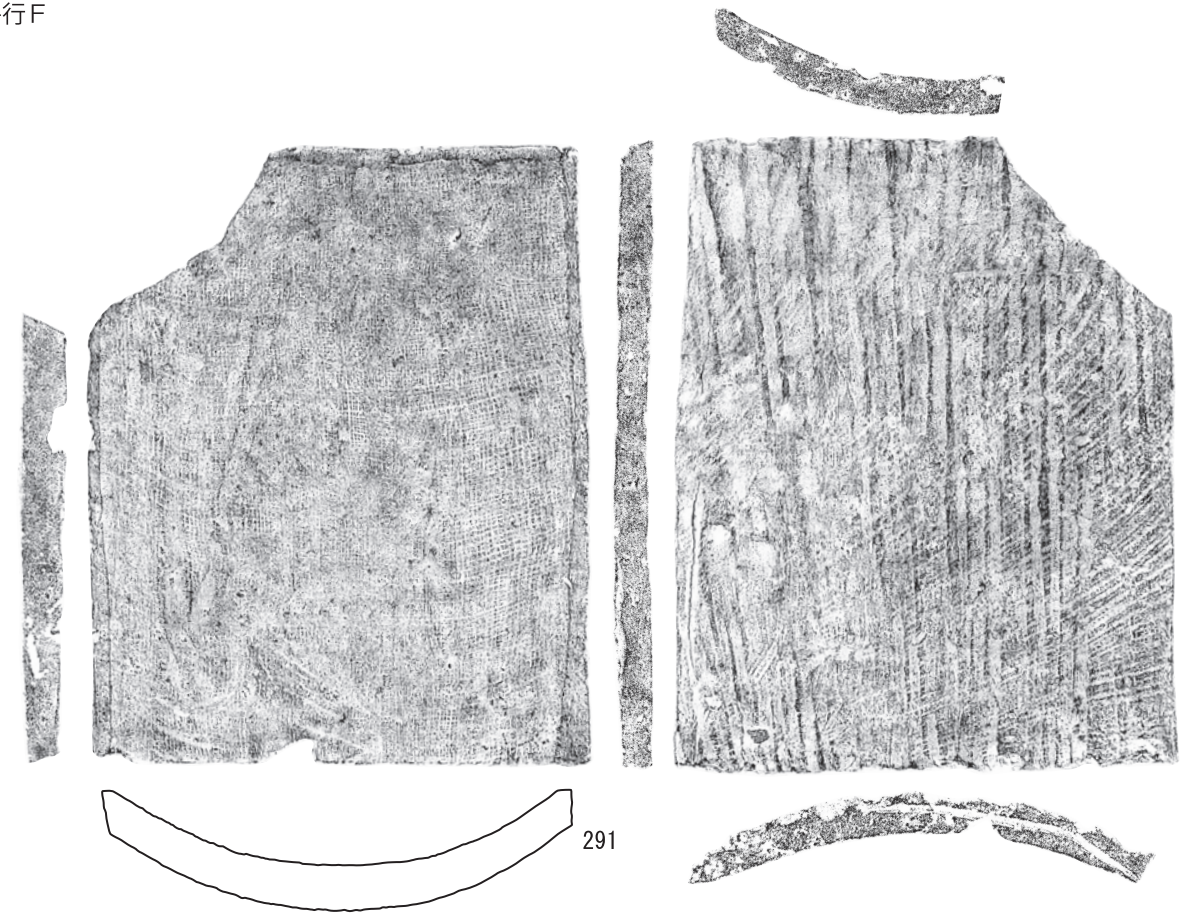


平行E



第 93 図　女瓦 平行D・E（S=1/4）

平行F

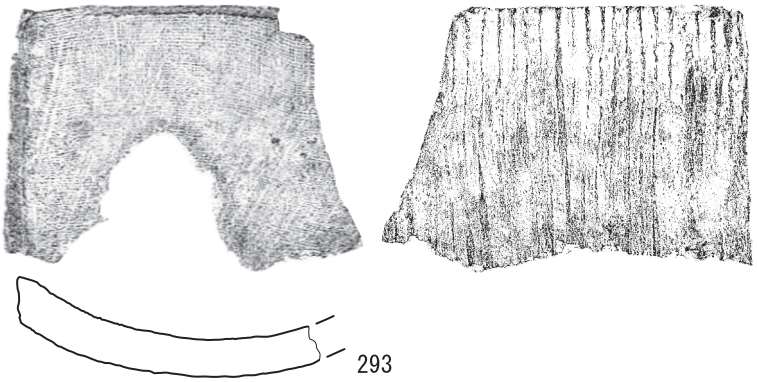


平行G

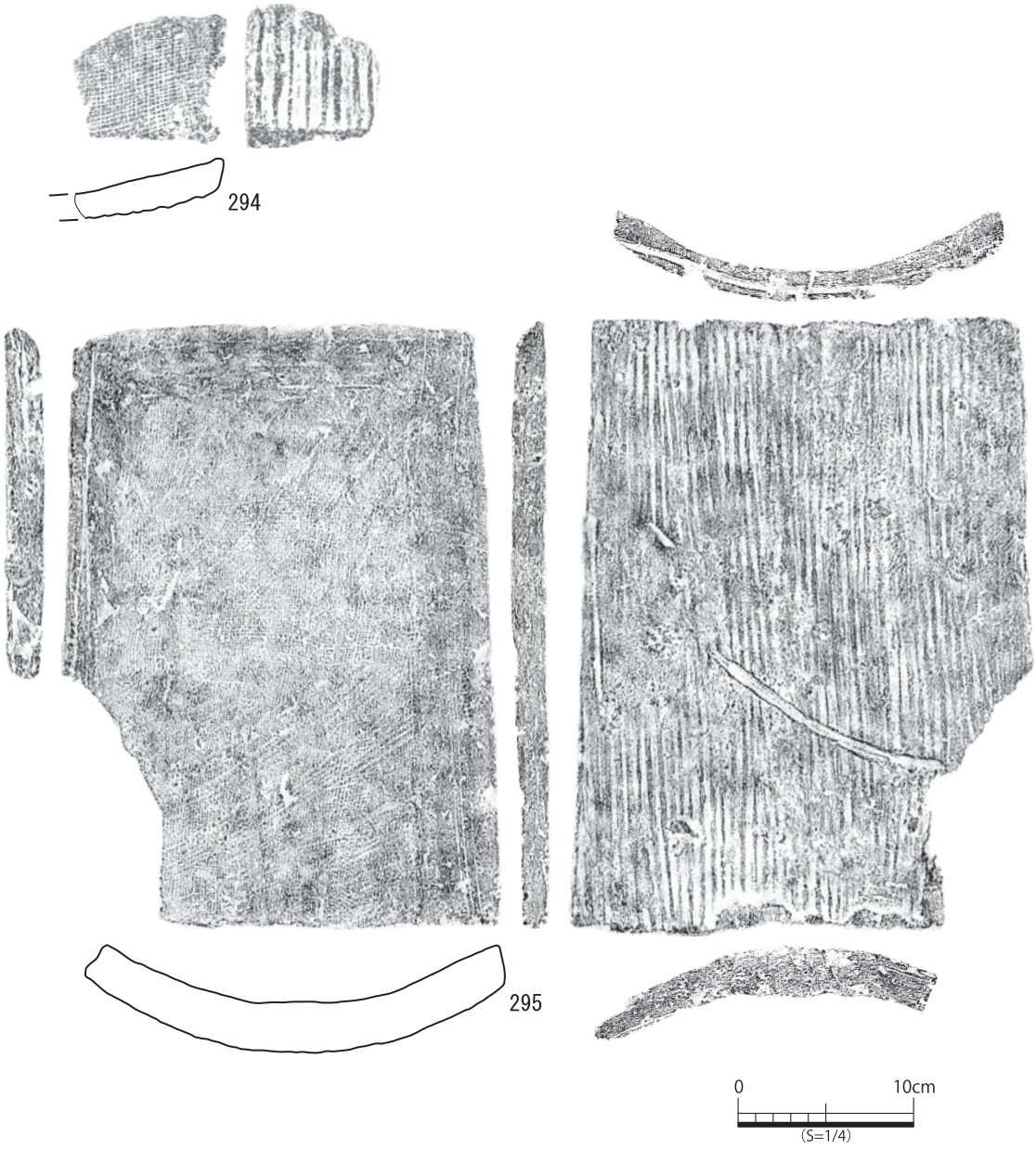


第 94 図 女瓦 平行F・G（S=1/4）

平行G

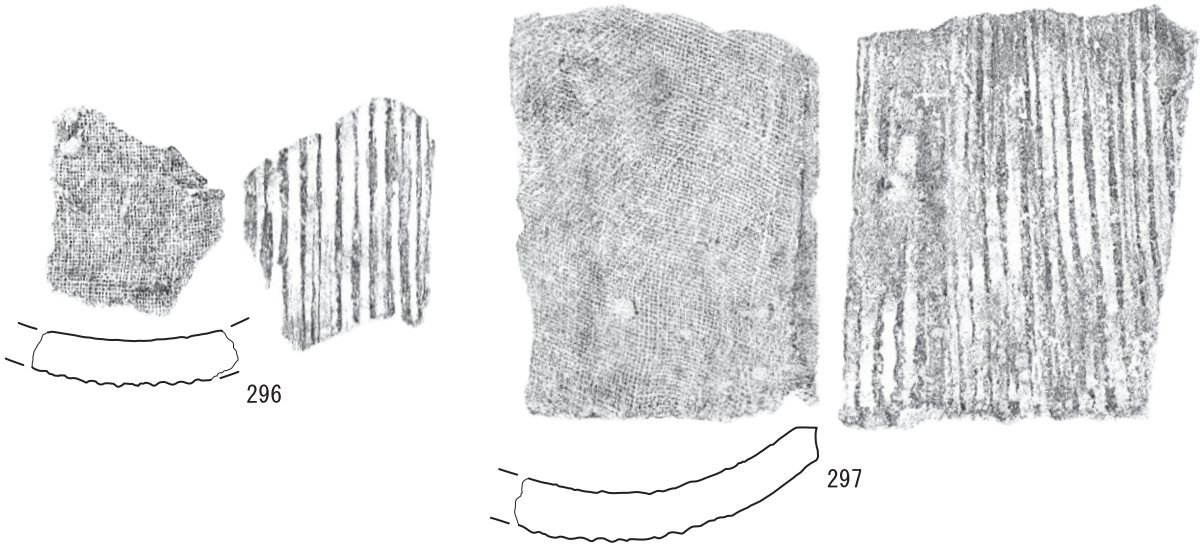


平行H

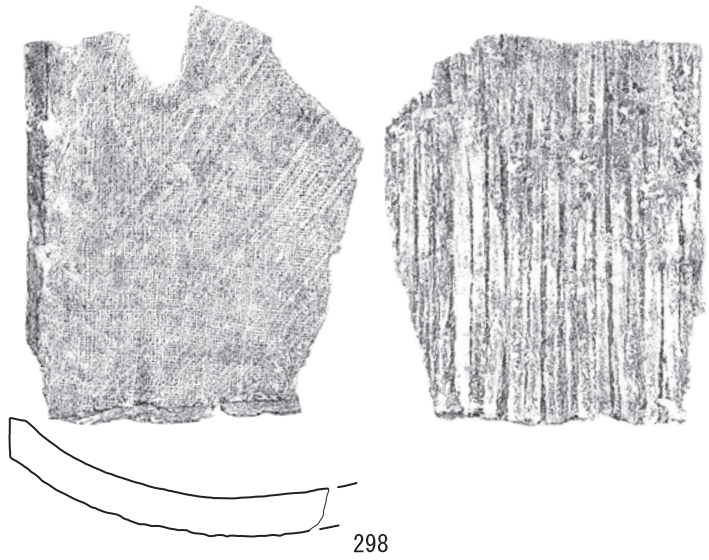


第 95 図　女瓦 平行G・H（S=1/4）

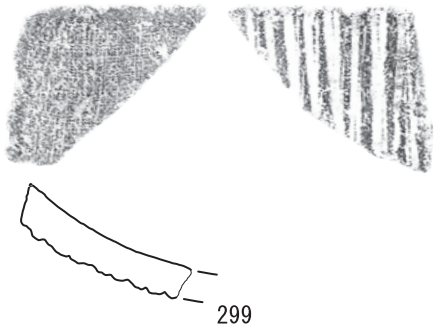
平行 I



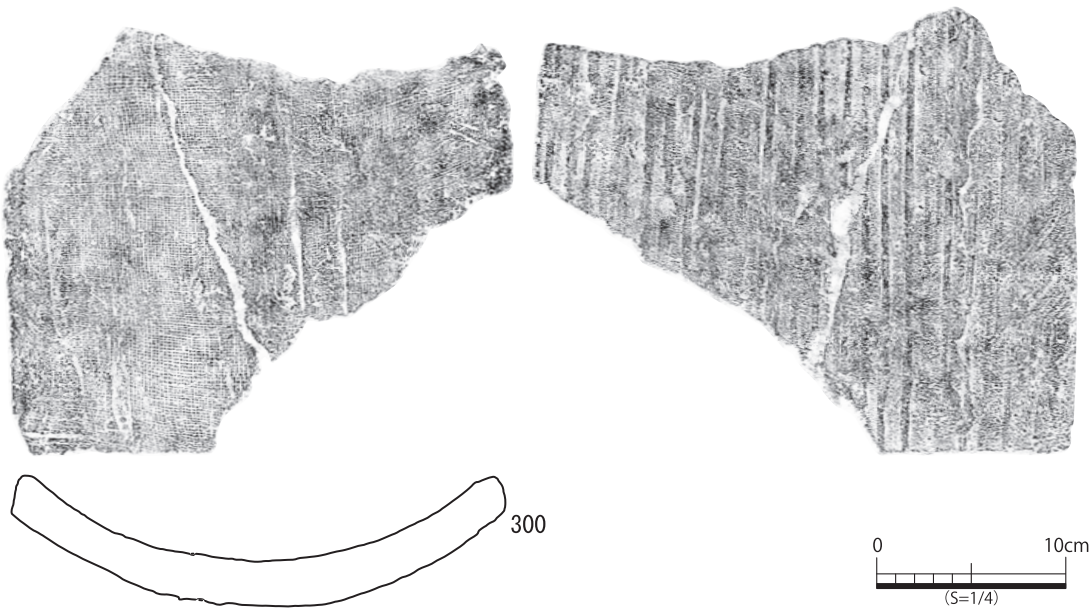
平行 J



平行 L

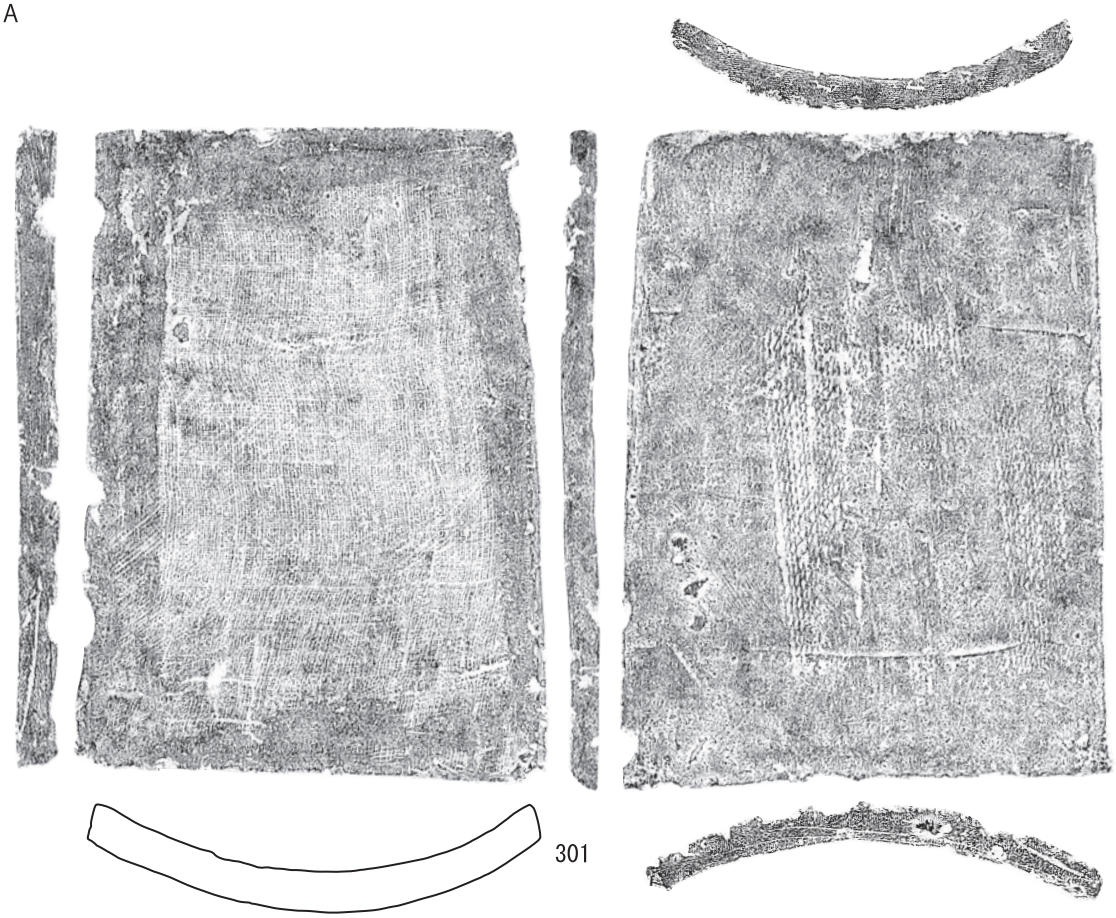


平行 K



第 96 図 女瓦 平行 I ～ L（S=1/4）

縄縦 A

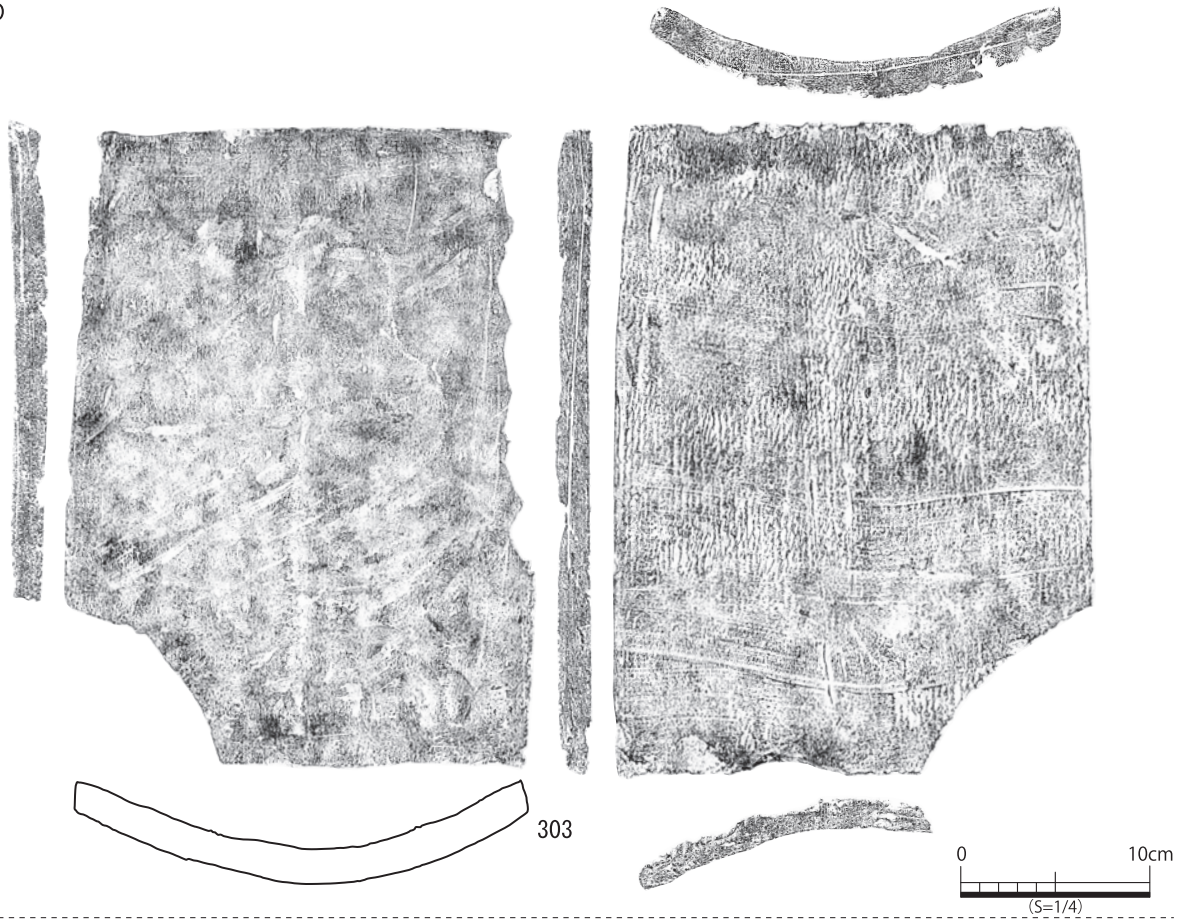


縄縦 B

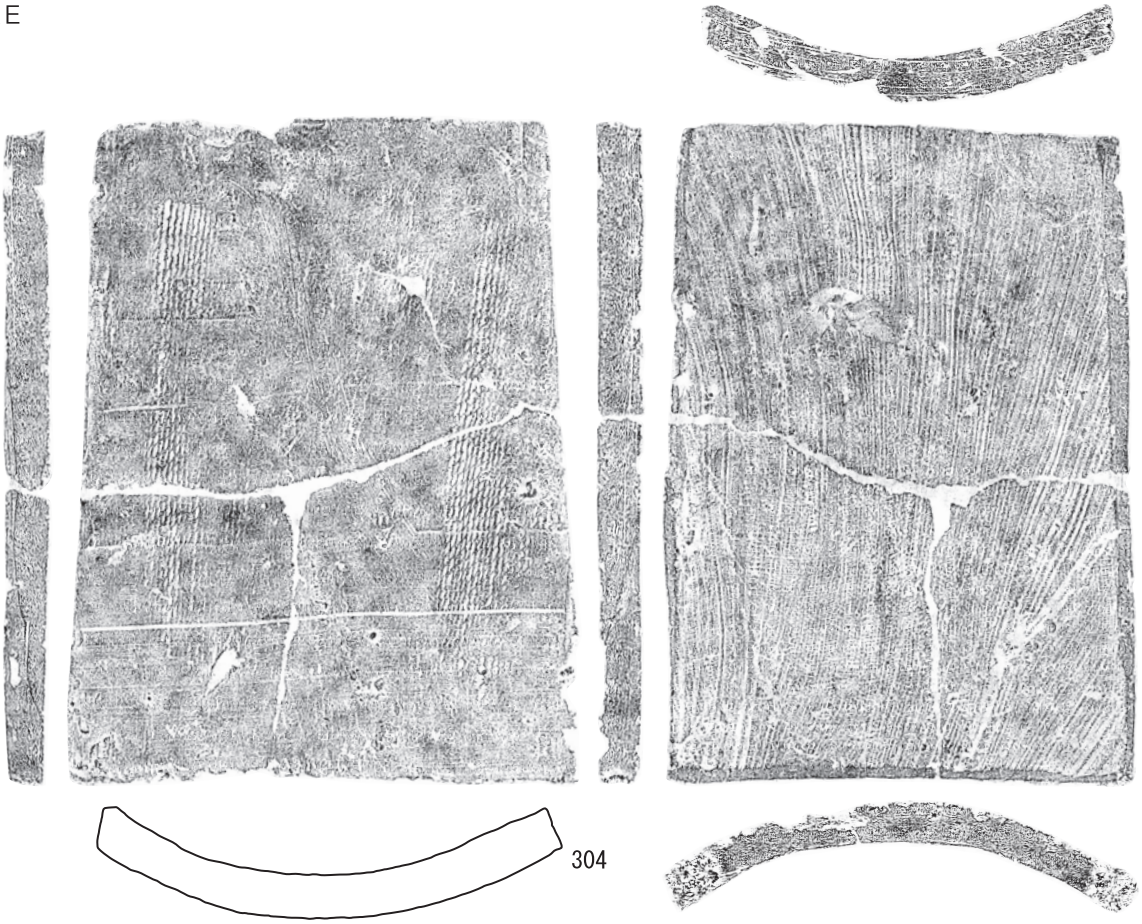


第 97 図　女瓦 縄縦 A・B（S=1/4）

縄縦 D

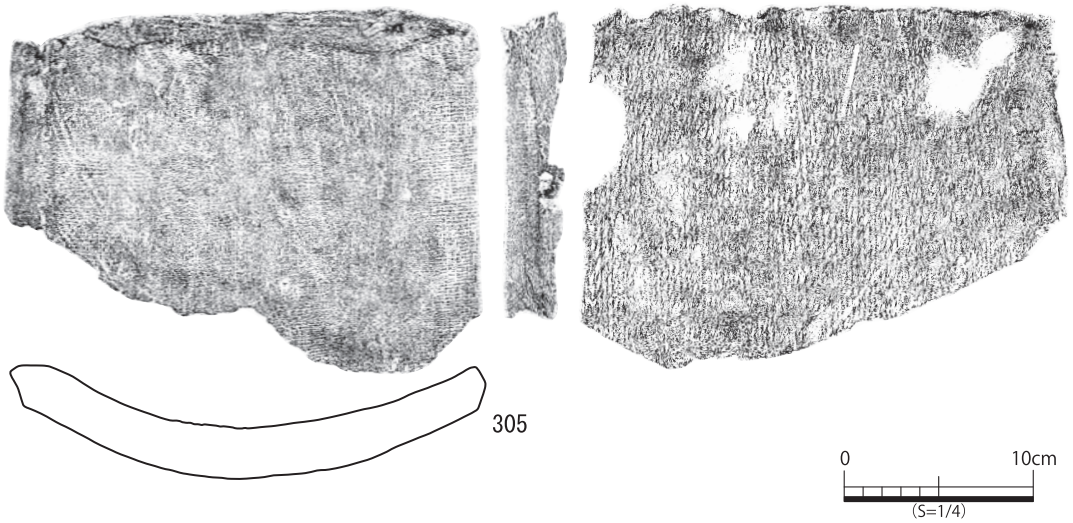


縄縦 E

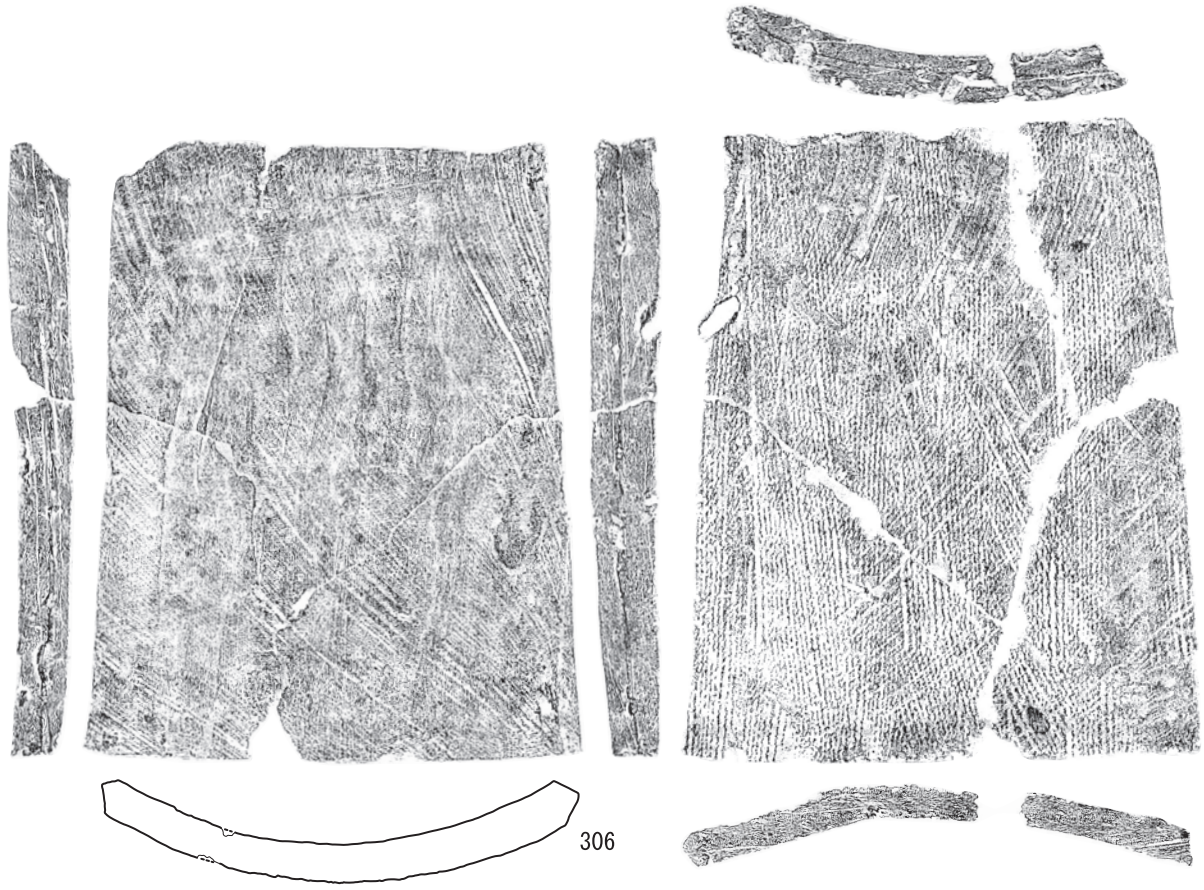


第 98 図　女瓦 縄縦 D・E（S=1/4）

縄縦Ｆ



縄縦Ｇ



第 99 図　女瓦 縄縦Ｆ・Ｇ（S=1/4）

断面形状は三角形状である。素地は糸切痕があることから粘土板である。凹面の側端面側に調整 1 度を入れるものが多い。色調は灰色系で焼成は良である。

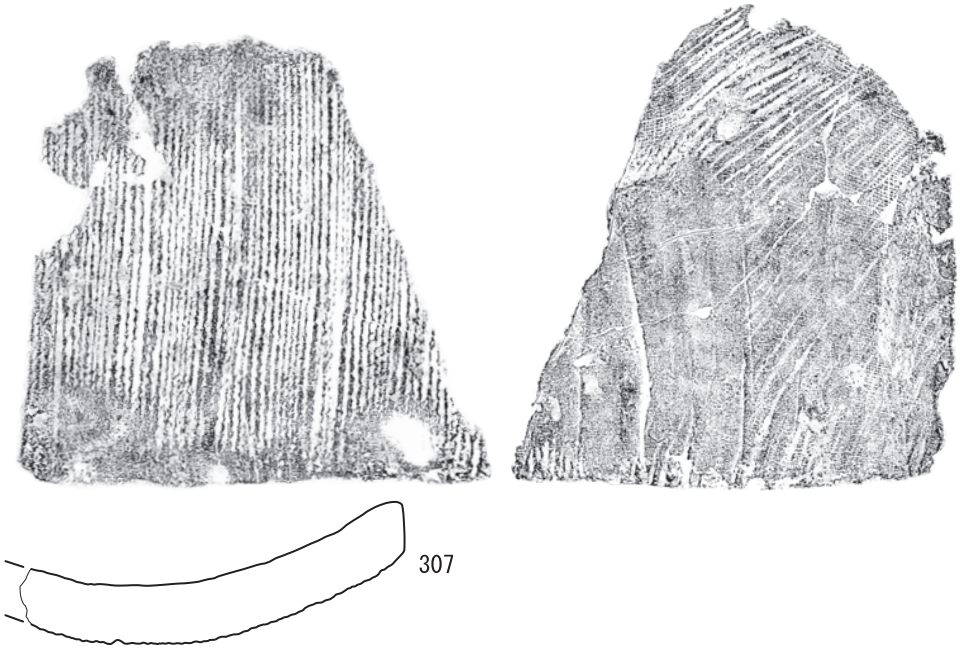
平行K（第 96 図 - 300）

突線の太さは約 4㎜程度で、間隔は約 10㎜前後である。彫の深さは浅めである。突線の断面形状はつぶれたものもあるが、蒲鉾型と考えられる。技法は凸面に粘土板合わせ目痕や凹面に模骨痕が見られ（300）、他の個体でも同様の痕跡が見られるものがあることから粘土板桶巻作りと考えられる。色調は灰色系で焼成は良である。

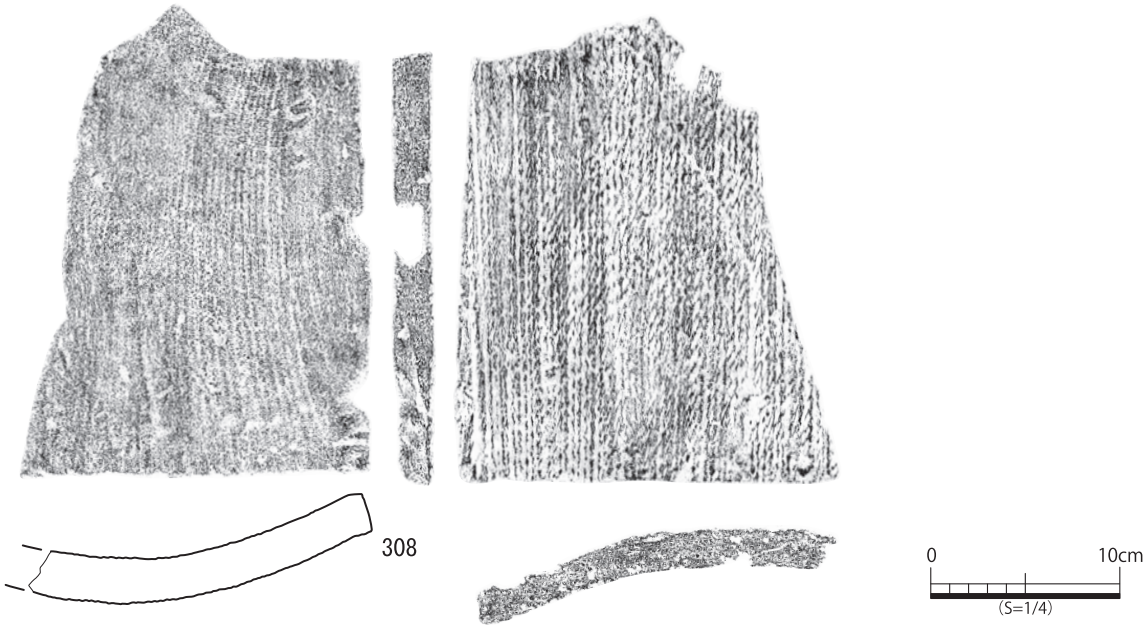
平行L（第 96 図 - 299）

突線の太さは約 6㎜で、間隔は約 5㎜である。彫の深さは深めである。突線の断面形状は蒲鉾型である。色調は灰色系で焼成は良である。

縄縦G



縄縦 H



第 100 図 女瓦 縄縦 G・H（S=1/4）

3）縄目叩き

女瓦の中でも縄叩きの比率が圧倒的に多く、第 1 章第 1 節で前述したように最初に三辺が残っているものをピックアップし、その中で叩き具の分類等の分析を行ったため、全体の出土量に対して分析が行えたものは限られている。また、叩き具の分類は平行叩きの分類時と同様に 2 度叩きしているものや潰れているものがあり、十分な分析を行える資料は尚限られている。そうした資料の分別を行った分析を行ったことや、分析資料の制約があり、提示できる型式が限られていると考えられるため、傾向として提示したい。分類は縄目の叩き方や叩く位置で分類した。分析の結果、縄叩きを縦方向に叩くもの（縄縦系）、弧状に斜めに叩くもの（縄斜系）と 2 種類確認できる。縄縦系は 11 種類、縄斜系は 12 種類である。

縄縦Ａ（第 97 図 － 301）

縄縦Ａは縄目の状態が小さく、叩き方は部分的でありかなりまだらである。301 を見るに法量は長辺約 35.0 ×狭端幅 22.3㎝×広端幅 24.2㎝である。凹面に粘土紐痕のような痕跡があり、素地は粘土紐の可能性がある。側端面に調整 1 度を入れる。色調は灰色～暗灰色系で焼成は良～良好で硬質なものが多い。調整を入れる等、瓦の作りは丁寧である。

縄縦Ｂ（第 97 図 － 302）

縄縦Ｂは縄目の状態が米粒状で、叩き方は部分的である。叩き具の形状は幅約 4㎝程度の棒状のものと推測される。302 を見るに長辺は約 34.5㎝である。凹面は糸切痕があり、素地は粘土板である。他の個体で側面に分割線があり無調整の状態のものや粘土板合わせ目痕が見られるものがあり、技法は粘土板一枚作りである。側端面に調整 1 度を入れる。色調は灰色～暗灰色で、焼成は良～良好で硬質なものが多い。調整を入れる等、瓦の作りは丁寧である。

縄縦Ｃ（第 120 図 － 395）

縄縦Ｃは縄目の状態が細長く、叩き方は部分的である。図化は行っていないが、凹面に模骨痕と推測される凹凸面が見られる個体が多く、技法は粘土板桶巻作りと考えられる。色調は灰色～暗灰色で、焼成は良～良好で硬質なものが多い。

縄縦Ｄ（第 98 図 － 303）

縄縦Ｄは縄目の状態が細長く、叩き方は部分的である。凸面は叩き後に横方向にナデ整形をする部分がある。303 を見るに長辺は約 35.0㎝である。凹面は糸切痕と布目痕があり、部分的にナデ整形をする。部分資料の判断であるが糸切痕の状況から粘土板一枚作りの可能性がある。色調は灰色～暗灰色で、焼成は良～良好で硬質なものが多い。

縄縦Ｅ（第 98 図 － 304）

縄縦Ｅは縄目の状態が細長く、叩き方が部分的である。凸面は叩き後に縦方向にナデ整形をする部分がある。法量は 304 を見るに法量は長辺約 35.2 ×狭端幅 22.0 ×広端幅 23.7㎝である。凹面は糸切痕、布目痕があり、調整 1 度を入れるものが多い。側面に布目痕を持つ個体があることから粘土板一枚作りと考えられる。色調は灰色～暗灰色で、焼成は良～良好で硬質なものが多い。

縄縦Ｆ（第 99 図 － 305）

縄縦Ｆは縄目の状態が米粒状で、叩き方は全体的に叩いている。305 は凹面に布目痕が見られるが、多くの個体はナデ整形するものが多い。色調は灰色系で、焼成は良好であり、硬質である。

縄縦Ｇ（第 99・100 図 － 306・307）

縄縦Ｇは縄目の状態が細かくて小さく、叩き方は全体的に叩いている。306 を見るに法量は長辺約 37.3 ×狭端幅 21.3 ×広端幅 27.0㎝である。凹面に糸切痕、布目痕が見られるが、ナデ整形をするものが多い。色調は灰色系で、焼成は良であるが、燻焼きのような個体や軟質な個体も見られる。

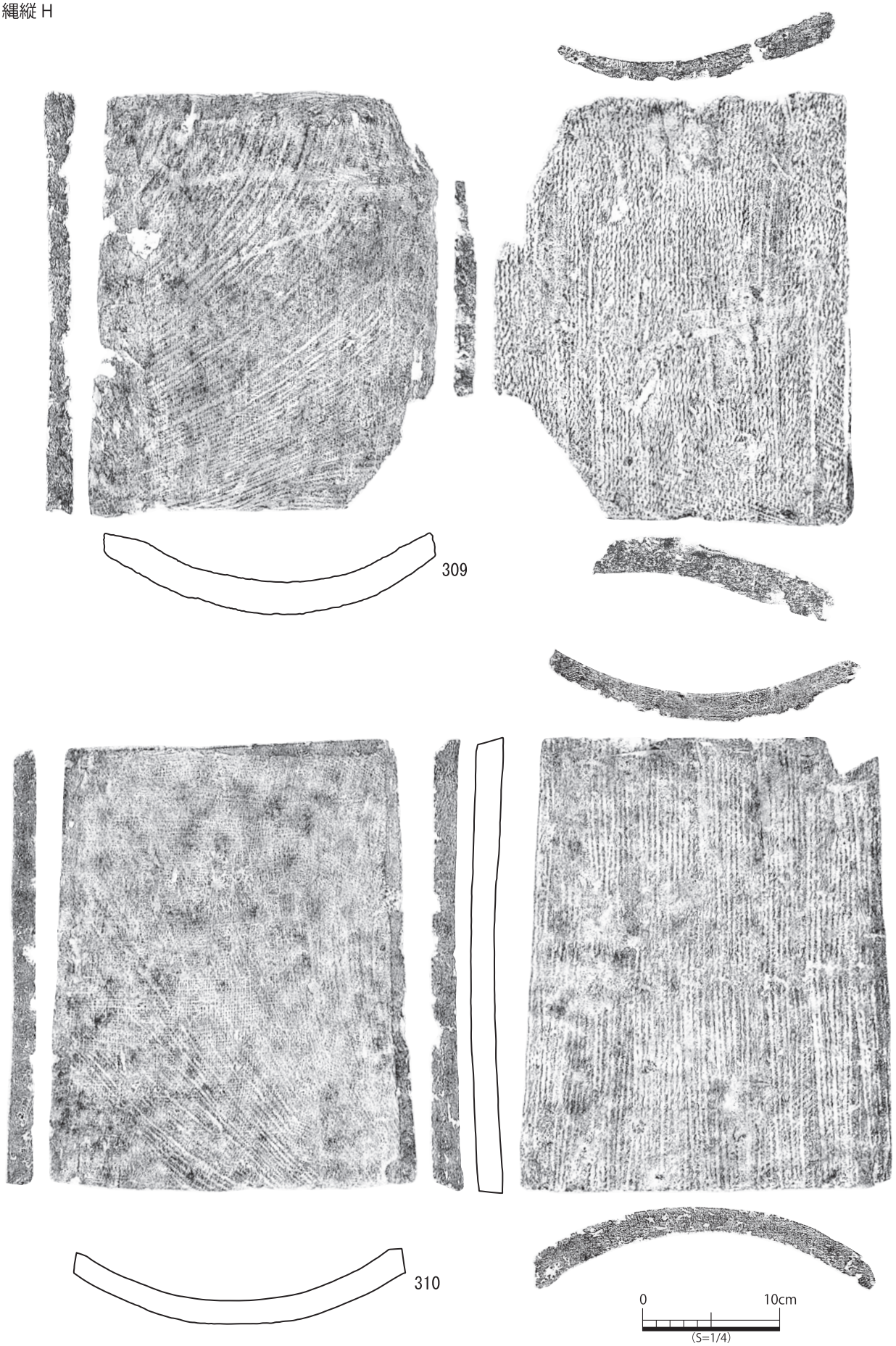
縄縦Ｈ（第 100・101 図 － 308 ～ 310）

縄縦Ｈは縄目の状態が細かくて細長く、叩き方は全体的に叩いている。309 を見るに長辺は約 34.5㎝である。凹面は糸切痕や布目痕が見られる。他の個体で側面や端面に布目痕が見られるものがある。技法は粘土板一枚作りと考えられる。色調は灰色～灰白色系で、焼成は良である。胎土に大きめの白色粒を含み粗くなる。縄縦Ａ等の作り方に比べ雑になる。

縄縦Ｉ（第 102・103 図 － 311 ～ 313）

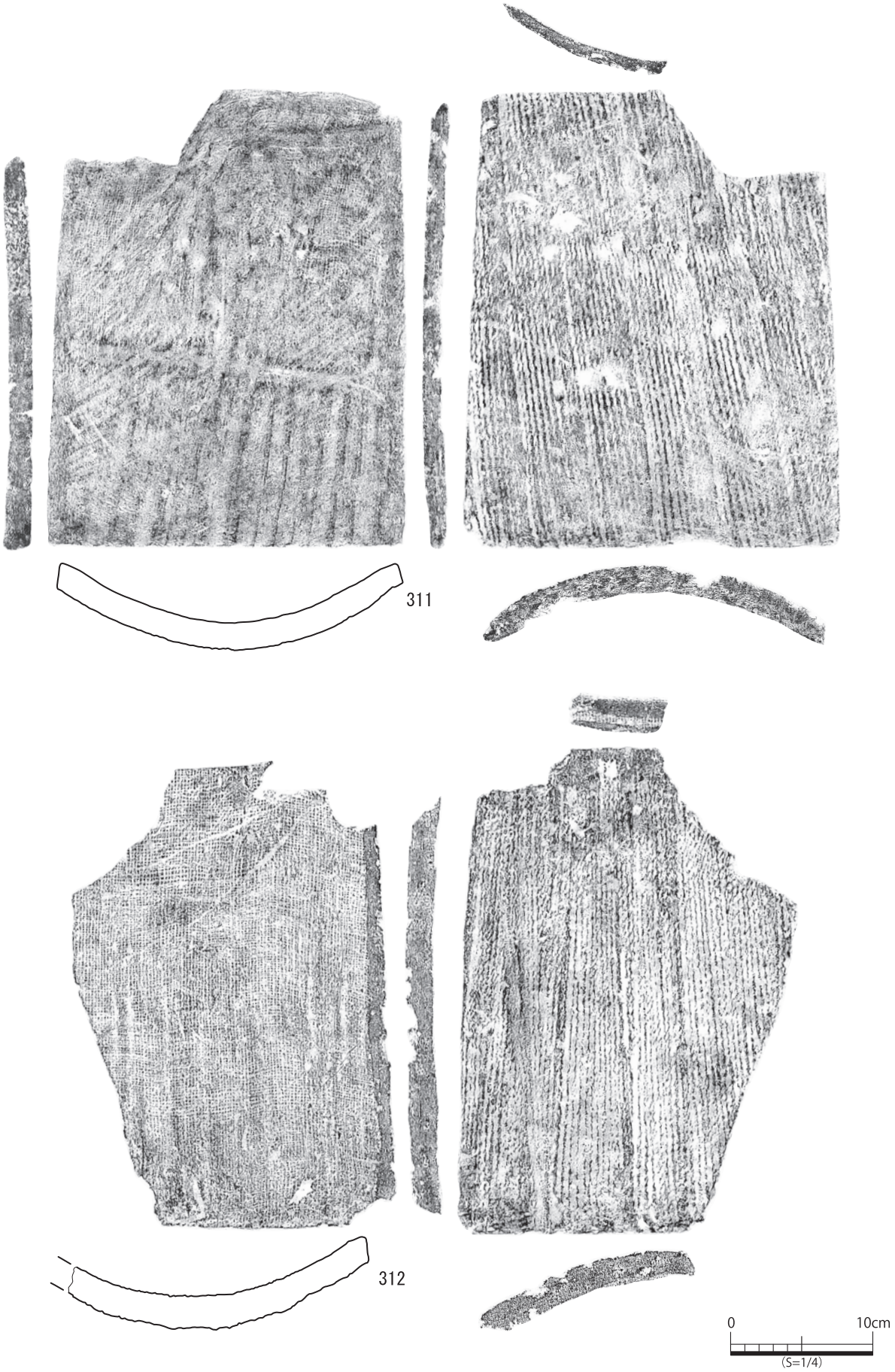
縄縦Ｉは縄目の状態がやや細かく、叩き方は全体的

縄縦 H



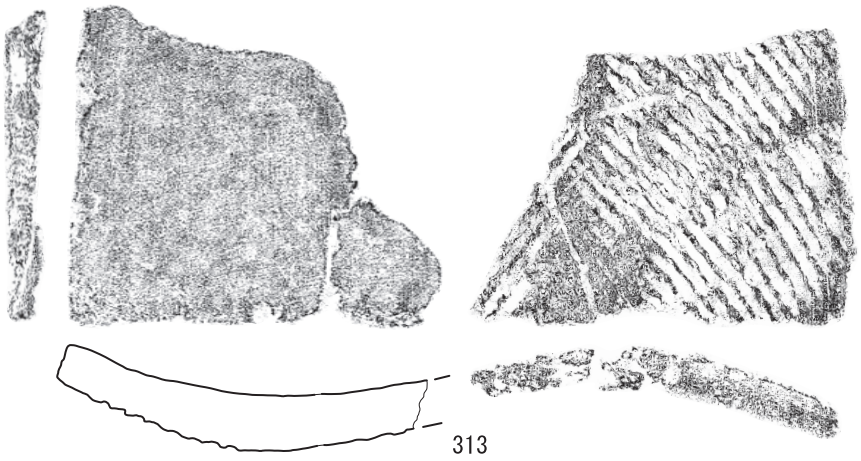
第 101 図 女瓦 縄縦H（S=1/4）

縄縦Ⅰ

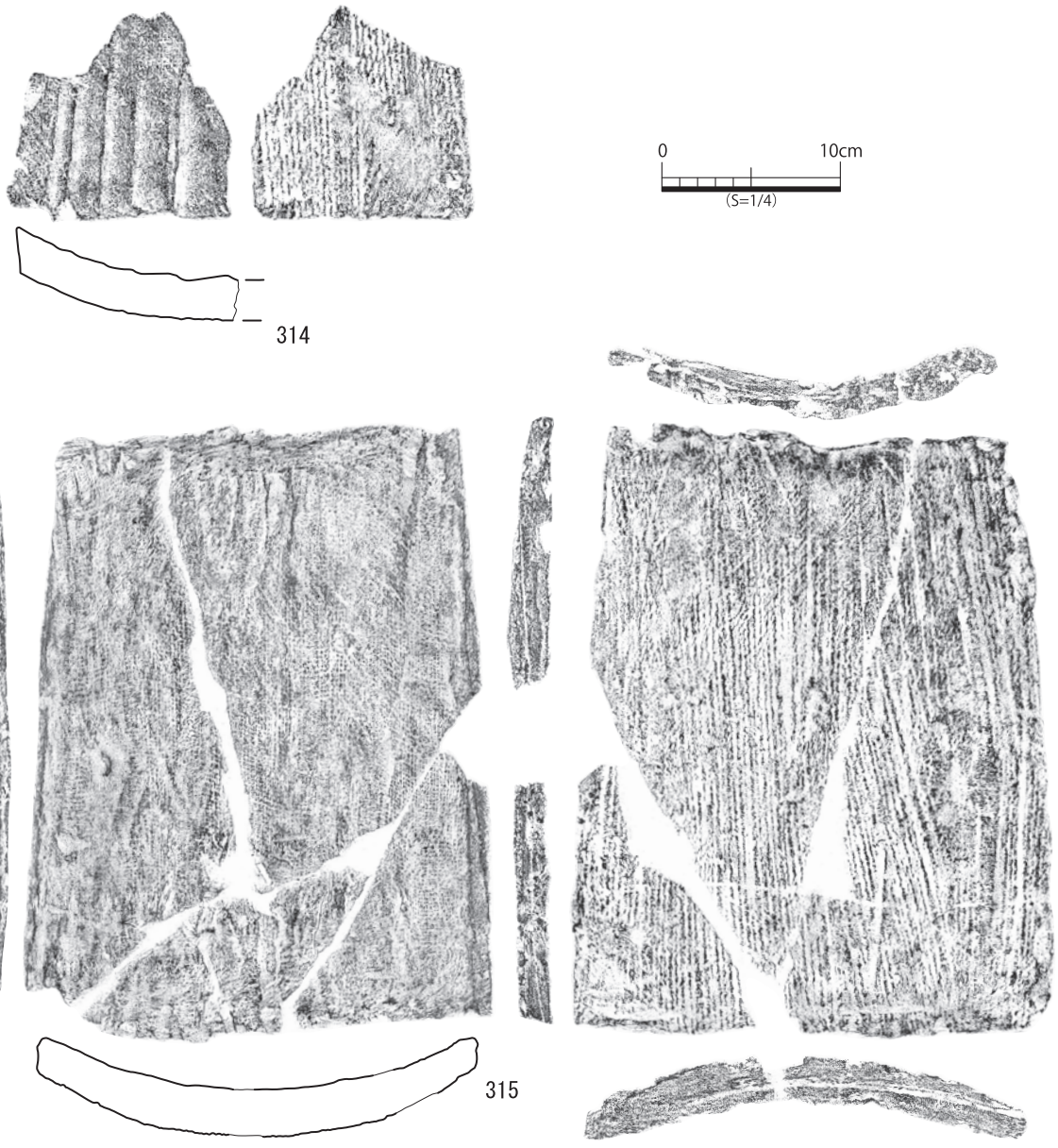


第 102 図 女瓦 縄縦Ⅰ（S=1/4）

縄縦 I

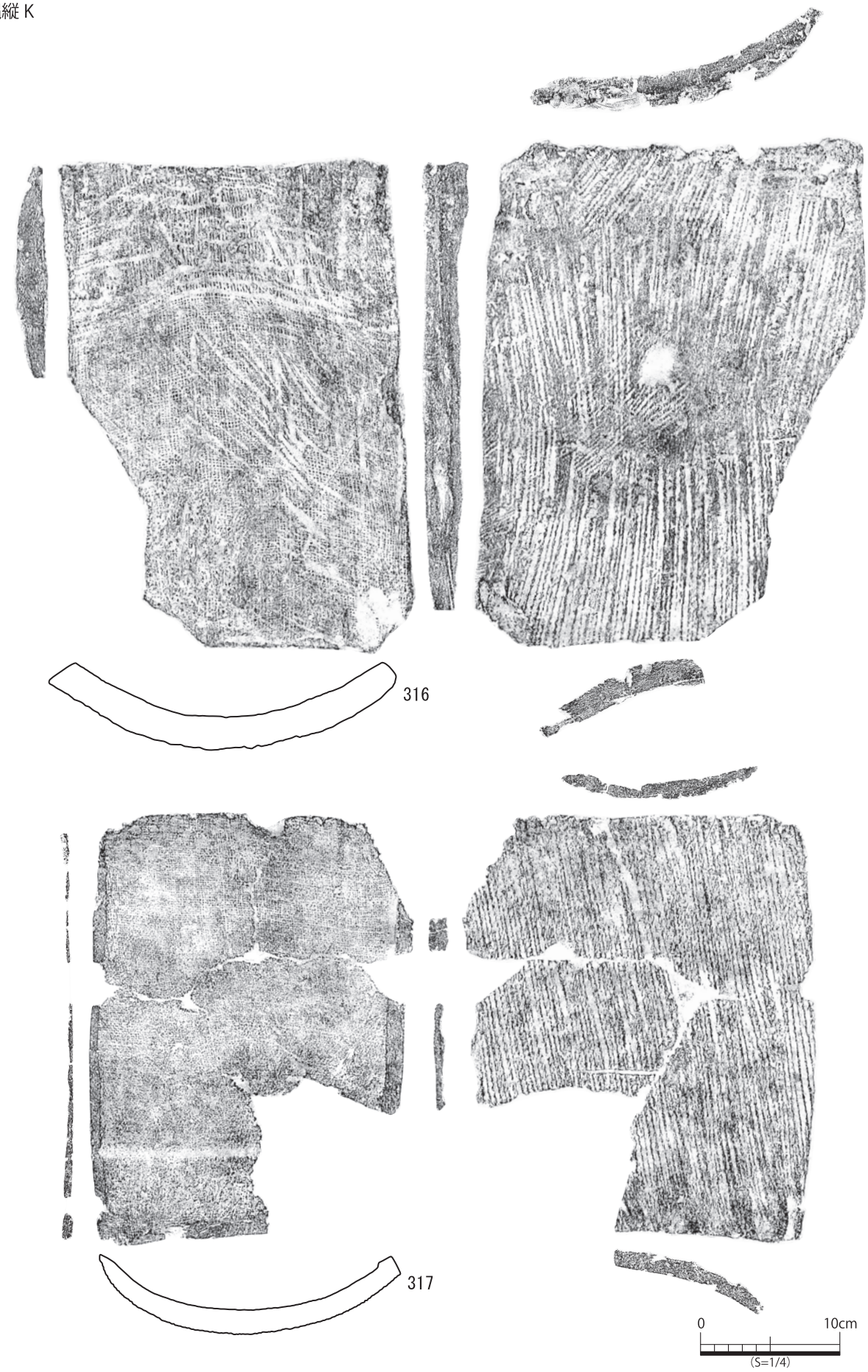


縄縦 J

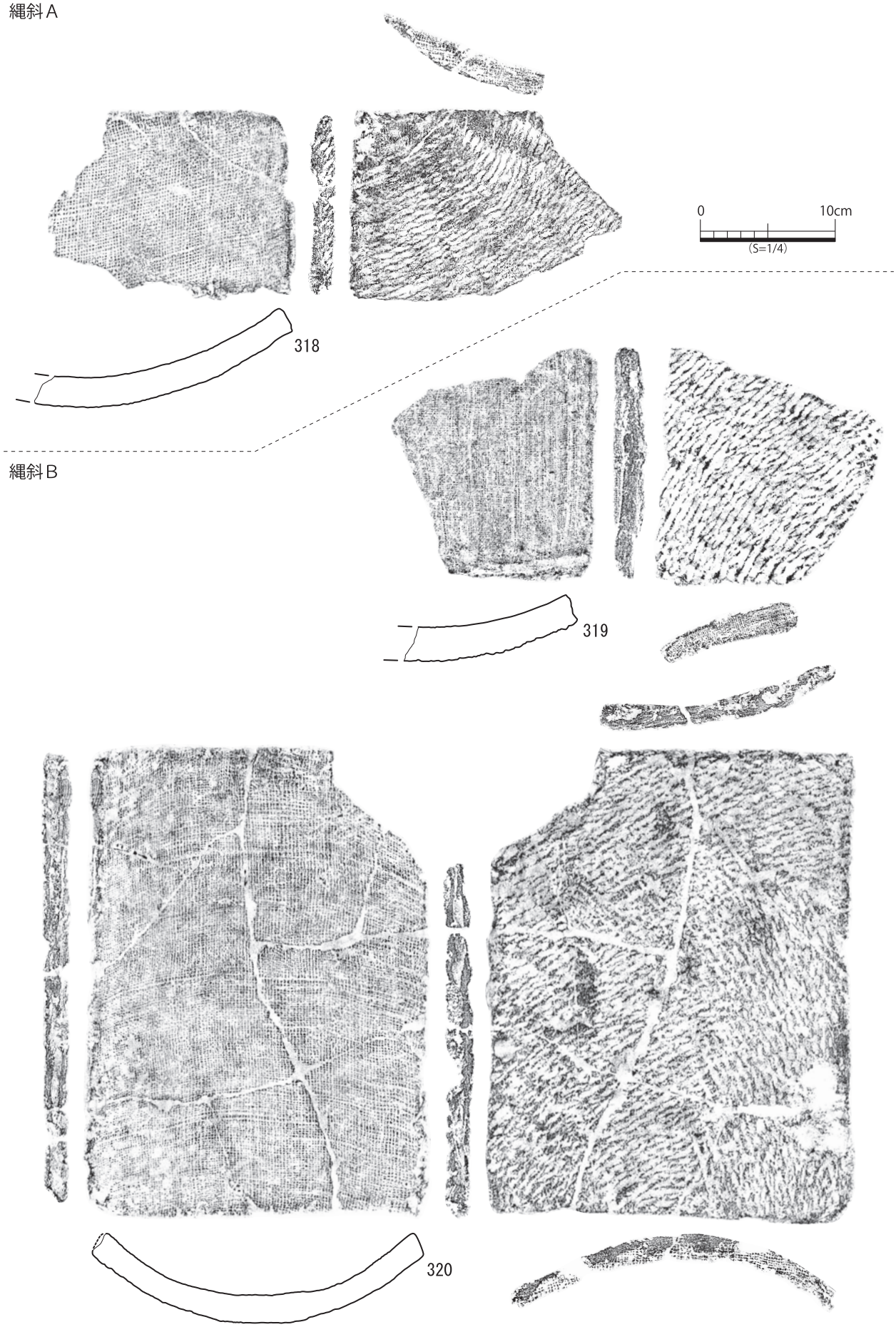


第 103 図 女瓦 縄縦 I ・ J （S=1/4）

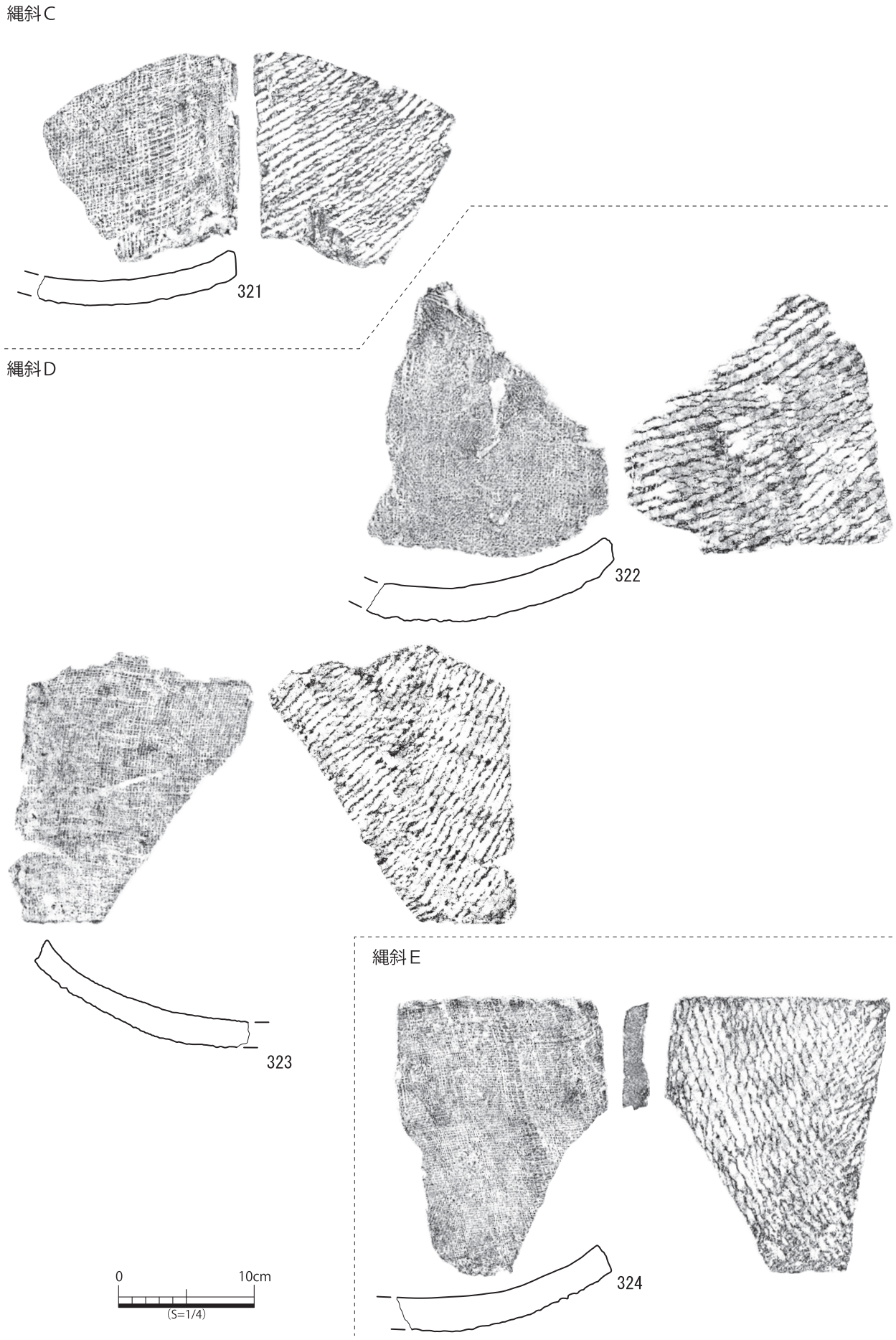
縄縦 K



第 104 図　女瓦 縄縦 K（S=1/4）



第 105 図 女瓦 縄斜A・B（S=1/4）

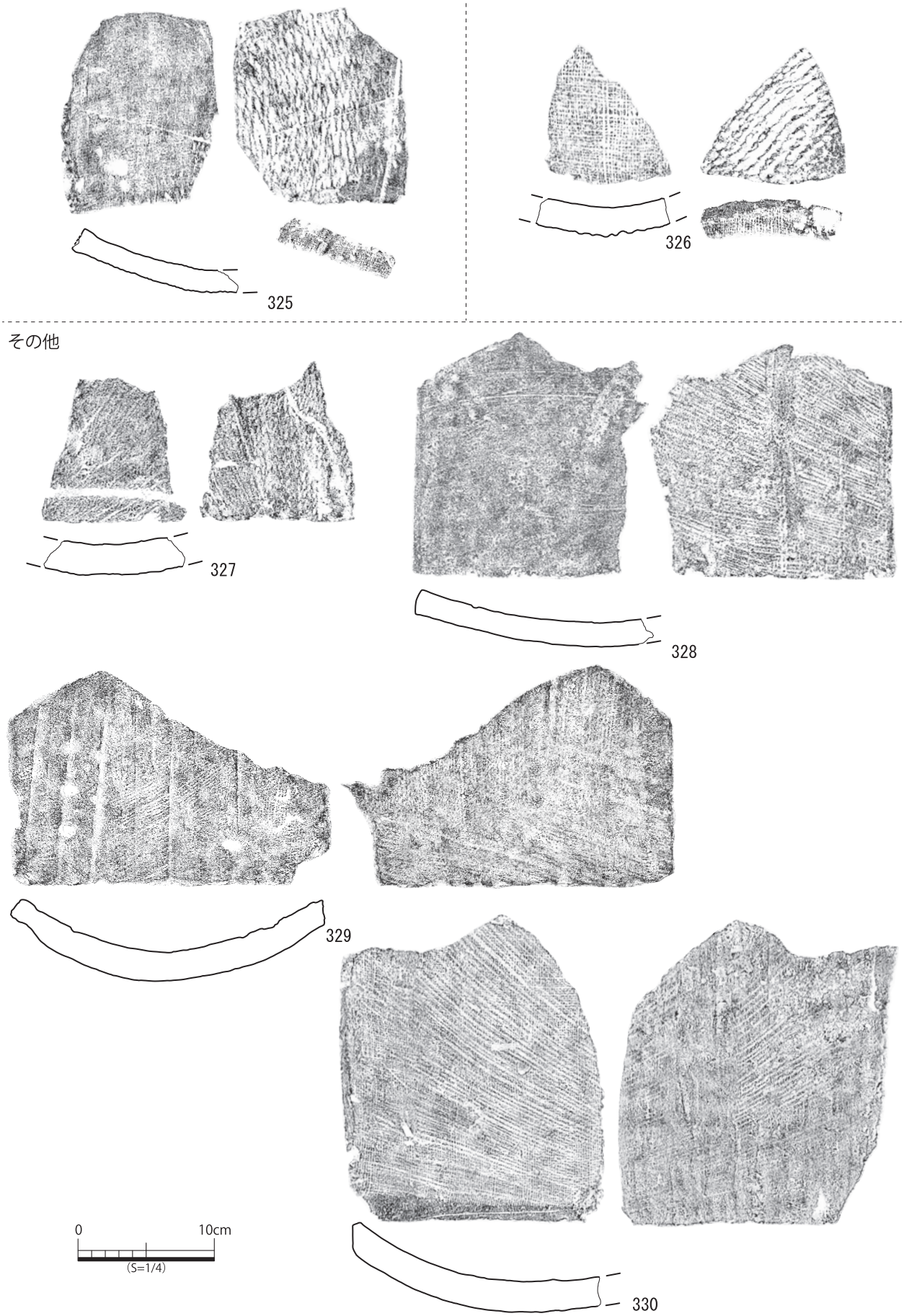


第 106 図　女瓦 縄斜 C ～ E （S=1/4）

縄斜Ｆ

縄斜Ｇ

その他



第 107 図　女瓦 縄斜Ｆ・Ｇ・その他（S=1/4）

に叩いている。311 を見ると凹面に模骨痕と糸切痕、布目痕が見られ、技法は粘土板桶巻作りと考えられる。色調は色調は灰色～灰白色系で、焼成は良である。

縄縦Ｊ（第 103 図 － 314・315）

縄縦Ｋは縄目の状態が細長く、叩き方は全体的に叩いている。個体数は他の縄叩きと比べ少ない。314 は凹面に布目痕を切るような形でヘラ状圧痕のような痕跡があるが小片であるため詳細は不明である。他の個体で布端痕が見られることから粘土板一枚作りと推測される。色調は灰白色系で焼成は良好である。

縄縦Ｋ（第 104 図 － 316・317）

縄縦Ｋは縄目の状態がやや筋状を呈しており、叩き方は全体的に叩いている。316 を見るに長辺の法量は約 36.0㎝である。凹面に糸切痕が見られるため素地は粘土板と考えられる。色調は灰白色～灰色系で焼成は良のものが多い。胎土に大きめの白色粒や黒色粒を含み粗くなる。

縄斜Ａ（第 105 図 － 318）

縄斜Ａの叩き具の状態は縄斜系の叩き具の中では細かいが、縄縦系のものに比べると粗めである。叩き方は全体的に叩いている。318 のように側面に叩き具や端面に布目痕が見られることから技法は粘土板一枚作りと考えられる。この痕跡は他の個体でも多く見られる。色調は灰白色～にぶい黄橙色系で焼成は良のものもあるが軟質なものが多い。

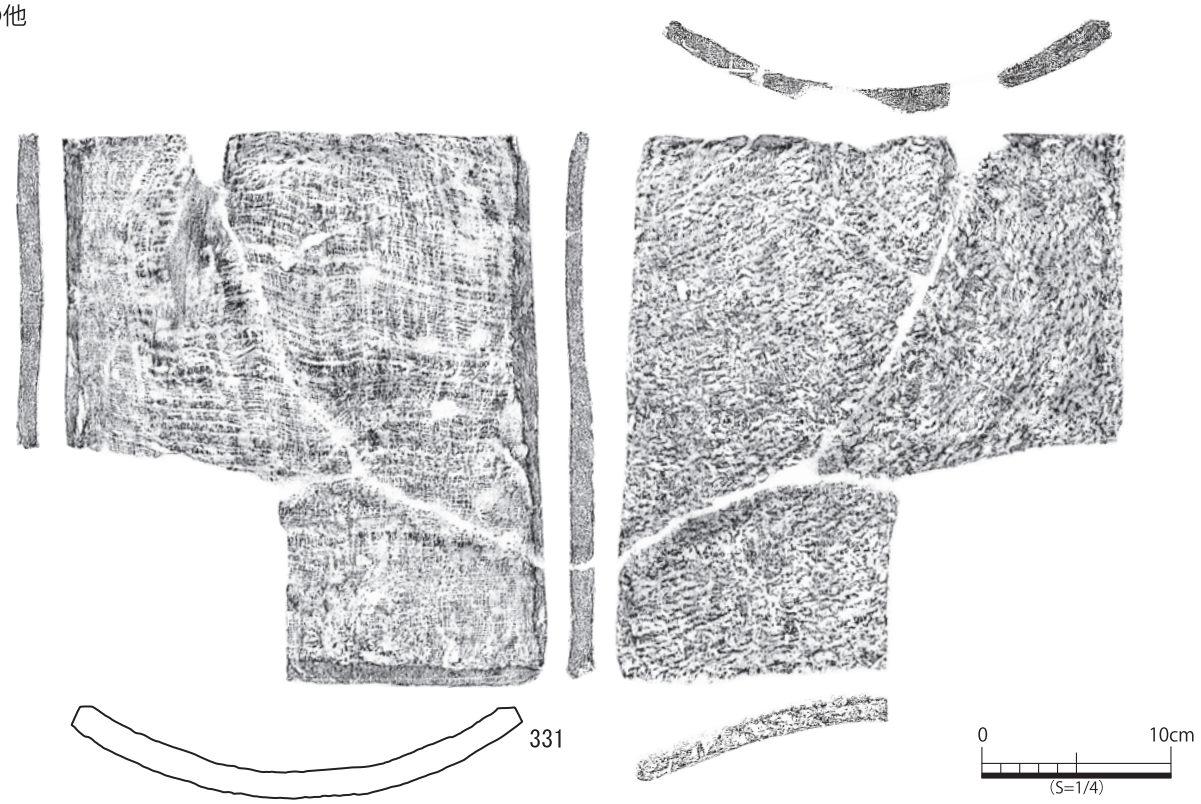
縄斜Ｂ（第 105 図 － 319・320）

縄斜Ｂの叩き具の状態は太めの叩き具で、叩き方は全体的に叩いている。側面に凸面叩きの際におしなべられた粘土が側面側にバリ状に残っているのも特徴である。そのため、側面のケズリ成型は行われなかったと解釈でき、布目痕が残るものが多い。技法は粘土一枚作りと考えられる。色調は灰白色系で、焼成は良～軟質である。

縄斜Ｃ（第 106 図 － 321）

縄斜Ｃは叩き具の状態は太めの叩き具で、叩き方は全体的に叩いている。叩き具の状態は縄斜Ｂと類似するが、側面にバリ状の痕跡が見られず、ケズリ 1 度の成型を行う。色調は灰白色系で焼成は良好なものもあるが、基本的には良～軟質である。

その他



第 108 図 女瓦 その他（S=1/4）

縄斜Ｄ（第 106 図 － 322・323）

縄斜Ｄの叩き具の状態は極太の叩き具で、叩き方は全体的に叩いている。縄斜Ｂと同様に側面に粘土のバリが見られる。技法は粘土板一枚作りと考えられる。色調は灰白色系で焼成は良好～良であるが、若干軟質なものも含む。

縄斜Ｅ（第 106 図 － 324）

縄斜Ｅの叩き具の状態は極太の叩き具で、叩き方は全体的に叩いている。縄斜Ｄと違い側面に粘土のバリを残さない。色調は灰白色～灰黄色系で焼成は良好～良であるが、若干軟質なものも含む。

縄斜Ｆ（第 107 図 － 325）

縄斜Ｆの叩き具の状況は太めで縄目が筋状を呈し、叩き方は全体的に叩いている。縄斜Ｂと同様に側面に粘土のバリが見られる。端面に布目痕があり、粘土板一枚作りと考えられる。色調は灰色系で焼成は良好であり、若干軟質の個体がある。

縄斜Ｇ（第 107 図 － 326）

縄斜Ｇの叩き具の状況は太めで縄が筋状を呈し、縄斜Ｆより縄の大きさが若干大きめである。端面に布目痕があり、粘土板一枚作りである。色調は灰色系で焼成は良好であり、若干軟質の個体がある。

4）その他の女瓦（第 107・108 図 － 327 ～ 331）

328・330 は凸面に叩き具による整形を行っていない個体で一定量出土している。329 は粘土板桶巻作りの女瓦で凹面に模骨痕と連結に伴う紐痕が見られる個体である。331 は凸面にもみ殻等の種子を塗した個体でこちらも一定量出土している。また、朱が付着しているものがある。色調はにぶい黄橙色系で焼成は軟質なものが多い。

5）小結

叩き具の種類から見る傾向は、格子叩き具の種類が平行叩きと縄叩きの倍近い種類のものが確認されている。要因は特定できないが、焼成や側面調整等のヴァリエーションが見られることから、時期・窯跡・工人差によって生じるものと考えられる。縄叩きは縄目の状態や叩き方を基準に分類を行ったが、叩き具の縄の本数を基準にした分析等を行えば細分できる可能性はある。

格子叩きの出土量を見ると正格子Ａ・Ｂ、長格子Ａの割合が圧倒的に高い。前述したように、各種類内外で製作技法や焼成等にヴァリエーションが見られる。

縄斜系全体に見られる傾向であるが、色調が灰白色～にぶい黄橙色系のものが多く、色調だけで判断すると焼成は軟質と思われるが、一定量焼成が良好で硬質なものがある。ただ、作り方も雑になり、側面のケズリ成型をせず、無調整のものが多い。側端面に布目痕や縄叩きがあり、技法は粘土板一枚作りと考えられる。このような特徴からⅣ期以降に下るものと考えられる。一部の型式は破断面に粘土紐の痕跡が見られないことから粘土板と考えられるが、糸切痕が明瞭に見えるものがほとんどない。

第６節　道具瓦

整備に伴う発掘調査では鬼瓦、熨斗瓦、隅木蓋瓦、面戸瓦、雁振瓦、鳥衾瓦、隅切瓦が出土している。出土量は面戸瓦が最も多く、コンテナ 13 箱分（20 ℓ）出土している。

1）鬼瓦（第 109 ～ 111 図 － 332 ～ 354）

鬼瓦は主に創建期に位置づけられる平城宮式鬼瓦と中世期に下る鬼瓦の２種類が出土している。

332 ～ 339 は創建期ごろの鬼瓦で、破片であるものが多いが、文様構成が同一であることからいずれも同笵である可能性がある。332 ～ 339 は鬼瓦Ａと呼称する。332 ～ 334 は同一種類と考えられる平城宮式鬼瓦の個体と考えられる。他の個体でも讃岐国分寺で出土するものは顔面のみを表す図像である。顔面部分は上顎、下顎を描いているが、下顎は抉りによって歯が部分的な表現である。平城宮式鬼瓦に比べ小型の歯である。目等の中心の顔面模様は破損しているため詳細は不明である。顎髭は上面に向かって伸び、左右対称に展開する。突帯の外縁をつける。突帯の部分の断面は他の個体も含め、突帯部分に粘土を先に詰めてから顔面等の平面部に粘土板を詰めている。外形は幅が横に広がり、緩やかなアーチを描く型である。抉りは横長半円形である。平城宮式と異なるのは、抉り部分から外縁に向かって「ハ」字状に斜めにカットしている。335・337 も前者と同笵と考えられる個体である。裏面は粗いハケ状の工具でナデ調整している。335 と 336 は顔面部分である。いずれの個体も色調はおおよそ灰白色～にぶい褐色系で焼成は良である。胎土も精良であり、同一生産地で生産されたと推測している。

340 は平城宮式と異なる型式である。下部の部分である外縁はなく、３条の突線が巡ると考えられる。抉りが見られる髭が僅かに残る。

341 ～ 354 は中世以降のものと考えられる鬼瓦である。全体の様相が分かる程の個体はなく、全体の文様構成は不明である。341 ～ 346 は外周の珠文帯である。珠文帯は 345・346 のように沈線で区画するものと 341・344 のように無区画のものがあり、2 種類の笵種があったと推測している。珠文は直径約 4 ㎝で陰刻に表現している。345 の抉りは縦長半円形である。347 は髭の部分である。348 ～ 351 は顎や牙の部分である。353 は眉の部分と推測される。352 は鼻の部分である。この時期の個体はほぼ全てで燻焼きに近い焼き方で表面が暗褐色のものが多い。胎土は精良である。時期は詳しい年代は再度検証する必要があるが、鼻や珠文帯の形状、抉りの形状等から鎌倉後期から室町時代前期までの所産と推測される。

2）熨斗瓦（第 112 図 － 355 ～ 358）

熨斗瓦は上面の短辺の長さを基準に大小２種類確認でき、大きさによって大棟や降棟等に使い分けていたと推測される。また、長辺が残存しているものが少なく、長辺を含めた検証が困難であったため、長辺と短辺を含めた分類を行うと細分できる可能性はある。今回は、短辺を基準にした分類を提示する。

355・356 は短辺が短いもので熨斗Ａ種と呼称する。短辺幅は約８～ 10㎝台のものである。凸面はナデ整形を行うものがあるが、355・356 のように縄叩き（種類不明、縄縦系）による整形をするものが多い。356 の凹面は布目痕と模骨痕があり、桶巻作りである。側面はケズリ１度の成型である。色調はいずれも灰色で焼成は良好であり、他の個体も同様の傾向にある。

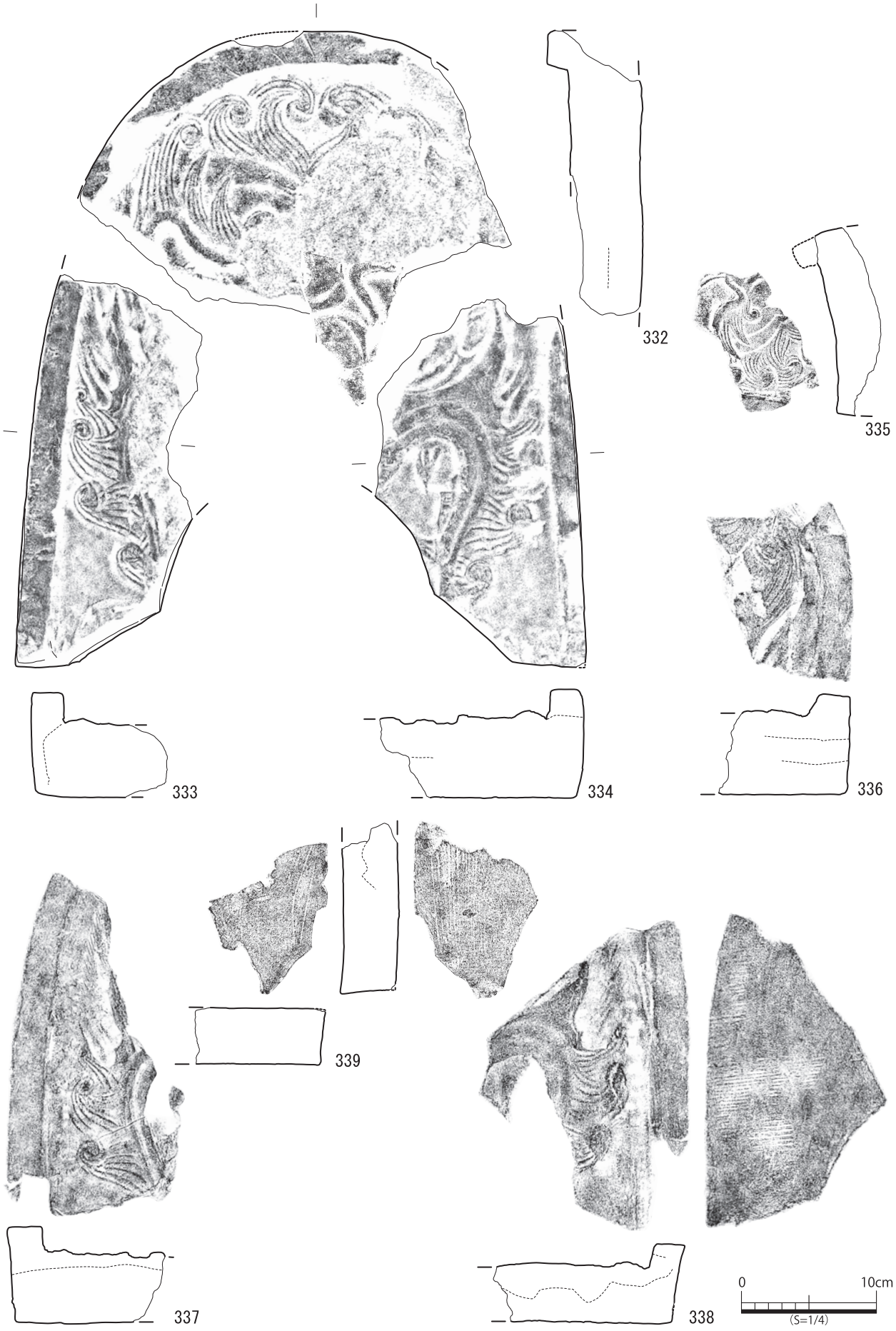
357・358 は短辺が長いもので熨斗Ｂ種と呼称する。短辺幅は 13 ～ 15㎝台のものである。358 は長辺が残存し、約 24.2㎝である。凸面は熨斗Ａ種と同様にナデ整形を行うものがあるが、357 は縄縦Ｂが、358 は正格子Ｂの叩き具による整形を行う。357 の凹面は布目痕と粘土板合わせ目痕が見られる。粘土板桶巻作りである。358 の凹面は布目痕と糸切痕が見られる。側面はケズリ１度の成型である。色調はいずれも灰色系で焼成は良好あり、他の個体も同様の傾向にある。

3）隅木蓋瓦（第 112 図 － 359・360）

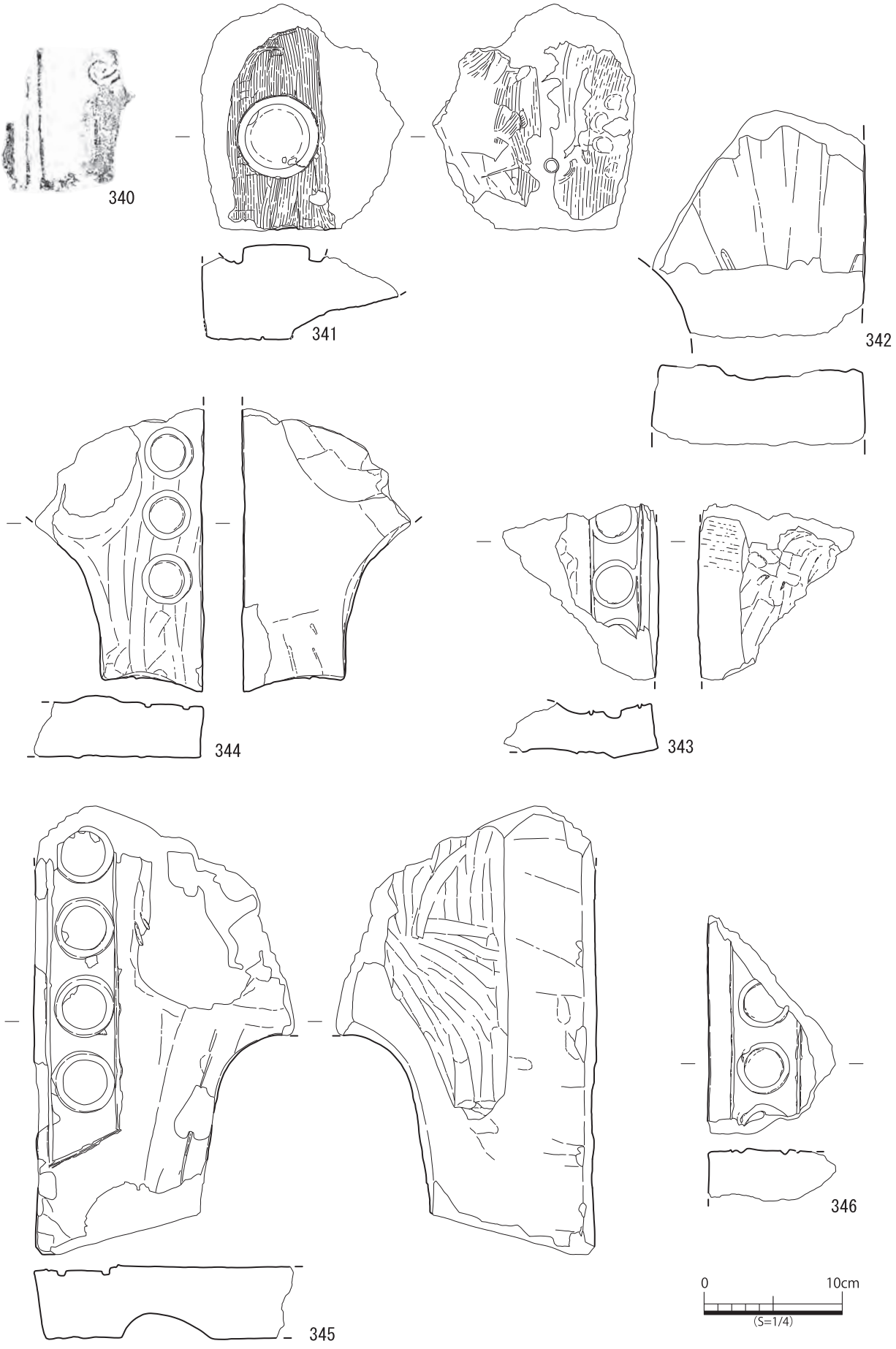
蓋型の上部の隅木蓋瓦である。僧房南雨落溝から１点（360）、鐘楼跡から１点（359）、計２点出土している。359 は胎土が緻密で焼成も硬質であり、丁寧なつくりである。天板上面、下面とも縦ケズリによって整形されている。

360 は一辺に折り返しの段が見られないことから上右側と推測されるが、他の寺院で見られる隅木蓋瓦のような三角形状の切込みや滑り止めの孔は確認できない。凸面は斜格子叩き、凹面は布目が見られる。上端面はケズリが見られる。側面は目立ったケズリ等は見られないことから、女瓦等を折り曲げて段を形成したと推測される。色調は灰色で焼成は良である。

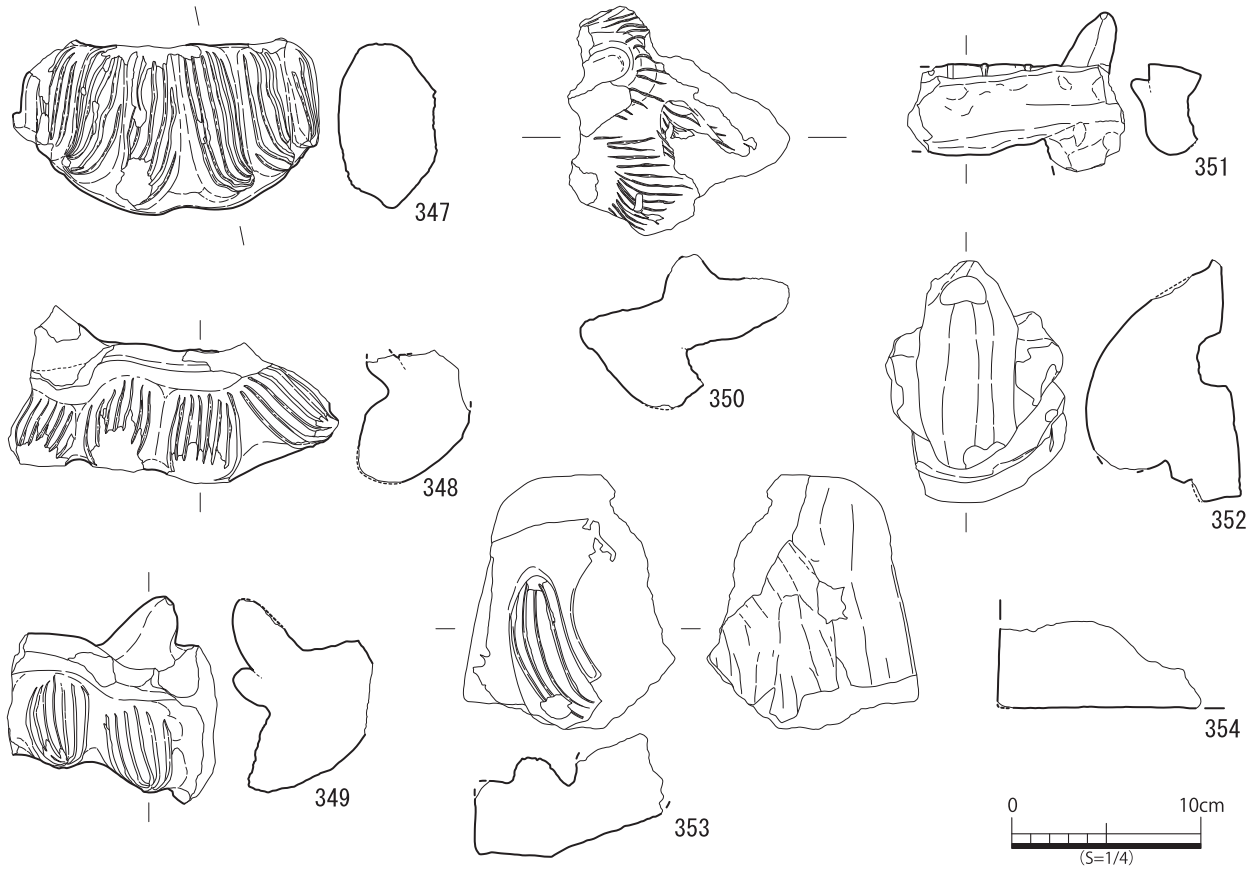
２点とも技法や胎土等が異なっており、丁寧な作り



第 109 図 鬼瓦①（S=1/4）



第 110 図　鬼瓦②（S=1/4）



第 111 図 鬼瓦③（S=1/4）

から雑なものになると考えられることから、前者が古いものと考えられる。

4）面戸瓦（第 113 図 － 361 ～ 363）

面戸瓦はいずれも蟹面戸であり、左右下部を切り欠き中央部を舌状に作り出すものである。側面の弧となる部分は内反するものと外反するものがあり、今後の調査等に詳細な検討が求められる。破損しているものが多いが短辺が約 9.5㎝前後とほぼ同規格のものが生産されたと考えられる。361 は凸面をナデ整形しているが、縦縄系の叩き具が残存している。凹面は上下部に 1 度の調整が施されている。362 は凸面の上部に 1 度の調整が施されている。363 も上下部と側面に 1 度の調整が見られる。実測していない個体も含め、調整を入れるものが多いことから丁寧な作りである。焼成胎土が熨斗瓦等と酷似することから同時期に製作された可能性が考えられる。361 と 363 は回廊北雨落溝（SD6132）から出土しており、他の個体も含め回廊跡の出土量が比較的多い。

5）雁振瓦（第 113 図 － 364・365）

雁振瓦は 364・365 である。両点共通してみられる特徴として、玉縁部凸面に縄叩きの痕跡が見られること、凹面の側端面側に調整を 1 度入れ、丁寧に作ることである。男瓦の分析方法を援用すると玉縁の形は玉縁 b となる。玉縁の形や調整を幅広に入れる特徴から中世以降の遺物と推測される。

6）鳥衾瓦（第 114 図 － 366 ～ 368）

鳥衾瓦は大小で 2 型式 3 種類に分類でき、計 12 点出土している。第 2 節で既述したが、1 つは SKM02 と SKM03 の大型化したもので平城宮でも見られる。これを鳥衾 A 型式とし、型式名は旧来どおり、SKM02L と SKM03L と呼称する。小型の SKM03A と法量や文様を比較すると、瓦当径が約 23㎝と大型化したものは周縁に鋸歯文がいずれも追加される。SKM02L は珠文も追加され、SKM03L と外区と周縁の文様の統一化を図った可能性がある。接合技法は、概報ではいずれも接合式と考えられていた（松本 1986）。しかし、SKM03L（368）のように瓦当裏面に支持土がなく SKM03A と同様に一本作りの可能性もある。色調はにぶい黄橙色～灰色で焼成は基本的に良～良好で灰色系は硬質ものが多い。

2 つ目は 366 で推測される直径が約 10㎝前後と小型のもので瓦当厚が約 7㎝と厚いものが 1 点出土しており、鳥衾 B 型式と呼称する。中世以降に見られる